

630-1



1200900021208

310

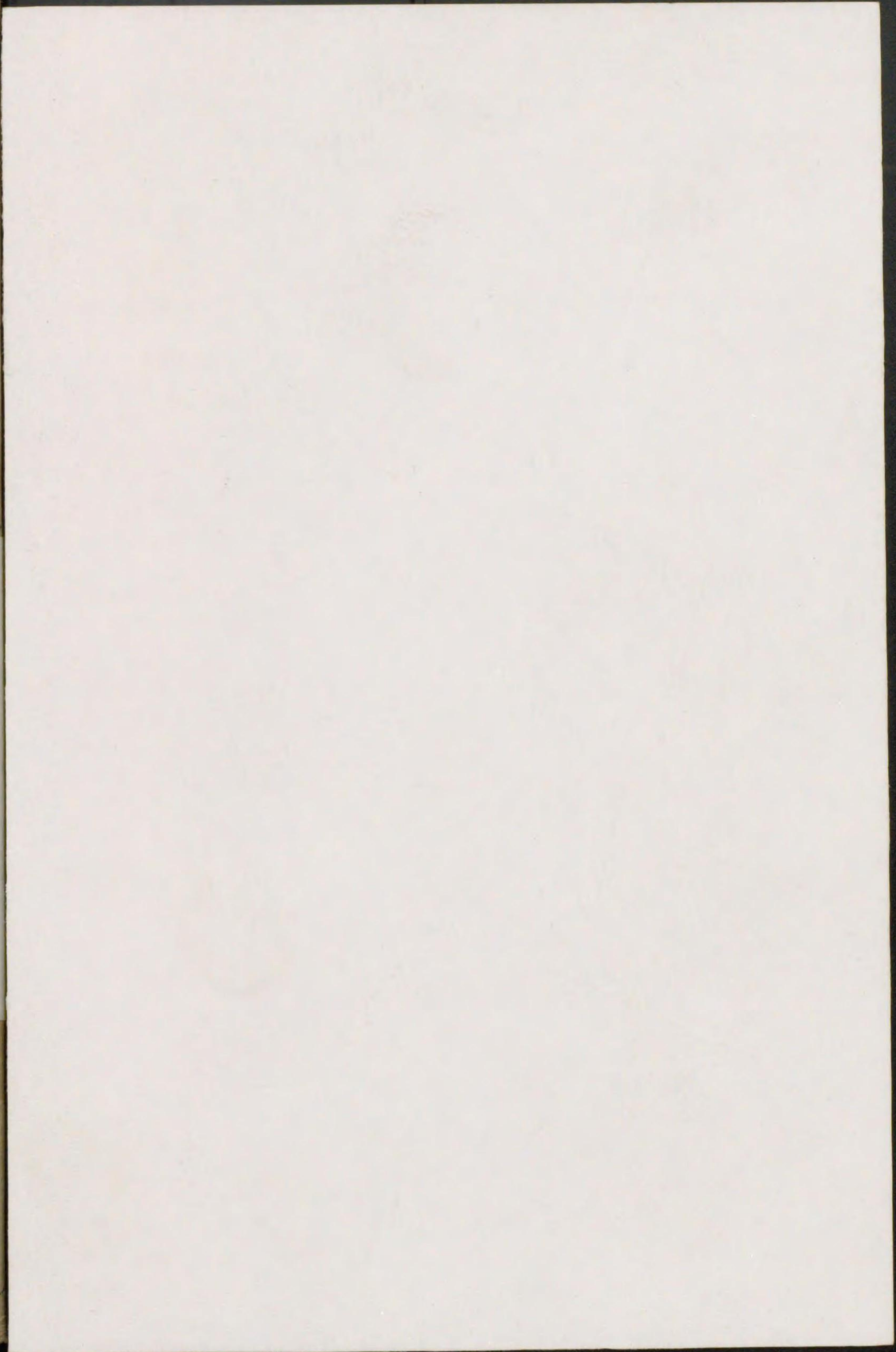
寺島名作文庫

底 ん ど

作一キリーゴ

譯薰内山小

版堂陽春



世界名作文庫

— 310 —

底んど

キーリーゴ
譯 薰 内 山 小

堂 陽 春

630-1

どん底



I 種
W



1200900021208

人物

- ミハイル・イワノキツチ・コスチリヨフ 五十四歳。木賃宿の主人。
- ワシリイサ その妻。二十六歳。
- ナタアシヤ 妻の妹。二十歳。
- メドエデフ 右兩人の伯父。巡查。五十歳。
- ワシカ・ペベル 二十八歳。
- アシドレエ・ミトリツチ・クレシチ 錠前屋。四十歳。
- アンナ その妻。三十歳。
- ナスチャ 娘。二十四歳。
- クワシニヤ 饅頭賣の女。四十歳位。
- ブブノフ 帽子屋。四十五歳。
- サチン 四十歳位。
- 役者 四十歳。
- 男爵 三十二歳。
- ルカ 巡禮。六十歳。

第一幕

- アリヨシカ 靴屋。二十歳。
- グリライ・ゾオブ 四十歳位。人足。
- 韃靼人 四十歳位。人足。
- 浮浪人数名 名なし。無言。

洞穴の如き地下室。厚き丸天井、壁土剥げ去り、煤にて黒くなりゐる。日の光は上手の角窓を通じて、上より下へ、見物席に向ひて、舞臺の上に落つ。上手の隅はペベルの部屋となりをり、薄き羽目にて仕切らる。この部屋の戸口の側にブブノフの寢床あり。下手の隅には大なる露西亞風の暖爐。下手の厚き壁には戸口ありて、クワシニヤ、男爵、ナスチャの三人が住みをする臺所へ通ず。暖爐と壁の戸口との間に幅廣の寢臺あり、汚なき木綿の垂幕にて蔽ふ。壁といふ壁の側には必ず寢床据ゑ寄せてあり。下手の壁の方には、萬力と小さき鐵砧との取りつける切株あり。その前に又小さき切株ありて、クレシチこれに坐る。かれは古き錠を二つばかり鍵に合ふやうに細工しゐる。足元には色々の鍵を通したる針金の大きな輪二つ、歪みたるブリキのサモワル、金槌、鑊。部屋の中央には大なる机、側に床几二脚、腰掛一脚、總て白木なり、總て汚なし。饅頭賣の

女クワシニヤ、机に向ひ、サモワルの世話をなしつゝ、女房役を勤めゐる。少し離れて、男爵、黒パンを噛りゐる。ナスチャは腰掛に腰をかけ、机に肘を突き、綴ぢ目の切れたる本を讀みゐる。寢臺の上、垂幕のうしろに、アンナ寝ねたり。絶えず咳するが聞こゆ。ブブフはおのが寢床に腰をかけ、膝の間に帽子の木型を支へて、引きほどきたる古きズボンの布をこれに當て、首かしげつつ、寸法に合せて、帽子の形にこれを切る。側に壞れたる帽子の箱あり。これにて帽子の庇をつくる。なほ、油布、布屑など散らばりゐる。サチンは今起きたるばかりにて、寢床の上に横たはり、唸りゐる。暖爐の上には、役者横たはりゐて折々咳の音、頻に寢返りする氣はひ。見物には姿見えす。早春の或朝。

男爵。それからどうしたい。

饅頭賣。それでおしまひだよ。もう懲り懲りさ……焼蝦を百疋持つて來たつて、誰が二度とお嫁なんかに行くものか。(サチン唸る)

帽子屋。(サチンに)何を唸つてやがるんだ。

饅頭賣。この氣儘な暮らしを、たつた男一疋の爲に捨てて詰まるものかね。も一度どつかの野郎の腰巾着にならうなんて……そんな事は夢にも思はないね。あたしやこれでも今、人に後指をさされるやうな暮らしをしてゐるんぢやないんだからね。亞米利加から宮様が迎ひに來たつて……誰が行く

ものか。

錠前屋。嘘をつけ。

饅頭賣。なんだと。

錠前屋。嘘をつけと言ふのだ。てめえはアブラムカと一緒になるつもりぢやねえか。

男爵。(ナスチャの本を取り上げ、表題を讀む)『悪縁』か。(笑ふ)

ナスチャ。(本の方へ手を延ばして) おくれよ……返しておくれつたら。よう……冗談しちやいけな

いよ。

男爵は女をちつと見ながら、本を高く振り廻す。

饅頭賣。(錠前屋に) 嘘つきとはお前の事ぢやないか……赤山羊め。よくもそんな厚かましい口が利

けたもんだ。

男爵。(本にて軽くナスチャの頭を叩く) おめでたい女だ。

ナスチャ。(本をひつたくる) お寄越しつたら。

錠前屋。(饅頭賣に) おめえは立派な令夫人様だよ……だけど、やつぱりアブラムカと一緒になるんぢやねえか……そればかりに氣を揉んでやがる。

饅頭賣。當り前さ。それがどうしたい……お前さんは何だ……そこに寢てゐるおかみさんを、半殺しにするまで打ちやががつたぢやないか。

錠前屋。黙れ。鬼婆。てめえの知つた事ぢやあねえ。

饅頭賣。はは。ほんとの事を聞きや耳が痛いだらう。

男爵。さあ始まつた。ナスチャ。おい。

ナスチャ。(頭をあげずに)なんだよ……煩さいねえ。

錠前屋の妻。(垂幕より首を出だし)もう夜が明けた。どうかお願いだから……そんなに叫こたらないで

おくれよ……喧嘩をしないでねえ。

錠前屋。またぐづぐづ言ひ出したな。

錠前屋の妻。毎日毎日、喧嘩ばかりしてゐるんだねえ……あたしはもう死ぬんだから、せめてその間

だけでも静にしてゐておくれよ。

帽子屋。騒いだつて往生の邪魔にはなるめえ。

饅頭賣。(錠前屋の妻の寢床に歩み寄る)ねえ、をばさん。よくもあんな悪黨と一緒になつてゐて、

辛抱が續いたもんだねえ。

錠前屋の妻。なんにも言はないでおくれよ……なんにも言はないで。

饅頭賣。好いよ。好いよ。可哀さうに。お前さんは貞女だねえ……胸の方はまだちつとも好くならな

いかい。

男爵。(饅頭賣に)クワシニヤ、もう市場へ行かうぜ。

饅頭賣。すぐ行くよ。(錠前屋の妻に)肉饅頭の暖あつたかいのも食べて見ないかい。

錠前屋の妻。いいえ、澤山……有難いけれど、もう食べたところでしやうがないからねえ。

饅頭賣。まあお食べよ。暖あつたかいものを食べると、體に好いんだから……ほんとにさ。ぢやあ、お皿の

中へ入れて別にしとくからね……食べたくなつたらお食べよ。(男爵に)御前ごぜん、さあお供致しませ

ろ。(錠前屋に)ふん。悪魔め。(臺所へ這入る)

錠前屋の妻。(咳す)はあつ、はあつ。

男爵。(ちよいとナスチャの首を突く)そんな物はうちやつておしまひよ……馬鹿。

ナスチャ。(咄つぶやく)早く出てお出でつたら……あたしがお前さんの邪魔をしてるんぢやないぢやない

か。

男爵、舌打をして、饅頭賣の後を追ふ。

サチン。(寢床より起き上がり)きのふおれを擲つたなあ誰だつたらう。

帽子屋。誰だつて構はねえぢやねえか。

サチン。さうよ、だが、なんだつて擲られたんだらう。

帽子屋。骨牌かるたをやつたらう。

サチン。ああ、やつたよ。

帽子屋。だからさういふ事になるんだ。

サチン。ひどい奴等だ。

役者。(暖爐の上より首を延ばし) 今に叩き殺されるかも知れねえぜ。

サチン。馬鹿野郎。

役者。馬鹿野郎だと。なぜよ。

サチン。分からねえな。二度叩き殺される奴があるか。

役者。(暫く黙して) 分からねえな……なぜだい。

錠前屋。まあ、降りて来て部屋でも掃^はけ。忘れ過ぎるぜ。

役者。てめえの知つた事ぢやねえ。

錠前屋。どうだか、おかみさんが来れば分かるこつた。

役者。糞くらへ。おかみさんが何だい。けふは男爵が掃く日ぢやねえか。あいつの番なんだ……男

爵。

男爵。(臺所より入り来る) そんな閑^{ひま}はねえよ……おれはクワシニヤと一緒に市場へ行かなくつちやならねえんだ。

役者。それをおれが知つた事かい……べらぼうな……だが、部屋はおめえが掃かなくつちやいけねえぜ。おめえの番ぢやねえか……おれは人の代りに働くのは厭^{いや}だよ。

男爵。勝手にしやがれ。ぢやあんとナスステニカが掃いて呉れらあ……な、おい……『悪縁』先生。さあ、

立つた、立つた。(ナスチャの本を奪ふ)

ナスチャ。(立ち上がる) どうしようつて言ふんだよ。お寄越しつたら。圖々しい奴だ。紳士が聞いて呆れるよ。

男爵。(本を返して) な。おれの代りに掃き出してくれ。好いだらう。

ナスチャ。(臺所の方へ退場) 厭だよ……馬鹿にしないねえ。

饅頭賣。(臺所の戸口より、男爵に) さあ、かう。お前さんがなくなつたつて、掃除は誰かとするよ。(男爵退場) おい、役者さん。人に物を頼まれたら素直にして遣るもんだよ。肋骨^{あはらほね}が折れる程

の爲事^{しごと}でもないぢやないか。

役者。いつだつておれだ……へん……どうもおれには分からねえ。

男爵。(天秤にて籠を二つ臺所より擔ぎ出す。籠の中には腹のふくれたる壺あり。襪^{はろきれ}褌^{はろきれ}にて蔽はる) けふは馬鹿に重いぞ。

サチン。男爵などに生れて来た天罰よ。

饅頭賣。(役者に) 掃除をお忘れてないよ。(男爵を先きに立たせて玄關の方へ出で行く)

役者。(暖爐より匍ひ降りる) おれは五味を吸つちやいけねえんだ……毒なんだとよ。(自分を憐れむやうに) おれのオルガニズムはアルコホル中毒なんだとよ。(塞ぎ切つて寢床に坐る)

サチン。オルガアノン……オルガニズム。

錠前屋の妻。(錠前屋に) お前さん。

錠前屋。なんだい。

錠前屋の妻。あの、クワシニヤが……あたしに肉饅頭を置いてつてくれた筈だから……行つて食べといでよ。

錠前屋。(寢臺に歩み寄る) おめえ食はねえのか。

錠前屋の妻。食べない……食べたつてしやうがないもの。お前さんは穢かき人じんだから……食べなくちやいけないよ。

錠前屋。心配してるな。心配しちやいけねえ……なあに、ぢきに又好くなるんだから。

錠前屋の妻。食べといでよ。ああ。胸が押しつけられるやうだ……もう直ちこれもお終しまひになるんだね。

錠前屋。(女より遠ざかる) なあに……大丈夫……又好くなるよ……もうその験げんが見えてるんだ。(臺所へ退場)

役者。(急に夢からでも醒めたやうに、聲高く) きのふ病院で醫者がかう言つたんだ。お前のオルガニイズムにはもうすつかりアルコホルの毒が廻つてゐる。

サチン。(笑ひながら) オルガアノンだ。

役者。(強く) オルガアノンぢやねえ。オルガニイズムだ……オルーガーニイーズムーだよ。サチン。穢まつた穢まつた。

役者。(拒むやうに手を振りて) 馬鹿。おりや眞面目で言つてるんだ。好いか……おれのオルガニ

イズムには毒が廻つてゐる……だから、部屋を掃いて……五味を吸ふのは毒だと言ふんだ。

サチン。マクロピオチイク(長壽法)か……ははは。

帽子屋。今唸つたのは何だ。

サチン。詞よ……まだも一つあるぞ。トランススツェンデンタアル(超自然的)よ。

帽子屋。それは何のこつた。

サチン。知らねえ……忘れたあ。

帽子屋。ぢやあ、なぜそんな事を言ふんだ。

サチン。さうよなあ……おれ達の毎日使つてゐる詞に飽きが來たんだ。どれもこれも千遍宛ぐらゐは聞いてゐるからな。

役者。『詞ぢや。詞ぢや。詞ぢや』といふ臺詞が『ハムレット』の中にあるね。ハムレットか。實に傑作だなあ……おれはあの芝居で墓掘りを遣つた。

錠前屋。(臺所より出で來る) ところが、けふは箒を持つて芝居をするわけだな。

役者。詰まらねえ事を言ふねえ。(拳にておのが胸を打つ) オフィイリアどの。麻呂が罪も諸共に、祈りくりやれ。

舞臺の背後、遠くの方にて、陰鬱なる物音、叫び聲、巡查の呼笛よびこなど聞こゆ。錠前屋、坐りて爲

事をはじむ。鑼の音聞こゆ。

サチン。おれは、分かりにくい、珍しい詞が大好きさ……若い時分にやあ……電信の方を遣つてみたが……随分本は讀んだものだぜ。

帽子屋。おめえのやうな人間でも、電信の技手だつたことがあるのかい。

サチン。さうともよ。(笑ふ)綺麗な本があつたぜ……面白い詞がどつさりあつた……おれはこれでも教育のある人間だつたんだ。分かつたか。

帽子屋。それは聞いてるよ……もう百遍も聞いてるよ。もど何だつて、それを世間が構ふものか。さう言や、おれだつて元は毛皮屋さんだつた……これでも自分の工場を持つてゐたもんだ……おれの腕は、まるで眞つ黄色だつた——皮を染める繪の具でよ——肘ひじんとこまでまるで眞つ黄色なんだ。まあ、この世でそれを洗ひ落すやうなことがあらうとは夢にも思つてゐなかつたね……黄いろい手のまんまで墓へはひることだとばかり思つてゐたんだ……それが今になつて見ると、これだ……汚きたねえばかりだ……ほんとによ。

サチン。それがどうした。

帽子屋。それだけよ。

サチン。一體、何を話すつもりだつたんだ。

帽子屋。ただ……言つて見りやあ、そんなものだつてんだ……いくら外そとからこてこて塗つたところで

……ちきにみんな剝けてしまふものさ……ちきにみんな剝けてしまふものさ……ちきにみんな剝けてしまはあ……ほんとによ。

サチン。ふむ……いやに骨つぶしが痛むな。

役者。(腰を掛け、膝を抱く)教育なんて無意味なものさ。大切なのは天才だ。おれの知つてゐる役者にかういふのがあつた……やつと自分の書かきめき拔が讀めるくらゐな文盲だつたが、さて役をさせて見るといつでも小屋がみしみしいふ騒ぎだ……見物の喝采かっさいだよ。

サチン。おい。ブブノフ。おれに五錢くれ。

帽子屋。二錢きやねえよ。

役者。主人公を遣る役者は天才がなくちや駄目だ。ほんとによ。天才……といふのは、自分で自分の力を信じることだ。

サチン。五錢よこせ。そしたら、おめえが天才で、豪傑で、クロコダイルで、おまけに區長様だと思つてやらあ……おい、クレシチ。五錢呉れろよ。

錠前屋。糞くらへ。一度出したら切りがねえや。

サチン。馬鹿にするない。てめえが文無もんなしなことは先刻御承知だ。

錠前屋の妻。お前さん……息が詰まるよ……息が出来ないよ。

錠前屋。どうすりや好いんだ。

帽子屋。表の戸を明けてやんねえ。

錠前屋。うまく言ふぜ。おめえは寢床に坐つてゐるが、ありやあ地べたに坐つてゐるんだ……まあ、お座敷でも代へて貰つてから、戸を明けて遣らうよ……さもなくてせえ慄へてゐるんだ。

帽子屋。(平靜に) おれはどうだつて好いんだ……おめえの嬢かおが頼むんぢやねえか。

錠前屋。(陰鬱に) 黙つてりや切りがねえや。

サチン。ああ、頭ががんがんしやがる……ええ、人間て奴あ、なぜかうしよつちう。頭を擲なり合ふんだらう。

帽子屋。頭ばかりぢやねえ。ところ嫌はず擲るんだからたまらねえ。(立ち上がる) どれ、麻絲でも

探して来ようか……今日けふはまあ亭主の野郎ちつとも顔を見せやがらねえ……くたばりでもしやがつたかな。(退場。錠前屋の妻咳す。サチンは首の下に手を入れて、横になり、ぢつとしてゐる)

役者。(憂鬱にあたりを見廻し、錠前屋の妻の側に歩み寄る) どうだ。やつぱり悪いか。

錠前屋の妻。どうもこの部屋は息苦しくつて。

役者。ぢやあ支關へ連れてつて遣らうぢやねえか。さあ起きねえ。(寢臺の上に起き上がる病人を助

けて。古い毛皮をその肩に掛けてやり、女の支關の方へよろけて行くを支へてやる) さあ、さあ、

しつかりしなくつちやいけねえ。おいらだつて病人なんだ。アルコホル中毒なんだ。(木賃宿の亭

主コスチリヨフ入り来る)

亭主。(戸口にて) 御散歩か。こりやあお揃ひだ……牝山羊めやぎ牝山羊めやぎといふところだな。

役者。どけ、どけ……御病人のお通りだ。

亭主。さあさあお構ひなく。(讚美歌の節を口ずさみながら、亭主は不安らしく地下室を見廻し、ペ

ルの部屋の物音を聴かうとするやうに、首を上手へかしげる。錠前屋はむつとして、鍵をガチャ

リと言はせ、やけに鍵をそれに掛けながら、陰鬱なる目つきにて、亭主をぢつと見る) さて、御精

が出るかな。

錠前屋。なんだと。

亭主。御精が出ますかと言ふんだ……ええと……おれは今何を言ふつもりだつたかな。(小聲にて、

性急に) 嬢かおは来なかつたか。

錠前屋。見なかつたねえ。

亭主。(そつとペルの部屋に近寄る) 月たつた二兩がところで、随分おめえはのさばつてゐるなあ。

寢臺はかみさんが使ひ通どほしだし、おめえはしよつちうそこに坐つてゐる……なあ。五兩がところは大丈

夫あるぜ。ほんのこつた。二分は値上げをしなくちやならねえ。

錠前屋。いつその事おれの首に繩をつけて絞め殺してしまふ方が好いぢやねえか。もう棺桶へ片足突

つ込んでやがるくせに、まだ金を取る氣でゐやがる。

亭主。おめえを絞め殺してどうなるもんか、誰の徳にもなりやしねえ。まあ、精々生きてゐて、たん

と好いことをするさ……おれは二分値上げをして、それでお燈明の油を買ふんだ……おれの供へた油が、聖像の前で燃えりやあ……お互の罪障も消滅するといふもんだ……おめえはまあ、自分の罪障などといふことは思つても見ねえ方だらうが……ええ、おめえも随分好くねえ男だ、かみさんが病氣になつたのも、考へて見りやあ、おめえのお蔭だ……おめえを好く人間は一人もねえ、おめえを敬ふ人間は一人もねえ……第一その爲事が喧しくていけねえ、近所迷惑だ。

錠前屋。(どなる) てめえ、おれを……追ひ出しに來やがつたのか。
サチン、聲高に唸る。

亭主。(身を竦めて) この男は、まあ……どうしたんだ。

役者。(入り来る) やつと玄關まで連れて行つてやつた。可哀さうな女よ……寒いから上手にくるんで來て遣つたよ。

亭主。おめえは親切者だ、感心な男だ……今にきつと報があるぜ。

役者。いつ有るんだ。

亭主。あの世でよ……あの世へ行くと、おれ達のした事に、一々きつと報があるよ。

役者。どうでえ。いつそのこと、ここでお前さんがおいらの善心にお報い下さるつてことにしちやあ。

亭主。どうすりや好いんだ。

役者。借金を半分負けてくんねえ。

亭主。へ、へ。冗談もんだぜ。いつでも人を馬鹿にしやがる……一體親切なんてものか、金で買へると思つてるのかい。親切といふものは、この世のどんな寶よりも尊いものだ。ところでおめえの借金……やつぱり借金だ。そりやそれで拂はなけりやならねえ……おれのやうな年寄には、誰が親切を盡すもんだよ。

役者。糞爺め。(臺所へ退場)

錠前屋も立ち上がりて、玄關の方へ行く。

亭主。(サチンに) 誰だな、今出て行つたのは。錠屋さんかい。あいつ餘つ程おれが嫌ひだと見える。へ、へ。

サチン。おめえの好きな奴が何處にあるものか……悪魔でもなけりやあ。

亭主。(冷笑して) さう言つたもんでもねえ。おれはこれでもおめえ達が大好きなんだ……宿もねえ。頼るところもねえ、哀れな人間だと思つてるんだ……(急に、口早に) ワシカは内か。

サチン。見て見ねえ。

亭主。(ワシカ・ペベルの部屋の前に行き、戸を叩く) ワシカ。

役者、臺所の戸口に現る、何かむしやむしや食つてゐる。

ペベル。(内より) 誰だ。

亭主。おれだよ。おれだ。ワシカ。

ペベル。(内より) 何か用か。

亭主。(退いて) まあ明けてくれ。

サチン。(わざと亭主の方を見ずに) いつもなら、とつくに明けるところだが……一件が中にあるんでな。

役者、咳拂ひす。

亭主。(不安らしく、小聲にて) へえ。誰か中にあるつて。なんとか、そんなことを言つたね。

サチン。ふむ。おれに訊くのか。

亭主。なんとか言つたね。

サチン。なんでもねえよ……唯ちよいと……ひとりごと 獨言を言つたばかりさ。

亭主。氣を附ける。うっかり冗談を言ふな……好いか。(ひどく戸を叩く) ワシカ。

ペベル。(戸を開く) なんだ。やかましい。

亭主。(ペベルの部屋を覗き込む) おめえにその……あのなあ。

ペベル。錢でも持つて來たのか。

亭主。少しおめえに話があるんだ。

ペベル。錢を持つて來たかよ。

亭主。錢つて……何の。

ペベル。時計の代七兩よ……分つたらう。

亭主。どの時計のよ……あ、おめえ、何だな。

ペベル。とぼけるない。きのふ、みんなの見てゐる前で、懷中時計を十兩に賣つてやつたぢやねえか

……三兩だけは確に貰つた。あとの七兩を寄越せと言ふのよ。何も文句はねえ筈だ。何をきよろきよろしてやがるんだ。こんなところへはひり込んで來やがつて、みんなの邪魔をしてやがるくせに

……肝心なことを忘れてゐやがる。

亭主。しつ。まあ、さう言ふない。だが、あの懷中時計は。

サチン。盗んだものよ。

亭主。(嚴格に) おれは盗んだものなんか買はねえよ……よくもおめえは。

ペベル。(亭主の肩を捕へて) やい……ぢやあ、何だつておれを起しやがつたんだ……何の用があるんだ。

亭主。な、なんにもありやしねえんだよ……おれはもう歸るよ……そんなに怒るなら。

ペベル。歸れ、歸つて錢を持つて來やがれ。

亭主。(出て行きながら) 亂暴な奴だ。ああ、ああ。

役者。好い喜劇だつた。

サチン。ほんとによ。好い氣味だった。

ペベル。一體、何しに來やがつたんだらう。

サチン。(笑ひながら) 分からねえのか。蟻かまを探しに來たのよ……おい、ワシカ……なぜ遣つつけちまはなかつたんだ。

ペベル。あんな野郎のお蔭で、大事な一生を棒に振つて溜まるものか。

サチン。無論巧く遣らなくつちやいけねえ。それから、かみさんと一緒になつて……この木賃宿の亭主になるんだ。

ペベル。冗談言ふない。おめえ達でおれの宿屋をすつかり飲んぢまふんだらう。おまけにおれまで飲んぢまはうと言ふんだらう……一體おれは人が好過よすぎるんだ……(寢床に腰をかける) 老ぼれめ。

折角好い氣持に寢てゐるところを、すつかり起してしまやがつた……丁度今素敵な夢を見てゐたんだ。おれが釣をしてゐるとな、不意と大きな鱒ますが懸かつたんだ。鱒だぜ……夢でもなけりや、あんな大きな奴は見られねえ……おれは絲が切れるかと思ふ位ぐいぐい引つ張つた、それから手網たまでしやくはうとすると……駄目だ。

サチン。そりあ鱒ぢやねえ。ワシリイサだ。

役者。ここのおかみさんなら、もうとうに網の中へへえつてらあ。

ペベル。(腹を立てて) よしやあがれ……又かみさんだ。

錠前屋。(玄關の戸口より入り來る) べらぼうに寒いや。

役者。なぜアンナを連れて來ないんだ。凍こごえつちまふぜ。

錠前屋。ナタアシユカが臺所へ入れてくれたよ。

役者。親爺おやぢがおつぼり出すだらうぜ。

錠前屋。(爲事しごとにつく) ナアタシユカがもう直ぢき連れて來てくれるよ。

サチン。ワシカ、五錢くんねえ。

役者。(サチンに) たつた五錢か。ワアシヤ、廿錢くんねえ。

ペベル。早く出さねえと……今に一兩よこせと來るだらう……そらよ。(役者に金を與へる)

サチン。素晴らしいもんだ。世の中に泥坊ぐらゐる豪えらい人間はねえ。

錠前屋。泥坊はわけなく金を儲ける……泥坊は働かねえ。

サチン。わけなく金を儲ける奴は澤山あるが、わけなく金を使ふ奴は少すくねえて。爲事しごとか……爲事が面

白しろけりやあ、おれだつて働かあ……爲事が樂たのしみになりやあ……人生は美だ。爲事が義務だと……人生は苦界だ。(役者に) さあ、サルダナバル。行かうぜ。

役者。行かう、ネブカドネザル……たらふく飲まうぜ。

二人退場。

ペベル。(欠伸をする) おめえのかみさんはどうした。

錠前屋。もうお終えらしいや。

稍長き間。

ペベル。おめえのさうやつて働いてるのを見るたびにおれはさう思ふぜ、そんなことをしてゐて何になるんだな。

錠前屋。ぢやあどうしたら好いんだ。

ペベル。なんにもするな。

錠前屋。食へねえ。

ペベル。他の人間を見ろ。少しも苦しまねえで生きてらあ。

錠前屋。他の人間。ここにゐる野郎どものことかい。こそそだの、のらくらだのことかい……成程立派な人間だ……見るのも穢らはしいや……おりやこれでも職人だ……子供の時から働いてゐるんだ。おめえはおれを、もうこれつきりこの五味溜から匍ひ出せねえ人間だと思つてるのか。なあに。きつと出て見せらあ……おれの肌がずたずたに裂けたつて構はねえ。きつと出て見せらあ……それにしても先づ嬪が死んでくれなけりやいけねえ……おれはまだやつと六月しかここにゐねえんだが……もう六年もゐるやうな気がすらあ。

ペベル。馬鹿なことを言ふな……てめえどこが豪いんだ……ここにゐる奴等に比べて。

錠前屋。どこが豪い。ぢやあ、ここにゐる奴等は名譽心を持つてるかい。良心を持つてるかい。

ペベル。(冷静に) 名譽心や良心が何になる。冬寒い時に長靴の代りになるか……名譽心や良心の入るのは、威勢のある奴等だの權力のある奴等だのばかりだ。

帽子屋。(入り来る) ふう。寒い、寒い。

ペベル。やい、ブブフ。てめえ良心を持つてるか。

帽子屋。なにい。良心。

ペベル。(頷きて) うむ。

帽子屋。良心が何になるい。おいらあ金持ちやねえ。

ペベル。おれもさう言ふんだ。良心だの名譽心だのの入るのは金持ばかりだ。さうに違えねえや……それなのに、クレシチの野郎。おれに突つ掛かつて來やがつて、おれ達には良心がねえなんぞとぬかしやがるんだ。

帽子屋。おれ達から良心を、一つ借りようとも言ふのか。

ペベル。あれだけ持つてりやあ澤山だ。

帽子屋。ぢやあ賣らうといふんだらう。誰がそんなもを買ふ奴があるもんか。毀れたボオル箱でも持つて來い、さうしたらおれが買つてやるから……だが、それも現金ぢや厭だよ。

ペベル。(錠前屋に向ひ、教訓するやうな調子にて) おめえは随分おめでたい人間だ。まあ、サチンか男爵に聞いて見ねえ、良心について何と言ふか。

錠前屋。別に聞いて見たかねえ。

ペベル。あいつ等はおめえより餘つ程物の分かりがいいや……飲んだくれぢやあるけれど。

帽子屋。利口でその上酒が飲みやあ、人間の値打は、二層倍だ。

ペベル。サチンに言はせると、人間て奴は側そばに良心のある奴が一人ひとりあれば、それでいいんだ……自分に良心があると不便でいけねえとよ……まあそんなものよ。

ナタアシャ入り来る。その後より巡禮ルカ、杖をつき、背嚢を背負ひ、帯に小さき鍋と薬罐とをつけて入り来る。

巡禮。旦那方、今日は。

ペベル。(髪を引つ張りながら) よう、ナタアシャ。

帽子屋。(巡禮に) おれ達も昔は旦那なんて言はれた。だが、去年の春からは。

ナタアシャ。さあ——御新客よ。

巡禮。(帽子屋に) まあ、そんな事を言ひ給ふな。わしはどんな悪黨でも尊敬するんだ。蚤に決して善悪はない。みんな黒い、みんな跳ねる……さうぢやないか。さて、ねえさん、どこへ陣取らうかな。

ナタアシャ。(臺所の戸口を指して) あそこへおいでよ……おぢいさん。

巡禮。有難い、どこでもいい……年寄には暖あたたかいところが何よりだ。(臺所へ退場)

ペベル。面白いぢいさんを連れて来たな。

ナタアシャ。さうさ、お前さんより餘つ程面白い人さ……(錠前屋に) アンドレイさん、お前さんの

おかみさんは、あたし達と一緒に臺所にゐるからね……あとで迎ひにおいでよ。

錠前屋。よし、よし、今に行く。

ナタアシャ。少し親切にしておやりよ……もう長いことはないんぢやないか。

錠前屋。知つてるよ。

ナタアシャ。そりや知つてるさ……だけど、知つてるだけぢやいけないよ。死ぬといふことはどういふことだか、よくお前さん考へて御覽よ……恐ろしいぢやないか。

ペベル。ちつとも恐ろしいこたあねえ。

ナタアシャ。そりや強い人は別だわ。

帽子屋。(舌打をする) この麻絲はちつとも役に立たねえ。

ペベル。ほんとにおれは恐くねえんだ。死ぬと言ふなら、いつでも死んで見せらあ。嘘だと思ふなら、ナイフを持つて来て、この胸へぐつと突通して見ねえ……聲一つ立てねえで見せるから。それどころかい、笑つて死んで見せらあ……おめえの手のやうな……綺麗な手にかかるんなら。

ナタアシャ。(出て行きながら) 冗談お言ひでないよ。

帽子屋(あくびをしながら) ほんとにこの麻絲は駄目だ。

ナタアシヤ。(玄關の戸口より、錠前屋に) おかみさんをお忘れでないよ。

錠前屋。いいよ。(ナタアシヤ退場)

ペベル。いい女だ。

帽子屋。點の打ちどころがねえ。

ペベル。なぜあの女は……ああおれに辛く當るんだらう。おれの言ふことはてんで聞かねえんだからな……だが、あの女もここにゐちやあ、墮落するばかりだ。

帽子屋。おめえが墮落させるんぢやねえか。

ペベル。おれが。なぜよ。おれはあの女を可哀さうだと思つてるんだ。

帽子屋。狼が羊を可哀さうだと思ふやうにか。

ペベル。嘘をつけ。ほんとにおれは可哀さうでならねえんだ……こんな所に置いとくのは確によくねえ……おれはさう思ふ。

錠前屋。あの女と話してゐるところを、かみさんに見られたら大變だぜ。

帽子屋。ほんとによ。あの鬼婆中々油斷をしやがらねえからな。

ペベル。(寢床の上に長々と寝て) うらなひ者め、あつちへ行きやがれ。

錠前屋。今に見ろよ……わかるから。

巡禮。(臺所にて唄ふ)

夜は更けわたりぬ、

行く手は見えず……

錠前屋。(玄關へ出て行く) もう吠え出しやがった……しやうのねえ奴だ。

ペベル。ああ、いやだ、いやだ……どうしてかう氣が減入るんだらう。何一つ不足もなく、かうやつて暮らしてゐるのに……不意に氷にでも閉ぢられたやうな厭な氣持になるんだ。たまらなく氣が沈んで来るんだ。

帽子屋。氣が沈むつて。お前さんがかい。

ペベル。ああ。

巡禮。(臺所にて唄ふ)

行く手は見えず。

ペベル。やい、ぢぢい。

巡禮。(戸口より覗く) わしのことか。

ペベル。ああ、おめえだ。歌はよしてくれ。

巡禮。(部屋の中へ入り来る) 歌は嫌ひかな。

ペベル。うまけりや好きだ。

巡禮。わしのはうまくないかな。

ペベル。まあその邊だ。

巡禮。おや、おや。これでもわしは中々うまいつもりなんだ。だが、まあ大抵さうしたもんさ。誰でも自分のしたことは、自分ではうまく行つたと思つてゐる。ところが、それが世間の氣に入らな

い。

ペベル。(笑ふ) そりやさうだ。

帽子屋。おや。笑つてるね。それでも氣が減入つてゐるのかい。

ペベル。なんだと。おいほれ鴉め。

巡禮。誰だい、氣が減入るといふのは。

ペベル。おれよ。

男爵入り来る。

巡禮。ぢや、まあお聞き。あすこの臺所で、娘が一人、本を讀んでは泣いてゐる。涙をぼろぼろこぼしてゐるんだ……どうしたんだ、え。と聞いて見ると、だつて可哀さうなんだものと言ふ……誰が可哀さうなんだ、と聞くと……ほら、この本に書いてある人達がさと言ふ……こんなことで人間一疋が暇を潰してゐるんだ。これも氣の沈むせゐらしいな。

男爵。あいつは馬鹿だ。

ペベル。男爵、茶をやつて來たのか。

男爵。ああ……それがどうしたい。

ペベル。上等のウオツカを一本やりてえからよ。

男爵。わかつた……それがどうしたい。

ペベル。四つん匍ひになつて、犬のやうに吠えろ。

男爵。馬鹿野郎。てめえはブルジョアか、酔ばらひか。

ペベル。そうれ。もう吠え出した。嬉しいな……おめえは紳士だ……おれ達を人間だと思はなかつた時もあるんだ。

男爵。さうよ。それがどうしたい。

ペベル。それがどうしたと。さうよ、今度はおめえを犬のやうに吠えさせるんだ。さあ、吠えるか、どうだ。

男爵。吠えたらどうだと言ふんだ……馬鹿野郎。何が面白いんだ……おれがおめえより上にゐた時分に、四つん匍ひに匍はしてもしたら、そりやあ面白かつたかも知れねえが、今ぢやあ、おれがおめえよりおちぶれてゐるんだ。

帽子屋。さうだ。さうだ。

巡禮。わしもさう思ふ。

帽子屋。昔のことは昔のことよ。もうなんにも残つてるものはねえ……ここへ來ちやあ、殿様も糞も

あるもんか……みんな飾りつ氣のねえ裸百貫だ。

巡禮。四民平等といふ奴だな……ぢやあ、なんだね、お前さんは男爵だったことがあるんだね。

男爵。なんだ。ぢぢい、てめえは誰だ。

巡禮。(笑ふ) わしは伯爵を一度見たことがある。それから公爵も見たことがある……男爵を見るの

は今が始めてだ。しかもその落ちぶれた奴をな。

ペベル。(笑ふ) は、は。てめえのお蔭で恥をかかめ。

男爵。馬鹿言ふない。

巡禮。まあ、まあ。かうして見てみると、お前さん達の生活は……ふうむ。

帽子屋。朝つばらから吠えてゐるのよ。

男爵。さうよ、もう好いことはみんな昔して来たんだ。たとへば、おれだつて……朝起きると床の中

で珈琲コーヒーを飲んだもんだ……クリイムのはひつた珈琲をよ……ほんとだ。

巡禮。その昔でも、人間に變りはなかつたんだ。どんなに氣取つて見たつて、どんなに息張つて見たつて……やつぱり人間として生れて来て、人間として死んで行くのさ……人間といふ者は、利口になればなる程眞面目でなくなるものだ……落ちぶれて来れば来る程出世をしたがるものだ……しやうのない者だ。

男爵。ぢいさん……一體おめえはなんだい。どこから来たんだい。

巡禮。だれ。わしかい。

男爵。巡禮かい。

巡禮。地球の上にある者はみんな巡禮さ。この地球でさへ宇宙をめぐる巡禮だといふぢやないか。

男爵。(厳格に) そりやさうだ。だが、お前は……旅行券を持つてるか。

巡禮。(むつとして) お前さんは何だ。探偵か。

ペベル。(快活に) うまいな。ぢいさん。どうだ、男爵……一本まるつたらう。

帽子屋。やられたな、御前。

男爵。(狼狽して) なあに。冗談だよ、ぢいさん。實はおれだつて持つてやしねえんだ。

帽子屋。嘘をつけ。

男爵。そりや……書附かきつけは持つてるが……なんの役にも立たねえんだ。

巡禮。書附といふものは大概さうだ……大概役に立たないものだ。

ペベル。男爵。どうだい、一杯やりに行くか。

男爵。行くとも、ぢいさん、又逢はう……おめえ中々悪黨だな。

巡禮。さうかも知れない。

ペベル。(支關の戸口にて) さ、早く行かう。(退場、男爵、急いであとを追ふ)

巡禮。あの男はほんとに男爵だったのかね。

帽子屋。わかるものか。だが、生れが貴族だといふことは確らしいや。今でも『御前』が顔を出すか
らな。まだ癖が抜けきらねえと見える。

巡禮。貴族になるのは、疱瘡にかかるやうなものだ……濟んでしまつても、跡が残る。

帽子屋。あの病さへなきや、いい男なんだ……どうも、時々息張るんでいけねえ……さつきのやうに、
人の旅行券を尋ねたりなんかしてね。

靴屋アリヨシカ。(手風琴を抱へ、酔つばらつて入り来る。口笛を吹く) よう、寝坊め。

靴屋。まあ、勘辨してくんねえ……御免よ。僕は温良な青年だ。

帽子屋。また鞆を外しやがつたな。

靴屋。はづして悪いかい。おれは今、署長のメヂヤキンに分署から突き出されて来たんだ。『もう往
來へ出ることはならねえぞ』なあんて言やがつた。なあ、おいらはこれでも人格のある青年だ……
署長はおれを侮辱しやがつた……おれは署長なんかには用はねえ……みんな間違つてやがる……あ
いは飲んだくれだ……おれはなんにも慾のねえ人間なんだ……なんにも入らねえんだ。もう澤山
だ。さどこへでも連れてつてくれ……一圓二十錢で買はれて行つてやるから。それでもおれは、な
んにも入らねえんだ。(ナスチャ臺所より来る) 百萬圓やらうと言つてもおれは入らねえんだ。お
れのやうな立派な人間が、何一つおれより豪くもねえ飲んだくれに、命令なんぞされてたまるか

い。厭なこつた。

ナスチャ、戸口に立留り、靴屋の様子を見て首を振る。

巡禮。(親切に) 若い衆、何を馬鹿なことを言つてるんだ。

帽子屋。馬鹿な奴だ。

靴屋。(床の上に寝ころぶ) さあ、おれを食へ。錢は入らねえんだ。成程、おれは向う見ずだ。だが
おれは人より悪いのか。どこが人より悪いんだ。え。メヂヤキンの野郎『二度と往來へ出ると鼻面
あひんまげるぞ』なんて言やあがつた。糞つ、出てやらあ……往來のまん中へ大の字なりに寝てや
らあ。殺すなら、殺しやがれだ。おれはなんにも入らねえんだ。(起き上がる)

ナスチャ。可哀さうな奴だ……ちいつばけな癖に、あんな大きなことを言つてるよ。

靴屋。(女を見てその前に跪く) レデイ、フロイライン、マムゼル。パアレ、フランセエ……ブリ、
クウラント……僕はめちやめちやに酔つてゐます。

ナスチャ。(聲高に囁く) そら、おかみさんが。

主婦。(急に戸をあけ、靴屋に) また来やがつたな。

靴屋。今日は。どうかまあ、こちらへ。

主婦。なんだ、犬め。二度と来ちやならないつて、あれ程言つといたぢやないか。
部屋の中に入り来る。

靴屋。おかみさん……まあ一つ……僕がお葬とむらひのママチを弾くから聞き給へ。

主婦。(靴屋の肩を突く) 出て行け。

靴屋。(戸口へ段々に身を引く) 何も……そんなになくつたつて……まあ、兎も角も、お葬とむらひのママチを……まだ習つたばかりなんだ……ほやほやと言ふところさ……まあお待ちよ……そんなにし
たつて駄目だよ。

主婦。駄目か、駄目でないか、今に見るがいい……町中まちぢう觸れて歩いてやるから、この金棒引め……きつとかういふ青二才が、あたしのことを何の彼たかのと觸れて歩くんだよ。

靴屋。(足早に退場) いいよ、ぢやあ行くよ、行きやあ好いんぢやねえか。

主婦。(帽子屋に) もうあんな奴がはひつて来ないやうにしておくれよ。好いかい。

帽子屋。おいらあおめえんとこの門番ぢやねえ。

主婦。お前さんが何だらうが、それをあたしが知つたことかい。だが、お忘れでないよ。お前さんはお情なさけでここにゐられるんだよ。一體いくら借金があると思つてるんだ。

帽子屋。(静に) まだ勘定して見ねえ。

主婦。お前がしなくなつて、あたしがしげに置くもんか。

靴屋。(戸をあけて、どなる) やい、ワシリイサ・カルポウナ。おめえなんか、ちつとも恐こはかねえぞ……恐いものか。(隠れる)

巡禮笑ふ。

主婦。お前さんは誰だい。

巡禮。旅の者さ……諸國を渡り歩く。

主婦。お泊りかい。滞在かい。

巡禮。それはまあ考へてからだ。

主婦。旅行券は。

巡禮。持つてるよ。

主婦。ぢやあ、お見せ。

巡禮。見せるよ……あとでお前の部屋へ持つて行くよ。

主婦。旅の者か……成程、さうらしいねえ、だが、これからは浮浪人だとお言ひよ……その方が本當らしいから。

巡禮。(溜息をつく) をばさん、お前さんはあんまり親切な人ぢやないね。

主婦。ペペルの部屋の戸口へ行く。

靴屋。(臺所より覗き込み、囁く。) 行つちやつたかい。

主婦。(振り向く) まだそんなところにあるのか。

靴屋、口笛を吹きながら隠れる。ナスチャと巡禮、笑ふ。

帽子屋。(主婦に) ゐないよ。

主婦。誰が。

帽子屋。ワシカよ。

主婦。あの人のことをあたしが聞いたかい。

帽子屋。だつて、いやにきよろきよろ見廻してるぢやねえか。

主婦。部屋が綺麗になつてるかと思つて、見てゐるんだよ。分かつたかい。なぜまだ掃き出さないんだ。綺麗にしとかなくちやいけないつて、何度言つたか知れないぢやないか。

帽子屋。けふは役者の番だ。

主婦。誰の番だらうが、あたしの知つたことぢやない。衛生係に罰金でも取られたら、みんな追ひ出してしまふよ。

帽子屋。(落ちつきて) さうすりや、おめえが食へなくなるばかりだ。

主婦。塵つば一つでも残つてゐたら、承知しないよ。(臺所の戸口へ向ひながら、ナスチャに) おや、お前さん、何だつて、郵便箱のやうに突つ立つてゐるんだねえ。何だつて膨れつ面かをしてるんだねえ。何だつて、そんなに人の顔を睨めるんだよ。さ、早く掃き出しておくれよ。お前さん……
 ナタアシヤを見なかつたかい。ここへ來やしなかつたかい。

ナスチャ。知らない……見なかつた。

主婦。ブブノフ、妹がここへ來やしなかつたかい。

帽子屋。ぢいさんを連れて來た。

主婦。そして、あの人は……内にゐたのかい。

帽子屋。ワシカか……ゐた……ナタアシヤはクレシチと話をしてゐたつて。

主婦。そんなことを誰が聞いたよ。まあ、どうだらう、この埃は……どこもかも埃ほこりだらけぢやないか……まるで豚だねえ。もう少し綺麗にしておくれよ……いいかい。(急ぎ退場)

帽子屋。意地の悪い奴だ。

巡禮。ひどい女だね。

ナスチャ。こんな暮らしをしてりや誰だつてああなるさ。おまけにあんな男にくつついてるんぢやないか。

帽子屋。なあに、さうしつかりくつついてるわけでもなからうぜ。

巡禮。しよつちうあんなに噛みつくのかね。

帽子屋。しよつちうさ……今ここへ來たのはレコを探しに來たんだ……ところがゐないと來た。

巡禮。ははあ、それでおむづかりになつたといふ譯だな……なある程。この世の中には随分いろんな奴が采配を振つてゐる……みんな人を押しつけよう押しつけようとしてゐる……そのくせ一人も世間を綺麗にする奴はない。

帽子屋。綺麗にしようと思つても智慧が足りねえんだ……ところで……こつちも掃き出さなくちやならねえ……ナスチャやつてくれるか。

ナスチャ。厭だよ。あたしやお前さん達の女中ぢやないんだよ。(暫時沈黙) けふは酔つばらほう……ぐでぐでに酔つばらほう。

帽子屋。いい量見だ。

巡禮。娘さん、なんだつて酔つばらほうなどと思ふんだ。お前さんはつひさつき泣いてたぢやないか、それだのに急に又酔つばらほうなんて。

ナスチャ。(挑戦的に) 酔つばらほうちやつたら、また泣くのさ……分かつたらう。

帽子屋。馬鹿馬鹿しい。

巡禮。だが、どういふ譯でな。どんなものにだつて譯はある。顔にある小さいお腫でぶにだつて譯はある。

ナスチャ、黙して首を振る。

巡禮。ああ、ああ。人間はみんなこれだ……これから先、人間はまたどうなるんだ。ぢやあ、まあ、部屋はわしが掃き出してやらう。箒はどこにあるね。

帽子屋。玄關の戸のうしろだ。

巡禮玄關へ退場

帽子屋。なあ、ナスチエンカ。

ナスチャ。うむ。

帽子屋。ワシリイサは、さつきなぜあんなにアリヨシカに突つかかつたらう。

ナスチャ。ワシカはもうおかみさんが厭になつたんだ……ナタアシヤに氣があるんだ、などと言ひ觸らして歩いたからさ……あたしやもうここを出て、どつか他ほかに宿をとらう。

帽子屋。なぜよ。

ナスチャ。もう厭になつたからさ……あたしやこゝにゐたつて、餘計者だもの。

帽子屋。どこへ行つたつて餘計者だよ。世界に住んでゐる人間は、みんな餘計者だ。

ナスチャ頭を振り、立ち上がりて、靜に玄關の方へ出て行く。巡查メドエデフ入り来る。うしろに巡禮、箒を持ちて従ふ。

巡查。(巡禮に) お前は誰だ。わしはお前を知らんが。

巡禮。では、ほかの者ならみんな御存じかな。

巡查。管轄内の者ならみんな知つてゐる筈だ——ところが、お前は知らない。

巡禮。そこで、をぢさん、世界中があなたの管轄でないといふことになる……まだあなたの管轄でないところもあるといふことになる。(臺所へ退場)

巡查。(帽子屋の側へ来る) さうさ。勿論わしの管轄は廣くはない……その癡癡い奴よりずつと骨が

折れるんだ……今も折角非番になつて歸つて来ようとする、靴屋のアリヨシカを引致しなけりやならんことになつた……あいつ、往來の眞ん中へ仰おふのけに引つくり返つて、手風琴を鳴らしながら「なんにも入らねえ。なんにも欲しかねえ。」つて、どなつてゐやがるんだ。車は兩方から來るし、一體あすこいらは……混雜するところだ……今にも車に轢かれるかどうかしさうだ……馬鹿な奴つたらない……勿論直ぐ引致したが……あんまり滅茶なことをしやがる。

帽子屋。どうだね、今晚は……一勝負ひとさしに來ないか。

巡查。来よう……うむ……時にワシカはどうした。

帽子屋。どうもしねえ……相變らずだ。

巡查。まだ生きてるか。

帽子屋。生きてなくつてよ。あいつは生きてゐる値打のある生活をしてるんだ。

巡查。(訝しげに) ほほう……生きてる値打があるかな。(巡禮、臺所より入り來り、バケツを手にして玄關の方へ退場) ふむ……大分噂がさかんだぞ……ワシカのことだよ……お前、なんにも聞かなかつたか。

帽子屋。なんにも聞かなかつたね。

巡查。ワシリイサについて何か。ワシカの奴が……お前、なんにも氣が附かないのか。

帽子屋。何がよ。

巡查。なあに……もう大抵……お前は何かも知つてるんだ、だが、言ひたくないんだらう……もう知れてゐることなんだ。(強く) 嘘をつくなよ。

帽子屋。嘘を言つたつてしやうがねえ。

巡查。そりやさうだな……ええ、犬め、あいつ等はこんなことを言つてやがるんだ。ワシカがワシリイサと……言はば……何もおれの知つたことぢやない、おれはあいつの親爺ぢやないんだ、ただ……

伯父といふだけなんだから……何もおれが馬鹿にされる譯はないんだ。ところが、世間じやあ人を馬鹿にするのを商賣のやうに思つてる奴が澤山あるんだ。(饅頭賣の女入り來る) あばずれ……やつて來たな。

饅頭賣。おや、まあ、お巡りまはさん。ちよいとブブノフさん、あの人つたら、今も又市場で、女房になれなんて言ふんだよ。

帽子屋。なつたら好いちやねえか。この人はおあしもあるし、ちよいと氣も利いてるし。

巡查。おれがかい。おや、おや。

饅頭賣。なんだい白髪しらがあたま頭め。もうそんな事は厭になつたんだよ。そんな馬鹿な眞似は、一生に一度すりや澤山さ。女から見ると、婚禮といふものは、丁度多氷の張つた川ん中へ飛び込むやうなものさ……一度それで酷い目にあつたら、一生忘れられやしない。

巡查。でも……亭主といふものが、みんな同じわけのものでもあるまい。

饅頭賣。でも、あたしが始終おんな同じなら爲方しかたがないぢやないか。あたしの先の亭主が——厭な奴だつたよ。ひとりで内の中に坐つてゐると、あんまり嬉しくて、ほんととは思はれなかつたつけ。

巡查。亭主にぶたれて、なぜ黙つてゐたんだ。交番へ訴へりやあよかつたのに。

饅頭賣。交番だつて。あたしや神様に八年も訴へたんだよ……だけど、神様だつてどうすることも出来なかつたんだ。

巡查。だが、今日では、女房をぶつ事は禁止されてゐる……法律と秩序が立派に敷かれてゐる……誰も人をぶつことは出来ない……法律と秩序の爲なら格別だが。

巡禮。(錠前屋の妻を連れて、入り来る) さあ……やつと来た……可哀さうに……どうして、こんな體をしながら、あんなところへ行けたもんだ。お前さんの場所はどこだい。

錠前屋の妻。(寢臺を指す) 有難うよ。おちいさん。

饅頭賣。そら、そこにお嫁に行つた人が来た……御覽。

巡禮。こんなに弱つてる病人が……たつた一人で玄關を匍ひ廻つてゐるんだ、壁にかじりついて……しつきりなしに唸つてゐるんだ……どうして一人でなぞ出したんだ。

饅頭賣。氣が附かなかつたんだよ……勘忍しておくれ、おちいさん。大方、おほかた附添のお女中が御散歩にでもお出かけ遊ばしたんだらうよ。

巡禮。冗談ぢやない……一體ひとりの人間を、あんなにほつたらかしいて、好いものと思ふのかい。たとへ、どんな人間だらうが……人間としての値打に變りはないのだよ。

巡查。監視は必要だ。急に死なれて見ろ。面倒だぜ、よく見てなくちやいけない。

巡禮。全くだ、署長さん。

巡查。ふむ——さう……まあさう言つてもよからう……わしはまだ署長ぢやないが。

巡禮。本當かな。併し、顔附で見ると——立派な英雄だ。

玄關の方より、騒がしき物音、床を踏む足音、息苦しげなる叫び聲聞え来る。

巡查。また喧嘩だな。

帽子屋。さうらしいな。

饅頭賣。見といで。

巡查。おれも直ぐ行く……厭だが、職務だ。一體喧嘩が始まると、なぜ留めるんだらう。うつちやつときやあ、両方でひとりでに廢してしまふんだ……擲り合ひに飽きて来てよ……だから、うつちやつといて腹のいえるまで擲り合ひをさせるのが一番いいんだ……さうすりや段々喧嘩が少なくなる理窟だ……一度やると、中々その痛みが忘れられないからな。

帽子屋。(寢床より立ち上る) それを一つお上へ建議することだね。

亭主。(戸を突きあけて、叫ぶ) アプラム……早く来てくれ……ワシリイサがナタアシヤを殺す……

早く……早く。

饅頭賣の女、巡查、帽子屋、玄關の方へ馳せ出づ。巡禮、頭を振りつつこれを見送る。

錠前屋の妻。ああ……ナタアシエンカは可哀さうに。
巡禮。誰が喧嘩をしてるんだい。

錠前屋の妻。ここの宿の人達だよ……きやうだい二人だよ。

巡禮。(錠前屋の妻に近寄る) どういふ譯でね。

錠前屋の妻。あんまり食べ物十分過ぎるからだよ……丈夫過ぎるからだよ。
巡禮。して、お前さんは……何といふ名だい。

錠前屋の妻。アンナさ……あたし、かうしてお前さんを見てみると……お父さんに逢つてるやうな氣

がするよ……ほんとにお前さんは、あたしのお父さんに似てるよ……お前さんもあたしのお父さ

んのやうに、親切で……優しいねえ。

巡禮。あんまり世間の奴にぶたれたんで、それでこんなに優しくなつてしまつたのさ。
ひとり窃に笑ふ。

第二幕

舞臺面、第一幕に同じ、宵。暖爐の側の寢床の上に、サチン、男爵、人足クリライ・ゾオブ、韃
鞅人など座を占め、骨牌をしてゐる。錠前屋と役者、それを見物してゐる。帽子屋は、おのが寢
床の上にて、巡查と將棋をさしてゐる。巡禮は錠前屋の寢臺の前なる腰掛に腰をかく。ランプ二
つ、部屋を照らす。一つは骨牌の連中の側の壁に、一つは帽子屋の寢床の側にかかりゐる。

韃鞅人。もう一度やらう……それでおれはもう廢す。

帽子屋。ゾオブ。唄へよ。(唄ふ)

夜でも晝でも

人足。(歌に加はる)

牢屋は暗い。

韃鞅人。(サチンに) 切つてくれ。だが、ちゃんと切るよ。おめえのずるいなあ知つてるからな。

帽子屋と人足。(一緒に唄ふ)

いつでも鬼めが、ああ、ああ。

窓から覗く。

錠前屋の妻。病氣になつたり、ぶたれたり……それをみんなあたしは辛抱して來たんだよ……それが

あたしの廻り合はせだつたのだよ……今までずうつと。

巡禮。可哀さうに。まあ。さう思ひつめない方がいい。

巡查。どこへやるんだ。氣をつけ給へ。

帽子屋。ははあ……成程……なある程。

韃靼人。(拳固にてサチンを嚇す) なぜ札を隠すんだ……見たぞ……やい。

人足。ほつとけよ、ハッサン。どつちにしても、おれ達を欺す奴なんだ……先を唄へ、ブブノフ。

錠前屋の妻。あたしは一度も物を満足に食べた覚えがないんだよ……パンをひときれひときれ一片一片……いつでも慄

へながらびくびくしながら食べた……あたしは、しよつちう慄へてばかりゐた。びくびくしてばか

りゐた……自分の分ぶだより少しでも餘計に食べやしないと思つて……あたしは一生ぼろ襦袢ばかり着て

ゐた……この長い、みじめな一生……一體、なぜこんなにならなきやならないんだらう。

巡禮。可哀さうに。飽きもしよう。もうぢき好くなるよ。

役者。(人足に) ジャツクを出せ……ジャツクを。忌々しい。

男爵。キングがあるぞ。

錠前屋。どんどん勝つなあ。

サチン。どんどん……勝つとも。

巡查。そら女王だよ。

帽子屋。こつちにもある……そら。

錠前屋の妻。ああ、もうあたしは死ぬ。

錠前屋。(韃靼人に) そうれ——見ろ。うつちやつちまへ、殿下——もう廢せよ。

役者。黙つてろ、自分でどうにかすらあ。

男爵。氣をつける、錠前屋、追ひ出すぞ。

韃靼人。もう一度やつてくれ……水瓶は割れるまで泉へ通ふとよ……おれもさうだ。(錠前屋、首を

振りて帽子屋の側へ行く)

錠前屋の妻。あたしは、しよつちうから祈るんだよ……主よ……あたしはあの世へ行つても……かう

いふ苦しみをしなければならなのでせうかつて。

巡禮。いんえ。どうして……決して苦しみなんかありやしない。まあ、氣を落ちつけて寝ておいで……

……心配しちやいけない……あの世へ行けば、きつと休息が出来る。もう少しの辛抱だ……吾々が

つて、みんな辛抱しなきやならないんだ……みんな、てんでに辛抱してゐるんだ。

立ち上がり、急いで臺所の方へ行く。

帽子屋。(唄ふ)

覗こと儘よ。

人足。

塀は越されず。

二人。(聲を合せて)

自由に焦^これても、ああ、ああ。
鎖は切れぬ。

韃鞨人。待て。札を一枚袖の中へ突つ込んだぞ。

男爵。(狼狽して) 嘘つけ……ぢやあ、今度はてめえの鼻ん中へでも突き込まなきやなるめえ。
役者。(證明するやうに) おめえの間違えだよ、殿下。そんなことはねえよ。

韃鞨人。だつて、おれは見たんだ。ずるだ。おりやもう廢^よす。

サチン。(骨牌を纏めながら) ぢやあ勝手にするがいい……おれ達かざるなことは、おめえ^{はじめ}初つから
承知してるんぢやねえか……ぢやあ、なぜおれ達と骨牌なんぞをしたんだ。

男爵。たつた四貫負けたんだ。それなのに、三兩も負けたやうな騒ぎだ。さあ、も一度来い。

韃鞨人。(烈しく) 骨牌は正直にやるもんだ。

サチン。なぜよ。

韃鞨人。「なぜ」とはなんだ。

サチン。なぜと言つたら……唯なぜよ。

韃鞨人。てめえ、それを知らねえのか。

サチン。知らねえな。おめえ知つてるか。

韃鞨人。腹を立てて唾を吐く。人々笑ふ。

人足。(機嫌よく) をかしな奴だな、ハッサン。まあ考へて見ろ。正直に暮らしたなら、三日
の内に飢ゑ死んぢまはあ。

韃鞨人。それがなんだ。正直に暮らさねえ者は人間ぢやねえ。

人足。いつでも同じことを言つてやがる。おりやそんなことより茶でも飲んで来よう……さあ、始め
た、ププノフ。

帽子屋。

ああこの重たい鐵の鎖よ。

ああ、あの鬼めの、ああ、ああ。休まぬ見張り。

人足。来い。ハッサン (唄ひながら退場)

いかにせうとても籠の鳥よ。

韃鞨人、拳にて男爵を脅し、友のあとを追ふ。

サチン。(笑ひながら、男爵に) 御前、たうとう又しくじらしてしまつたぜ。教育のある人間は、骨
牌のごまかしやうを知らねえから駄目だ。

男爵。(肩を聳やかす) ええ、いめいましい。又しくじつてしまつた。

役者。天才がないからだ……自信がないからだ……これがなければいつまで立つても駄目だ。

巡查。おれの手には女王が一つだ……おめえ二つ持つてるな……ふむ。

帽子屋。うまくやりやあ、一つで澤山だ……さあ、おやり。

鏡前屋。やられたね、アブラムさん。

巡查。お前の知つたことぢやない……黙つてろ。

サチン。五十三銭勝つた。

役者。その内三銭はおれんだ……だが、三銭で何が買へる。

巡禮。(臺所より入り来る) 大分鞆鞆人をいぢめたね、それで一杯やりに行くのか。え。

男爵。一緒に来い。

サチン。一杯やつたら、どんなになるか。それが見てえ。

巡禮。白面の時よりよくなる筈がない。

役者。おいでよ、ぢいさん……おれが素的なアリアを聞かしてやるから。

巡禮。アリア。なんだね、それは。

役者。韻文さ。わからねえか。

巡禮。韻文……詩だね。そんなものを聞いたつてしやうがない。

役者。をかしいんだよ……かと思ふと、又馬鹿に悲しいんだ。

サチン。さあ行かう。アリア唄ひ。(男爵と共に退場)

役者。今直ぐ追つつくぜ。(巡禮に) 例へば、ぢいさん、かういふ歌があるんだ。その初は……ええ

と、どうだつたかな……すつかり忘れてしまつた。(額をこする)

帽子屋。女王を取つたぞ……さあ、来い。

巡查。また遣りそこなつたか。畜生め。

役者。おれのオルガニズムにまだアルコールの毒が廻らなかつた時分には、おれは記憶がいいので

有名なものだつた……ほんとだぜ、ぢいさん。ところが今は……もうすつかり駄目だ……おれがこ

の歌を唄ふと、きつと大成功でね……いつでも割れるやうな喝采さ。と言つたところで、喝采とい

ふものがどんなものか、おめえには分るまい……まあ、なんだね。ウオツカ見たいなものだね……

……かういふ風に歩いて出るんだ。(姿勢をとる) それから、始めるんだ……それから……(急に

黙る) もうちつとも覚えてゐねえ。一言も……覚えてゐねえ。あの歌は、おれの一番好きな歌だつ

たんだがなあ……ぢいさん、どうだ、呆れたか。(空を掴む)

巡禮。一番好きなものを忘れちまつちやあ……困るなあ。人の魂は、その人の好きなものにあるのだ

から。

役者。おれはおれの魂まで飲んぢまつたんだ……おれはもう駄目な人間だ……なぜ駄目だと言ふと、

それ、自信がないからだ……おれはもうおしまひだ。

巡禮。なぜ。直したらいいぢやないか。わしの聞いたところによると、今日では、酒飲みの療治が出

來るといふ話だ。しかもただで直すといふことぢやないか……おほさけの大酒飲みの病院が立つてゐて……そ

こで、ただ直してくれるといふぜ……酒飲みだつて人間といふことを段々世間が認めて来たんだな。だから、誰かが行つて、直してくれと言へば、向うは大層喜ぶんだ。すぐ行つて見ちやどうだい。

役者。(思案して) どこへさ。どこにそんなところがあるんだ。

巡禮。何とかいふ町なんだが……何と言つたつけない。妙な名だつたよ……なあに、今すぐ分かる……まあ、兎に角、支度だけはしとかなくちやいけない。先づ酒を控へるんだ。勇氣を出して、辛いのをこらへるんだ。そこで……病氣が直る。直つたら、新しい生活を始めるんだ……いいぢやないか。え。新しい生活だぜ……さあ、決心をした……一、二、三。

役者。(微笑して) 新しい生活……初めつから……いいなあ……そんなことが出来るかしら。新しい生活。(笑ふ) やつて見ようかな。ようし、やつて見よう。きつとやつて見る。

巡禮。やつて見ないでどうする。人間といふものは……やらうと思ひさへすれば……なんでも出来るものだ。

役者。(急に、夢からでも醒めたやうに) をかしなぢぢいだ。ぢやあ。ちよいと失敬。(口笛を吹く)

また逢はうぜ。(退場)

錠前屋の妻。おぢいさん。

巡禮。なんだい。をばさん。

錠前屋の妻。あたしと少し話をしておくれな。

巡禮。(女の方に近寄る) よし。話をしよう。

錠前屋。(あたりを見廻し、黙つて妻の寢臺に歩み寄り、ちつと女の顔を見て、何か言ひたげなる手振りをする)

巡禮。なんだね。

錠前屋。(何かを恐るるやうに、小聲にて) なんでもねえ。(靜かに玄關の戸口へ向ひ、暫く戸口に立寄り、やがて出てしまふ)

巡禮。(それを見送つて) 御亭主は大分苦しんでゐるらしいね。

錠前屋の妻。あたしも、あの人の事はなんとも思つてやしない。

巡禮。随分ぶたれたかい。

錠前屋の妻。いくらぶたれたか分かりやあしない……たうとうあたしを……こんなにしてしまつた。帽子屋。おれの嬢が……男をこさへやがつたことがあつた。そいつ將棋が中々うまかつた。その野郎。

巡查。ふむ。

錠前屋の妻。おぢいさん……お話をしておくれよ……苦しくつてしやうがないから。

巡禮。なあになんでもないよ。死ぬ前には誰しもさういふ風になるものさ。なんでもないよ。信仰を

お持ちね、もうお前さんは死ぬんだ、死ぬばきつと休息が出来る……だから、もう、なんにも心配をおしでない……なんにも。もうぢき靜になるよ、平和になるよ……そして、ゆつくり休めるよ。死は總てのものを柔げる……死はやさしいものだ……棺へはひつて、始めて休息があると、よく言ふが……あれはほんとだ。どこへ行つたつて、決して他に休息のあるところはない。

ペペル入り来る。微醉。髪かみの毛亂れ、不機嫌なる面持。臺所の戸口の側の寢床に腰をかけ、沈黙。不動。

錠前屋の妻。そして、そこにも……やつぱりこんな苦しいことがあるのかい。

巡禮。苦しいことなんぞは一つもない。ほんとだ、一つもない。ただ休息があるだけだ……その他にはなんにもない。神様の前に連れて行かれると。きつとかう言はれる「見よ、主——婢しもアンナが参りました」

巡査。(嚴格に) あの世で言ふことがお前には分かるのか。

ペペルは巡査の聲に驚かされて頭を上げ、傾聴す。

巡禮。分かるとも、署長さん。

巡査。(やさしく) ふむ——さう。だが、そんなことはおれの知つたことぢやない……ところで……併し、おれは署長ぢやない。

帽子屋。さあ、一度に二つ取つたぞ。

巡査。ええ、ひどいことをしやあがる。

巡禮。そして神様はお前さんの顔を見て、優しく、「わしはこのアンナを知つてをる」と言つて下さる。それから又、かうおつしやる。「アンナを天國へ連れて行け。あすこには平和がある……アンナの一生は誠に苦しいものであつたと承知してをる……アンナは大層疲れてをるから……すぐ休ませてやれ」

錠前屋の妻。おぢいさん……お前さん……ほんとにさうなれるのかい……ほんとにそんなに平和になれるのかい……ほんとに少しも苦しまなくつて済むやうになるのかい。

巡禮。なるとも……少しも苦しまなくつて済むやうになる。だから信仰をお持ち、心配しないで、喜んでお死に……死は赤んぼをあやすお母さんのやうなものだよ。

錠前屋の妻。でも……ことによると……又よくなるかも知れないねえ。

巡禮。(笑ふ) なんの爲によくなるんだ。又新しく苦しむ爲にかい。

錠前屋の妻。でも、あたしはまだ……もう少し生きてゐたいんだもの……ほんのもう少しで好いんだから……あの世へ行けば、苦しいことがなくなるといふんだから……この世でもう少し苦しんでも好いよ。

巡禮。ああ、あの世へ行けば、少しも苦しいことはない……少しもない。

ペペル。(立ち上がりて) さうかも知れねえ……が、又さうでねえかも知れねえ。

錠前屋の妻。(身を竦めて) ああ。

巡禮。まあ、君。

巡査。誰だ、そこで吠えるのは。

ペベル。(巡査の側へ近寄る) おれだ。どうしたい。

巡査。あんまり大きな聲をするな。静にしてゐるものだ。

ペベル。馬鹿野郎。成程、おめえはあいつの伯父さんだ……は、は。

巡禮。(ペベルに向ひ、小聲に) おい、君——そんなにどなり給ふな。ここに女が一人死にかけてゐる……もう唇が土氣色つちけいろになつてゐるんだ……静にしてやつてくれ。

ペベル。ちいさん、おめえがさう言ふなら、よすよ。おめえは中々豪い人間だ。すばらしい嘘をつくね……中々話が面白いや。もつとどしどし遣りねえ……世間にやあ、あんまり面白いことがなさ過ぎるんだから。

帽子屋。ほんとに死ぬのかい。

巡禮。死ぬ人が冗談言つてると思ふのかい。

帽子屋。ちやあ、たうとうあの咳にもお別れだな……随分喧やかましかつたな、あのしつきりなしにする咳は……そら二つ取るぞ。

巡査。ええ……畜生。

ペベル。アブラム。

巡査。お前にアブラムと呼ばれるわけはない。

ペベル。ちやあ、アブラシユカ——ナタアシヤはまだ寝てるかね。

巡査。寝てようが寝てまいがお前の知つたことぢやない。

ペベル。聞かしてくれたつて好いちやねえか。ワシリイサはほんとにあの子を酷くぶつたのかい。

巡査。それもお前の知つたことぢやない……ほんの内輪で出来たことだ……一體お前はなんなんだい。ええ。

ペベル。おれはおれだ——氣が向きやあナタアシヤを攫さらひ出すかも知れねえ。さうすりあ二度とあの子の顔は見られねえぞ。

巡査。(将棋をやめる) なんだと。誰のことを言つてゐるんだ。おれの姪を、そんな……この泥坊め。

ペベル。泥坊よ——まだおめえに捕つかまらねえ泥坊よ。

巡査。待て。今に捕まへてやる……もうぢき捕まへてやるから。

ペベル。いつなりとも……その代り、さうなりやあ、この巢は顛覆だぞ。一體おれが検事の前で、なんにも言はねえでゐると思つてゐるのか。そりやあ飛んだ量見違ひだぞ。先づ検事がかう聞かあ。お前を焚きつけて、泥坊をさせたのは誰だ……お前にうまい場所を教へたのは誰だ。ミシユカ・コスチリヨフとその妻君であります。して、贓品を受け取つたのは誰だ。ミシユカ・コスチリヨフとその妻君であります。して、贓品を受け取つたのは誰だ。ミシユカ・コスチリヨフとその

妻君であります。

巡查。そりやあ嘘だ。誰がほんとにするものか。

ペベル。ところがほんとにするね……ほんとのことなんだから。それから、おめえも序ついでに抱き込んでやる。おめえ達みんな抱き込んでやるから。見ろ。

巡查。(不安になる) 黙れ。黙れ。馬鹿なことを言ふな。おれがお前に何を悪いことをした……やま犬め。

ペベル。ぢやあ、どんな好いことをして呉れた。

巡查。成程な。

巡查。(巡禮に) 何を言ふんだ。お前の口を出すところぢやない。内輪のことだ。

帽子屋。(巡禮に) 黙つといでよ。おれ達の知つたことぢやねえ。

巡查。(やさしく) もうなんにも言やしないよ。唯わしはかう思つてるんだ。人になんにも好いことをしてやらないのは……悪いことをしてゐるのだとね。

巡查。(巡禮の詞を解せず) 好いか。おれ達はみんな懇意の仲なんだ……だが、お前は——お前はなんだ。(怒つて、鼻を鳴らしながら、足早に退場)

巡查。ほう。怒つたな、大将……どうも變だ。この内は餘程込み入つてると見える。

ペベル。ワシリイサのところへいひつけに行つたんだ。

帽子屋。もう馬鹿はよせよ、ワシカ。おめえはぢきと勇氣を見せたがる……勇氣は森人中へ菌をとりに行く時か何かに役に立つものだ……ここぢやあ、そんなものはなんにもならねえ……おめえ、今にひどい目に會ふぜ。

ペベル。そいつ面白いや……これでもヤロスラフの若い者だ、少し敏はしつこいつもりなんだ……さう安々捕つかまつてたまるものか……向うで喧嘩をしかけて來りやあ、こつちも喧嘩をするばかりだ。

巡查。だが君、ここは出て行つた方が好いぜ。

ペベル。ここを出て、どこへ行くんだ。

巡查。シベリアへ行き給へ。

ペベル。へ。厭なこつた。あすこなら、まあ、官費で送られるまで待たうよ。

巡查。いや、ほんとだ、わしの言ふことを聞いて御覽。シベリアへ行きやあ、きつと好いことがある……お前さんのやうな若い者が足りなくつて、困つてゐるのだから。

ペベル。おれの行く道は、もうぢやんと極きまつてるんだ……おれの親爺は一生監獄で飯を食つたんだ。その運命をおれは相續したんだ……おれは小ちぼけな時分からみんなに、泥坊だの泥坊の子だの言はれたんだ。

巡查。ほんとに好いところだぜ……シベリアは。黄金國わうごんこくだ。精力のある、頭の好い人間が、あすこへ行きやあ、すぐに大きくなる——室むろの中の胡瓜のやうに。

ペベル。おい、ちいさん——なぜさう嘘ばかりつくんだい。
巡禮。ええ。

ペベル。おめえ豊か。なぜ嘘をつくんだと聞いてるんだ。

巡禮。いつわしが嘘をついた。
ペベル。のべつについてるぢやねえか……おめえに言はせりやあ、あすこも好い、ここの好いだ……それが嘘だと言ふのよ。なぜさう嘘をつくのだ。

巡禮。本當だよ。嘘だと思ふなら、行つて見るがいい、分かるから……きつとわしに禮を言ふやうなことになるから……一體お前さんは、なぜこんなところにぐづぐづしてゐるんだい。そして……又なぜそんなに眞實といふことを大事がるんだい。よく考へて御覽。眞實は君のおとし穴だ。
ペベル。おとし穴だつて好い……構ふもんか。

巡禮。君は實に妙な男だ。何も自分から頭を突つ込まずともものことぢやないか。

帽子屋。何をおめえ達はぐづぐづ言つてるんだ。分からねえな……一體眞實のどんなのが入用なんだ。ワシカ。そんなものが何になるんだ。おめえについての眞實なら……おめえ自分で知つてるぢやねえか……世間様も御承知だあ。

ペベル。黙つてろ。があが言ふな。先づ、ぢぢいに聞きたいことがある……おい、巡禮……一體、神様といふものは在るのか。

巡禮、笑ひて答へず。

帽子屋。人間といふ奴は川を流れる鮑つ屑のやうなものだ……出来上がった家はちやんと立つてゐる……だが、鮑つ屑はどんどん流れて行く。

巡禮。(やさしく) お前さんが神様を信仰すれば——神様は在る。信仰しなけりや無い……人の信仰するものは……きつと存在する。

ペベルは、黙つて驚いたやうに老人の顔を見る。

帽子屋。どら、茶でもやつて来ようか……一緒に茶店へ行かねえか。え。

巡禮。(ペベルに) 何をそんなに見つめてゐるんだ。

ペベル。ぢやあ……何かい……おめえは。

帽子屋。それでは、一人で出かけるかな。(戸口を出でんとして、入り来る主婦に突き當る)

ペベル。ぢやあ……おめえは……さういふ。

主婦。(帽子屋に) ナスタアシャはゐるか。

帽子屋。ゐねえよ。(退場)

ペベル。ああ……来たな。

主婦。(鏡前屋の妻の寢臺に歩み寄る) まだ生きてるかい。

巡禮。そつととしてやれよ。

主婦。まあ。なぜお前さんはここにぐづぐづしてゐるんだい。

巡禮。出て行けと言ふなら……出て行くよ。

主婦。(ペベルの部屋の戸口に近寄る) ワシカ。お前さんに話があるんだよ。

巡禮、玄關の戸口へ行き、一度戸をあけ、音をさせてそれを閉づ。やがて、靜に寢床の上に登り、そこより暖爐の上にあがる。主婦ペベルの部屋に入る。

主婦。(内より) ワアシヤ、お出でよ。

ペベル。行かねえ……厭だ。

主婦。(又出で来る) どうしたの。なぜそんなに癪を言ふの。

ペベル。氣が減入つてたまらねえんだ……もうここにゐる奴等にやあ、みんな飽きてしまつたんだ。

主婦。そして、あたしも……飽きられた一人かえ。

ペベル。さうだ。

主婦、肩に掛けたる布を烈しく引張り、腕を胸に押しつける。やがて鏡前屋の妻の寢臺に近寄り垂幕のうしろを窺ひ、それからペベルの所へ歸つて来る。

ペベル。さあ……言つてしまへ。

主婦。何を言ふんだよ。無理に可愛がらせようたつて、それは駄目だよ……あたしや可愛がつておくれよつて、泣きつくやうな柄ぢやないんだからね……だけど、ほんとのことをよく言つておくれだ

つた。

ペベル。ほんとのことを言つたとは。

主婦。ああ……あたしに飽きたつて言つたらう……それとも、それは嘘かい。

ペベル、黙つて女の顔を見る。

主婦。(男に近寄る) 何をそんなに見るの。あたしの顔をお忘れかい。

ペベル。(吐息をついて) おめえは別品だ。(主婦、男の首に腕を巻く。男は肩をゆすつて、女の腕を振り拂ふ) が、おめえの事は、なんとも思つちやゐねえんだ……おれもおめえとは永々一緒に暮らして来たが……實あ、本當におめえが好きになつたことは、一度もねえんだ。

主婦。(小聲に) まあ……へええ。

ペベル。だから、お互にもうなんにも言ふことあねえ……なんにもねえ。さ、出て行つてくれ。

主婦。他にほかに好い人が出来たの。

ペベル。どうだか、おめえの知つたことぢやねえ……若し出来たにしたところで……おめえをなかうと仲人にや頼まねえ。

主婦。(意味ありげに) どうだか分るものか……あたしのお蔭で、多分その思ひも叶ふだらうよ。

ペベル。(疑ひて) 一體、誰のことだ。

主婦。誰のことを言つてるか、分かつてる癖に……おとぼけでないよ。あたしは何もかも言つてしま

ふよ。(小聲に) あたしはこれだけお前さんに言つときたい……お前さんは人を酷い目に逢はしたんだよ……お前さんは平氣な顔をして人をぶつたんだよ。鞭か何かでぶつやうにさ……しよつちう人のことを、可愛い可愛いなんて言つてゐながら……急に。

ペベル。急にだと。何が急になもんか……もうずつと前からさう思つてゐたんだ……おめえには情がねえ……女にやあ情がなければ駄目だ。男は獸けだものよ……おれ達は獸のことより外ほかはなんにも知らねえんだ……だから、おれ達は、女の情で人間らしくして貰はなくちやあならねえんだ……おめえはおれに何をしてくれた。

主婦。濟んだことは濟んだことさ……自分で一度かうと思つたことは、中々抑へられるもんぢやないよ……もうあたしを可愛がつてくれないと言ふんなら——それで好いさ……あたしやちつとも困りやしない。

ペベル。ぢやあ、宜しい。それで話が分かつた。さ、仲よく別れよう……喧嘩をしねえで……心持よく。

主婦。お待ちよ。何もそんなに急がなくなつて好いぢやないか。あたしはお前さんと一緒に暮らすやうになつてからといふもの……きつといつか、この五味溜たぶから、あたしを救ひ出してくれるだらうと、しよつちうそればかり心待ちに待つてゐたんだよ……内の亭主だの、伯父さんだの……この生活だのといふものから、きつとあたしを自由の身にしてくれるだらうと、しよつちうそればかり

楽しみにしてゐたんだよ……ことによると、あたしはお前さんに惚れてゐなかつたのかも知れないねえ……きつとお前さんの體の中にある、自分の望や自分の夢に焦れてゐたんだよ……分かるかい。あたしはお前さんが、いつか連れ出してくれるだらうと、始終さう思つてゐたんだよ。

ペベル。おめえが釘で、おいらが釘拔だといふわけでもあるめえ……おれの方ぢや又おめえがきつとうまく奴をどうにかしてしまふだらうと、さう思つてゐたんだ……おめえ中々悪者だからな。(机の前の腰掛に腰をかける)

主婦。(ペベルに靠れ掛かりて) ワシカ、二人で助けつこをしようぢやないか。
ペベル。どういふ工合によ。

主婦。(小聲に、併し力強く) 妹が氣に入つたんだらう。知つてるよ。

ペベル。それでおめえ、あんなにあの子をぶつんだな。もうあの子に指でも觸さはつたら承知しねえぞ。好いか。

主婦。まあ、お待ちよ。さう直ぐ眞赤になるものぢやないよ。靜に話をしたつて、分かることぢやないか、仲よくさ……妹と一緒におなりよ、いつでもお前の好い時に。かかりはあたしが出て上げようぢやないか……三百兩位ちひらひもつとはひつたら、もつと上げる。

ペベル。(腰をかけた儘、體を前後に揺り動かす) 待て……どういふわけだよ。何の爲によ。

主婦。その代り、内の亭主から、あたしを自由の身にしておくれよ。あたしの首から、あの繩をとつ

ておくれよ。

ペベル。(小聲に口笛を吹く) よう、こいつあうまいことを考へ出したな……亭主は墓へ叩つ込む、男は懲役に送つてしまふ、そして自分だけ。

主婦。だけどお前さん。どうしてお前さんが懲役などに行かなきゃならないの。何も、お前さん、自分でやらなくたつて……仲間にはやらせりや好いぢやないか。よし、お前さんが自分でやつたところ——何が知れるものかね。よくお考へよ……ナタアシヤは自分のものになるし……お金は手にはひるし……どこへでも勝手なところへ……逃げて行けるんだよ……さうすりやあ、あたしも自由の身になれるし……妹も自由の體になるんだ。妹だつて、……あたしを離れた方がどんなに仕合せだか知れやしない。あたしはちよいとでもあの子の顔を見ると、腹が立つて、しやうがないんだ……あの子がこんなに憎いのも、みんなお前さんのお蔭だよ……あたしはどうしても自分を抑へることが出来ないんだもの……あたしは随分妹をぶつたり叩いたりしたねえ、しまひには妹が可哀さうになつて、ぶつてる自分が泣き出すんだよ……それでも——やつぱりぶつんだ。まだこれからもぶつて遣る。

ペベル。けだもの。自分の残酷なことを自慢する奴があるか。

主婦。自慢をしてゐるんぢやない。ほんとのことを言つてるんだ。考へて御覽。お前さんは内の老ぼれのお蔭で、もう二度も牢屋へぶちこまれてるんぢやないか……みんな、あいつの慾張りからだ……

……ほんとに、蝨のやうに人に食ひついて……もう四年からあたしの血を吸つてやがるんだよ。ほんとに、まあ、なんだつてあんな奴を亭主に持つたんだらう。おまけに、ナタアシヤまでいぢめやがるんだ。しよつちうあの子をつかまへちやあ、乞食、乞食なんて言やがつてさ。あいつはバチルスのやうな奴だ。

ペベル。なかなかうまく言ひ廻すな。

主婦。何も言ひ廻しやしないよ……お前さんにはちやんと分かつてる筈だ……これが分からなけりや馬鹿だ。

亭主、そつと入り來り、鞆音を盗んで前へ進む。

ペベル。(主婦に) 好いから……もう行つてくれ。

主婦。よく考へてお置きよ。(亭主に氣がつく) なんだい。また、あたしの跡をつけて來たね。

ペベル、飛び上り、恐ろしき顔をして亭主を見る。

亭主。ああ……おいらだ……おいらだ……お前達二人つきりか。ああ、成程……ちよいと、その、おしやべりをしてゐたといふ譯だね。(突然、足にて床を踏み鳴らし、主婦に向つて聲高にどなる) やい、ばいた……乞食、やくざ野郎。(答ふるものは反響なき沈黙のみ。亭主、おのが聲に戦く) ああ、神様、どうぞお許し下さいまし……ワシリイサ、てめえ又おれに罪を犯させたぞ……おれはてめえを方々探して歩いてゐたんだ、(どなる) もう寝るんだ。てめえ、お燈明に油をつくのを忘

れたな……ええ、乞食、淫賣。(震へる兩の拳を女の顔の前へ突き出す)

主婦は靜に戸口へ進み、そこにてペルを振り返り見る。

ペル。(亭主に) やい、畜生。出て行け。

亭主。(どなる) おれはこの主人だ。てめえこそ出て行け。泥坊。

ペル。(陰氣に) 出て行け、ミシユカ。

亭主。出て行かねえな……出て行かなきや……おれが。

ペル、亭主に飛びつき、喉を捕へて、ゆすぶる。暖爐の上より、けたたましき寢返りの音、あ

やしく長き欠伸あくびの聲聞こゆ。ペル、覺えず手を放す。亭主、聲高に叫びながら、戸口の方へ馳

せ行き、玄關へ退場。

ペル。(暖爐の前の寢床に飛乗る) 誰だ……暖爐の上にあるのは誰だ。

巡禮。(首を出す) なんだね。

ペル。おめえか。

巡禮。(落ちついて) わしさ……わしだよ。

ペル。(玄關の戸を締め、門を探す、見當らず) ええ、畜生め……おりて來い。ぢぢい。

巡禮。今すぐ……おりるよ。(降りる)

ペル。(亂暴に) てめて、なんだつて暖爐などへ上がったんだ。

巡禮。外ほかに行くところがないからさ。

ペル。なぜ玄關へ行かねえんだ。

巡禮。あすこは寒い……わしは年寄だ。

ペル。今のを聞いたか。

巡禮。聞いたともさ。聞かない筈がないぢやないか。わしは躰ぢやないもの。ああ、君は仕合せ者だ

……ほんとに仕合せ者だ。

ペル。(疑ひて) おれが仕合せ者だと。なぜよ。

巡禮。わしの暖爐へ上がつてゐたのが……それが、お前さんの仕合せだつたと言ふのだ。

ペル。なんだつて、あんな聲を出したんだ。

巡禮。熱くなつて來たからさ……それが、お前さんの仕合せだつたんだよ……あの時わしは考へたん

だ。若し、君が取りのぼせて……親爺の首でも絞めたら。

ペル。ああ……絞めたかも知れなかつた……おれはあいつが嫌ひなんだ。

巡禮。そんなことはちつとも珍しくない……そんなことは毎日ある。

ペル。(笑ふ) ふむ……おめえも遣つたことがあるんぢやねえか。

巡禮。まあ、君、わしの言ふことを聞き給へ。あの女に近づいてはいけないよ。どんなことがあらう

とも、決してあの女を近づけちやいけない……黙つてゐても、あの女は、もうぢき亭主を片づけて

しまふよ。お前さんなぞがやるより、ずつとうまくやらあ。決してあんな悪魔に耳をお貸しでないよ。まあ、わしを御覽、わしの頭はこの通りすつかり禿げてゐる……どうしてかう禿げてしまつたんだらう。みんな女の爲さ……わしは、この頭に生えてゐた髪の手よりも澤山の女を見た……でもあのワシリイサといふやうな奴はなかつた……あいつはベストより恐ろしい奴だ。

ペベル。おれはおめえに、禮を言つて好いのか悪いのか……分らねえ……それともおめえも。

巡禮。もう、なんにも言はないで……わしの言ふ通りにするさ。惚れた娘があるのなら——その手をとつて、二人で逃げ出さ。遠くへ行つてしまふさ、うんと遠くへ。

ペベル。(陰鬱に) 人間といふものは、誰が好いのだか、誰が悪いのだか、中々分かるもんぢやねえ……どうして……とても分かるもんぢやねえ。

巡禮。そんなことはどうでも好い。人間といふ者は、ああなつたり、かうなつたり……氣の向きやうで、色々になるものさ。だから、けふよくても、あす悪くなるまいものでもない。若し心底しんぞこその娘が好きなのなら——連れて行くことさ、さう極きめてしまふさ……でなけりや、ひとりで行くんだ……君は若いんだ……女に縛られるのはまだ早い。

ペベル。(老人の肩をつかまへて) だが、おい——なぜ、おめえはこんな話を。

巡禮。まあ、待て。放してくれ……アンナの、様子を見て来てやらなきや……大層喉が苦しさうだ。

(錠前屋の妻の寢臺に近寄り、垂幕をはねのけ、そこに横たはれる者をちつと見守り、手にてゆす

ぶり見る。ペベル、沈んで、心配さうに老人のする事を見てゐる) ああ、全知全能の主エス・クリスト。只今この世を去りました婢しもよアンナの魂を、安らかにおん身の傍へ、召させ給へ。

ペベル。(小聲に) 死んだかい。(近寄らず、延びあがりて、アンナの寢臺の方を見る)

巡禮。(小聲に) やつと苦痛が終つたのだ……時に、これの亭主はどこにゐるだらう。

ペベル。無論、酒場さ。

巡禮。知らせてやらなきやなるまい。

ペベル。(身を竦めて) おいらは死人が大嫌ひだ。

巡禮。(戸口へ行く) 死人を好く奴があるものか。愛さなくちやならないのは、生きた人間だ……生きた人間だ。

ペベル。おれも一緒に行かう。

巡禮。恐こはいのか。

ペベル。おらあ死人は嫌ひだ。(老人と共に急ぎ退場。舞臺暫く空となる。玄關の戸口の外より、陰鬱にして混雑したる怪しき物音聞こえ来る。やがて、役者入り来る)

役者。(戸を締めず、闕の上に立ちゐて、大體にどなる。両手はしつかと戸口の柱を掴む) ちいさん。ルカ。へ。どこへ隠れたんだ。やつと思ひ出したよ……さあ、聞いてくれ。(よろけながら、二歩前へ出て、姿勢を整へ、デクrameエションを始める)

人、聖なる誠に至るの
道を見出ださざれば、

世は擧つて、世の心を捕へむとする
うつけ者の夢を稱へん。

ナタアシヤ、役者のうしろの戸口にあらはれる。

役者。(續ける) ちぢい……聞けよ。

太陽、明日

地に光を送るを忘れなば、

世を擧つて、赤金に輝く

うつけ者の夢を稱へむ。

ナタアシヤ。(笑ふ) まるで案山子だわ。又酔つて来たんだよ。

役者。(女の方を振り向く) ああ、おめえか。ちぢいはどこにゐるんだ。あの、可愛い、親切な、お

ぢいちゃんは……おや、だあれもゐねえな……ナタアシヤ、あばよ、あばよ。

ナタアシヤ。(役者の側へ歩み寄る) まだ入らつしやいとも言はないのに、もう然様ならなの。

役者。(女の前に立ちほだかる) おれはもう行くんだ……旅へ出かけるんだ……春が来ると一緒に、

おれは遠くへ行つてしまふんだ。

ナタアシヤ。おどきよ……一體、どこへ旅に出かけるの。

役者。或町を探しに行くのよ……そこへ行くと、おれの體が直るんだ……おめえもここは出る方がい

いぜ……オフィイリアどの……尼寺へ行きやれさ……好いか、そこへ行くとオルガニズムの病院
があるんだ……即ち、大酒飲みの爲に出来た病院があるんだ……素敵な病院だぜ……どこもかも大
理石よ……大理石で張りつめてあるんだ……明かるいぜ……綺麗だぜ……うまい物が食へるんだぜ

——それで、ただよ。ほんとに大理石で張り詰めてあるんだ。おれはきつとその町を見つけ出して
もとの體にして貰ふんだ……新しい生活を始めるんだぜ……わしはこれから生れ變るのぢや……キ
ング・リアアの臺詞のやうによ。ナタアシヤ、おめえは……おれの藝名を知るまい。スエルチコフ。
サウルスデユスキイてんだ……ここにゐる奴等あ、誰も知つちやゐねえ、だあれもよ。ここにゐち
やあ、おれも名なした……名をなくすといふことが……どんなに恥辱なことだか……おめえなんか
にや、とても分かるめえ。犬でさへ、名は持つてらあ。

ナタアシヤ、靜に役者のうしろを廻りて、錠前屋の妻の寢臺の側に立ち、死人をちつと見る。
役者。名のなきところ——人なしだ。

ナタアシヤ。御覽よ……まあ、可哀さうに……たうとう死んぢまつたんだよ。

役者。(首を振りて) そんなことあるめえ。

ナタアシヤ。(脇へどく) でも、確にさうだもの……来て御覽なね。

帽子屋。(入り来る) 何を見てるんだい。

ナタアシヤ。アンナが死んぢまつたんだよ。

帽子屋。ぢやあ、もう咳もおしまひになつたね。(アンナの寢臺に歩み寄りて、一寸死人を見詰め、すぐ自分の場所へ行く) クレシチに知らしてやらなきやいけねえ……あいつが始末をしなきやならねえことだ。

役者。おれが行かう……おれがあいつに知らして来てやらう……アンナもたうとう名をなくなしてしまつたなあ。(退場)

ナタアシヤ。(部屋の眞ん中に立ちて、なかばひとりごと獨言のやうに) あたしも……いつか……こんなになつて死んでしまふんだらう。

帽子屋。(寢床の上にぼろぼろになりたる古き毛布を廣げる) どうしたんだ……何をぶつぶつ言つてるんだ。

ナタアシヤ。なんでもないんだよ……ちよいと今、ひとりごと獨言を言つたのさ。

帽子屋。ワシカを待つてるんだな……氣をつけろよ……あいつは今におめえの頭をたた撲るから。

ナタアシヤ。誰にぶたれるのもおんなじさ。同じぶたれるなら、あたしやあの人**にぶた**れたいよ。

帽子屋。(横になる) 御勝手になさいました……おれの知つたことぢやねえ。

ナタアシヤ。でも、アンナにとつちや……死ぬのが一番よかつたんだよ……だけど、可哀さうだねえ

……ああ、神様……人間は何の爲に生きてゐるんでせう。

帽子屋。誰だつて何の爲に生きてるんだか分からねえ……だが、やつぱり生きてゐるんだ。人間は、生れて、暫く生きてゐて、そして死ぬんだ。おれだつて死ぬんだ……おめえだつて死ぬんだ……何も可哀さうなわけはねえ。

巡禮、韃鞨人、人足、錠前屋など入り来る。錠前屋は沈み返りて、皆々のらしろに従ふ。

ナタアシヤ。しいつ……アンナが。

人足。もう聞いた……神様、かの女をぢや憐れみ給へ。

韃鞨人。(錠前屋に) 擔ぎ出さなくちやいけねえな。玄關へ運び出さなくちやいけねえな。ここは死人を置くところぢやねえ。生きた人間の寝るところだ。

錠前屋。(小聲に) 擔ぎ出さうよ。

皆々、舞臺の廻りに立つ。錠前屋、人の肩越しに妻の死骸を見守る。

人足。(韃鞨人に) 匂ふと思つてるんだな。大丈夫だよ……もう生きてる内にすつかりかわ乾き切つちまつてらあ。

ナタアシヤ。まあ……だあれも可哀さうだと思つてやらないんだよ……おくやみのひとりごと一言ぐらゐ誰か言つても好いぢやないの。

巡禮。怒るんぢやないよ……なあに、なんでもないことだ。死んだ人間なんか誰が可哀さうだなど

と思ふもんか。生きてる人をさへ可哀さうだとは思はないんだ……自分自身をさへ可哀さうだとは思はないんだ。どうだい。

帽子屋。(欠す) 何か言つたつて、しやうがねえぢやねえか……もう死んでしまつたんだ……なんと言つたところで助かりつこはねえんだ……病氣の間なら役にも立たうが、死んでしまつちやなんにもならねえ。

韃鞨人。(脇へどく) 警察へ届けなけりやいけめえ。

人足。さうよ——そりや規則だ。クレシチ、もう届けて来たのか。

錠前屋。いや。まだだ……さて、埋葬だが、おれの懐には四貫しきやねえ。

人足。借りりやあ好い……でなけりや、みんなで出し合つてやらう……五錢でも、十錢でも、身分相應に出すさ……だが、警察へは早く届けねえといけねえぜ、でねえと、撲り殺してもしたやうに取られるぜ……でなくとも何とか又因縁をつけられちや詰らねえ。(韃鞨人の既に横になりある寢床の方へ行き、その側へ寝る支度をする)

ナタアシヤ。(帽子屋の寢床へ行く) あたしは、きつとアンナの夢を見るよ……あたしはいつでも死

んだ人の夢を見るんだもの……あら、支關は眞つ暗よ……ひとりぢや恐いねえ。

巡禮。(女より目を放さず) 生きた人間を恐がるが好い。

ナタアシヤ。一緒に来ておくれよ。おぢいさん。

巡禮。よし……よし……ぢやあ一緒に行つてやらう。(兩人退場。稍長き間)

人足。(欠す) ああ、ああ。(韃鞨人に) もう直ぐ春が来るなあ、ハツサン……さうすりやあお互に

又ちつとはお天道様が拜めるぜ。もう百姓が犁や耙をつくろつてゐる……もうぢき野らへ出かける

んだ……ふむ。ところで、おれ達は……なあ、ハツサン、もう軒をかいてやがる。モハメツトめ。

帽子屋。韃鞨人といふ者はよく寝るものだ。

錠前屋。(部屋の眞ん中に立つて、ぼんやり自分の前を見つめてゐる) さて、これからどうすりや好いんだ。

人足。横になつて寝るさ……それつきりの話だ。

錠前屋。(小聲に) そして……かかあは。かかあはどうすりや好いんだ。

答ふる者なし、サチンと役者、入り来る。

役者。(どなる) いやう、ぢいさん。忠節無比のケント殿。

サチン。ミクルハ・マクライの御入來だぞ……は、は。

役者。もうすつかり極めつちまつたんだ。ぢいさん、町といふのはどこにあるんだ……おめえはどこにあるんだ。

サチン。やい、フアアタ、モルガアナ、フアンタスマゴリイ。ぢぢいはおめえを欺したんだぞ……そんな町がどこへ行つたつてあるものか。町もねえ、人間もねえ……全體、なんにもねえんだ。

役者。嘘をつけ。

韃靼人。(飛び上がる) 亭主はどこにゐるんだ。亭主に會はう。寝られなきやあ、錢を取られるわけはねえんだ……死人だの……酔っぱらひだの。(急ぎ退場。サチン、うしろより口笛を吹く)

帽子屋。(寝ぼけた聲をして) みんな寝ろよ。騒いでくれるなよ……夜は寝るもんだ。
役者。ほんとだ……成程、ここに……死んでる奴があらあ。(額をこする)「わが綱は死人しびとをかけぬ」
つてのがあるな……ベエペランジュエルの……歌の中によ。

サチン。(どなる) 死人にやあ聞こえねえんだ。死人にや分からねえんだ。構はねえから吠えろ、どなりてえただけどなれ……死人にやあ聞こえねえんだ。(戸口に巡禮あらはる)

第三幕

家屋の間に挟まりたる明き地。ぼろ屑散らばり、雑草生ひ茂る。後景に高き煉瓦の防火壁あり、天を蔽ふ。その下に接骨木の叢くさむら。上手に角材を組み合せたる暗色の壁、庭に建てたる附屬家屋納屋から既の一部なるべし。下手に木賃宿の灰色の壁、そこここに漆喰僅に残りゐる。この壁は斜になりをり、後部の角は殆ど舞臺の中央まで突き出してゐる。この壁と防火壁との間に——狭き路次。灰色の壁に窓二つ、一は地面と同じ高さには他はこれより凡そ四五尺高く、防火壁寄りあり。灰色の壁に添ひて、覆へされたる大なる櫓と一丈程の長き角材。上手の壁添ひには、古

き板と鉤をかけたる角材とを積み重ねたり。夕暮。太陽は西に傾きて防火壁の面に赤光を投ぐ。やうやう春となりしばかりにて、接骨木の黒き小枝も未だ芽を吹かず、雪尙そこに残りゐる。下手の角材に、ナタアシャとナスチャ並びて坐す。上段の板には、巡禮ルカと男爵。上手の壁の側なる角材の上には、錠前屋クレシチ坐す。低き方の窓より帽子屋ブノフ覗きゐる。
ナスチャ。(眼を閉ぢ、首にて話にタクトをとりつつ。唄ふが如き調子にて物語る) それで、その晩になるとその人が約束通り庭の東屋あづまやへ来て下さる……あたしは、恐いのと悲しいので慄へながら長い間待つてゐたのだよ。その人も、體中がぶるぶる慄へてゐて、顔にはもう血の氣のない。でも、手にはピストルを持つてゐたのだよ。

ナタアシャ。(向日葵ひまわりの種を噛みみる) まあ、なんだつて、學生さんでもものは、みんな氣違ひだねえ。
ナスチャ。そして、恐ろしい聲をして言ふには、わが最愛なる戀人よ。

帽子屋。は、は。「最愛なる」と言つたかい。

男爵。靜にしろ。黙つて嘘をつかせろよ——聞きたくなきや聞くに及ばねえんだ……それからどうしたい。

ナスチャ。わが心の限り愛するものよ、わが黄金こがねの寶よ、とその人が言ふのだよ。僕の両親は僕が君と結婚することを許して呉れない……そして、僕が君と手を切らなければ呪ふと言つて嚇おどかすのだ。だから僕は死ぬより外はない。かうその人は言ふのだよ……その人のピストルは大變大きなの

で、玉が十も入つてゐたのだよ……然様なら、わが親愛なる心の友よ。僕の決心は曲げることが出来ない……僕は君といふ者なしには、生きてゐられない。とその人は又言ふのだよ。そこで、あたしはから返事をしたのだよ。忘れ難^{がた}な友よ……ラウウリよ。

帽子屋。(驚きて)なんだと……クラウルぢやねえか。

男爵。(笑ふ) ナスチャ、間違つたぞ。こなひだはガストンて言つたぞ。

ナスチャ。(飛び上る) お黙り……ごろつき……宿なし。一體お前達は戀といふものがどんなものか知つてるのかい……眞實な、純潔な戀がどんなものか……あたしは……あたしはその純潔な戀を味はつたのだよ。(男爵に) やい、泣蟲……それでもお前は教育のある人間かい……それでもむかし床の中で珈琲^{コーヒー}を飲んだ人かい。

巡禮。まあ辛抱して聞いてお遣り。女の子をおいぢめでない……何を話してゐるかといふことよりはなぜこんな話をするかといふところを見てやると好いんだ。さあ、ナスチャ、構はずに話した……構ふもんか。

帽子屋。構はずに羽根を染めろ、鳥……さあ始めた。

男爵。やれ、やれ。

ナタアシャ。あんな人達にお構ひでないよ……一體あの人達はなんだい。焼けるからだよ……なんにも自分に話すことがないからだよ。

ナスチャ。(また坐る) いや……もう話さない……みんながほんとにしないで……笑ふんなら。(突然詞を切り、二三秒の間沈黙して、再び眼を閉ぢ、手にて又話のタクトを取りつつ、聲高に、口早に語り續ける。遠くに音楽聞こゆ) それから、あたしはから返事をしたのだよ。わが生の歡^{よろこ}びなる君よ。わが光り輝く星よ。あたし、とてもあなたが無くては生きてはゐられません……あたしは氣ちがひのやうにあなたを愛してゐます。この胸に心臓が鼓動を打つてゐる限りは、いつまでも、いつまでも、愛してゐます。併し、あなたのお若い命を絶つことは、どうぞやめて下さい……なぜと言へば、あなたの大事な御兩親は、あなたを唯一の樂^{たのしみ}にしておるでなさるのです——御兩親にとつては、あなたは無くてはならぬお方なのです……どうぞあたしを捨てて下さい。あたしはあなたを戀ひ焦れて、死んでしまつた方が好いのです……あたしは寂しい……あたしは——獨りぼつちです……どうか、あたしに死なせて下さい……あたしが死んだつて、なんでもありません……あたしはなんにも出来ないんですもの……あたしは、なんにも取柄がないんですもの……ほんとに、なんにもないんですもの。(手にて顔を蔽ひ、靜に泣く)

ナタアシャ。(ナスチャの側へ寄りて、靜に) 泣かなくても好いわ。

巡禮、笑ひながらナスチャの頭を撫づ。

帽子屋。(大聲にて笑ふ) 馬鹿馬鹿しい……なんでえ。

男爵。(同じく笑ふ) おい、ぢいさん……おめえはそいつの話すことをほんとにするのかい。みんな

あの本に書いてあるんだぜ……「悪縁」て奴によ……くだらねえことばかり書いてあるんだ。ほつとくが好いや。

ナタアシヤ。お前さんの知つたことぢやないよ。黙つといでよ。黙つといでな。罰あたり。

巡禮。(ナスチヤの手をとりて) さあ、さあ、さう怒るもんぢやない……なんと言はれたつて、構ふものかな……わしにはよく分かつてゐる……わしはお前さんを信じてゐる……お前さんの方が、正しいんだとも。あの人は間違つてゐるんだ……お前さんが自分でさうだと信じてゐれば、それでも、さういふ……高尚な戀をしたに相違ないんだ……確だとも。そりや、確だとも。お前さんの……好い人に、さうひどく當るものぢやない……あの人が笑つたのは、多分そのなんだよ、ただ……その……焼けたからだ……きつと、これまでに、自分が一度も、純潔な奴を味はつたことがないからさ……さうだよ。確にさうだよ。

ナスチヤ。(自分の腕を胸におしつけて) おぢいさん。全く……ほんとなのよ。みんな、ほんとなのよ……その書生さんは佛蘭西人だつたの……ガストオツシヤつてね……可愛らしい黒い髭のある人でね……いつでも塗り靴をはいてるんだよ……それが嘘なら、あたしの首をとつても好い。そしてまあ、どんなにあたしを可愛がつてくれたらう……まあ、どんなに可愛がつてくれたらう。

巡禮。さうだらうとも。もうなんにもお言ひでない。わしはお前さんを信じてゐる。で、成程、塗り

靴をはいてゐたんだね。成程、成程、それで、無論お前さんもその人を愛してゐたんだ。

兩人、角を廻りて退場。

男爵。馬鹿な女だ。お人よしたが、馬鹿な奴だ……たまらねえ程馬鹿な奴だ。

帽子屋。どうしてああのべつに嘘がつけたもんだらう。豫審廷へでも出たやうによ。

ナタアシヤ。でも、嘘のことがほんとのことより面白いに違ひないわ……あたしだつて。

男爵。「あたしだつて」どうなんだ。あとを言へ。

ナタアシヤ。あたしだつて、いろんなことを考へて見るわ……考へて見て……待つてゐるわ。

男爵。何をよ。

ナタアシヤ。(困つて笑ふ) それはねえ……まあ、かう思ふのさ……あしたになると、きつと誰か来る……誰か、知らない人が……でなければ、何かある……何か、今まで無かつたやうなことがある……わたしは、もう随分永い間、それを待つてゐるのよ……今でもまだ、待つてゐるわ……でも、結局……それがはつきり見える段になると……當てにしてゐた程大きなものぢやないかも知れない。

稍長き間。

男爵。(笑ひながら) 當てにすることの出来るものが、一つだつてあるものかな……少くともおれは——なんにも當てにしちやゐねえ。おれにとつちやあ……みんな一度宛あつたことだ。みんな過去よ……結局なあ……それがどうした。

ナタアシヤ。あたしは、また時々こんなことを考へるの。あした……あたしは不意に死んぢまふんぢやないかしらつて……するともう、恐ろしくてたまらなくなつて来るの……夏になると、よく人は死ぬことを考へるわねえ……そら、夕方が来る……いつ……かみなりさま雷様に落ちて來られるか分かりやしないわ。

男爵。おめえの生活も樂ぢやねえな……姉がああいふ悪魔だからな。

ナタアシヤ。だあれも樂な生活をしてゐる人はないわ、みんな苦しんでるわ、あたしの知つてるだけぢやあ。

錠前屋。(これまで、動かず、仲間に入らず、横になりゐるが、急に飛び上がる)みんなだと。嘘をつけ。みんなぢやねえ。みんなが苦しいなら……それで好いんだ……少しも愚痴を言ふこたあねえんだ。

帽子屋。おい。氣でも違つたのかい。なんだつて急に吠え出すんだ。

錠前屋、再び横になり、空を見つめる。

男爵。だが、ナステニカ先生どうしてるか、ちよいと見て來なくちや……仲直りをしなくちやならねえからな……でねえと、酒代に差支へらあ。

帽子屋。人間といふ奴は、嘘をつかずにやゐられねえものと見える……おりやナスチャですつかり分かつてしまつた。塗りたてるなあ、あいつの癖だ……そこで、魂までも塗り立てようとしやがるん

だ……あの小さな魂を眞つ赤に塗らうとするんだ……だが、他の奴等までが——なぜ又嘘をつくんだらう。例へばルカぢぢいだ……あいつは何でも話にしてしまやあがる……それが何の役に立つんだ……なぜあいつはしよつちう嘘をつくんだらう……あの年をしてよ。

男爵。(笑ひながら、角の方へ行く) おれ達は、みんな……灰色の魂を持つてゐるんだ……ちつとは赤く塗りたくなる奴よ。

巡禮。(角のうしろより現る) おい、男爵——なぜあの子をいぢめるんだ。うつちやつて置けよ。

あの子は時間をつぶす爲に泣くんのだ……楽しみに涙を流すんだ……それがお前さんの害になるのかい。

男爵。あいつは馬鹿なんだ、ぢいさん。とても我慢が出來ねえんだ……けふは、ラウウリだ、あしたはガストンだ……それで話はいつまで立つても同じなんだ。だが、それはそれとして——仲直りをして來なくちやならねえ。(退場)

巡禮。早く行つて、あの子に親切にしてお遣りよ……誰にでも親切にしてお遣りよ——だあれもいぢめちやいけないよ。

ナタアシヤ。お前さんは好い人だねえ、おぢいさん……お前さんはどうしてさう好い人なの。

巡禮。わしが好い人だと言ふのかい……ほんとにさうならいいが。(赤き壁のうしろに優しき唱歌と手風琴の曲聞こゆ)そら、娘さん——あすこにも好い人が一人あるに違ひない……われわれは人類

全體に對して、憐れみの心を持たなくてはならない。例へば基督だ、ね——基督は總ての人を憐れみ給うた、そしてわれわれにもさうせよと仰せられた……人を憐んでやるには時がある——その時を外さないやうにするが好い。それに就いて、わしにかういふ話がある。わしは以前シベリアのトムスクから餘り離れてゐないところにある、或別莊の番人に雇はれてゐたことがあつた。それは或技師の別莊だつたがな……素敵なところでの……森の眞ん中に建物があるんだ、どことも交通のない素敵に寂しいところだつた……なんでも冬のことでの。人間といつたら、その寂しい別莊にわし一人だつた……素敵だつたなあ、あすこは……實に好いところだつた。ところが或日のこと……誰だか外から匍ひ登つて来る奴がある。

ナタアシャ。泥坊。

巡禮。さうだ。段々近くへ匍ひ登つて来るやうだから、わしは鐵砲を持つて表へ出た……見ると二人の男だ……丁度窓をこちあけてゐるところだつたが、もうそれに夢中で、すぐ側にわしが來てゐるのに、一向氣が附かない。そこで、わしはどなりつけてやつた。やい、うしやあがれ、とね……すると、二人は手斧を振りかざして、わしに掛かつて來た。それから、わしは嚇かしてやつた。よせ。よさないと、撃ち殺すぞ……さう言ひながら一人一人狙つて見せたものだから、二人は直ぐ跪いてしまつた。どうか御勘辨をと、もうぶるぶるしてゐるんだ。ところが、その時、わしは餘つ程積に障つたんだ……その、手斧の一件でさ。で、わしはかうどなつてやつた。森の悪魔め。おれ

がうしやあがれと言つたのに——てめえ達は逃げて行かねえんだ……さあ、てめえ達の内、どつちか一人、あすこの叢へ行つて、何か管になりさうなものを取つて來い。すると一人が取つて來た。そこで、わしは又命令したもんだ。さあ、一人横になれ、も一人はそれを打て。そこで二人はわしの命令通りに、その管で打ちつこをした。お互に散々ぶたれてしまふと、わしに向つてかう言ふんだ。おぢいさん、どうぞ助けると思つてパンを一片おくんさい。これつぼちもお腹ん中にはひつてゐないんですから、と、かうだ。どうだらう、娘さん、これが泥坊なんだぜ。(笑ふ) 手斧を振りかざして人に掛かつて來た泥坊なんだぜ。さうさ……なかなか立派な奴等だつたよ。それから、わしは二人にそいつて遣つた。やい、悪魔め。パンが欲しいなら、なぜ初めからパンをくれと言つて來ねえんだ。すると、その返事がかうだ。わつちどもはもう散々それをやつたのです……おくんさい、おくんさいいつて、幾度方々で頼んだか知れやしません。でも、誰もなんにも呉れないんです……もう我慢がしきれなくなつたんです……な、まあそんなわけで、二人はその冬中わしのところにあることになつた。一人はステパンといふ奴だつたが、よく鐵砲を擔いぢやあ森の中へ行つたよ……も一人はヤコブといふ奴だつたが、この方はしよつちう體が悪くて咳ばかりしてゐたわけ……つまり、それからは、三人で別莊番をしてゐたわけさ。やがて春になると、然様なら、おぢいさんとつてな、二人は露西亞の方へ行つてしまつた。

ナタアシャ。懲役人の逃げ出したのかも知れなかつたねえ。

巡禮。さうさ……逃亡者には違ひない……いづれ自分の殖民地を逃げ出して来たのだ……なかなか立派な奴だつたよ……ほんとに、わしが憐れんでやらなかつたら——どんなことになつたか知れたもんじゃない。きつと、わしを叩き殺して……また法廷へ引張り出されて、牢屋へぶち込まれて、やがてシベリアへ送られたに違ひない……さうなつたつて、それが何になる。牢屋へはひつたつて、決して好いことを覚えやしない、シベリアだつて同じことだ……併し、人間なら——きつと何か教へてくれる。人間なら——きつと何か好いことを教へてくれる……至極やさしくな。

稍長き間。

帽子屋。ふむ——成程。だが、おれは……どうしても嘘がつけねえ。いつでも眞實をさらけ出す。これがおれの考へだ。お氣に召さうと召すまいと、それはおれの知つたことぢやねえ。なんの遠慮が要るものか。

錠前屋。(何かに刺されたやうに、突然飛び上がつて、どなる) 眞實とは何だ。どこに眞實がある。(ぼろぼろになりたる衣服を手にて叩く) 眞實はここにあるんだ——ここによ。爲事しごとがねえ……手にも足にも力がねえ——これが眞實だ。頼るべがねえ、落ちつくところがねえ……もう死ななきやならねえ——これがおめえの言ふ呪ふべき眞實だ。それが……それが何になるんだ。そんな——眞實がよ。ちよつとでも好いから、樂に息をさせてくれ……息をさせてくれ。一體おれが何を悪いことをしたんだ……眞實が何の役に立つ。畜生め。おれは生きてゐられねえんだ……生きてゐられね

えんだ……これが眞實だ。

帽子屋。見ろ……あいつは胸が一ばいなんだ。

巡禮。おう……おう……それで。

錠前屋。(興奮して慄へる) おめえ達は口さへ明きやあ、眞實、眞實と言ふ。なあ、ぢいさん——おめえは誰でも可愛がる……ところがおれは誰でも憎い。これも眞實だ。眞實は呪ふべきものだ。分かつたかい。眞實は呪ふべきものだよ。(見返り見返り、角を廻りて、急ぎ退場)

巡禮。おや、おや。たうとうあいつ氣が違つてしまつた……あんなに急いで、どこへ行つたんだらう。

ナタアシャ。氣違ひのやうにあばれて行つたよ。

帽子屋。うまくやるぜ。まるで芝居だ。よくある奴よ……まだ世馴れねえ人間にはな。

ペベル。(靜に角の所より出で来る) こんにちは。よう、ぢいさん——またおしやべりか。

巡禮。今ここで恐ろしくどなつてゐた奴があるんだ、それを見せたかつたな。

ペベル。クレシチの奴だらう。一體どうしたんだ、あいつは、火傷やけどでもしたやうに、人の側を駆け抜けて行きやあがつた。

巡禮。お前さんだつて、ああ思ひつめりやあ……ああなるさ。

ペベル。(坐る) あいつ位厭な奴はねえ……意地の悪い奴だ。高慢な奴だ。(クレシチの眞似をする)
 「おれは働いてる人間だ」自分より他の奴は、みんな自分より劣等だと言はねえばかりだ……面白
 けりや、自分ひとりで働くがいいや……何もそれを自慢するには當らねえ。働くか働かねえで、人
 間の相場がきまるもんなら……馬にかなふ人間はねえ……馬は荷車を引かあ——それで愚痴一つこ
 ぼしやしねえや。ナタアシヤ、内の奴等はゐるのかい。

ナタアシヤ。みんな墓地へ行つたよ……それからお寺へ廻るんだつて。

ペベル。ぢやあおめえ閑なんだな……珍しいこつた。

巡禮。(深く考ふるところあるらしく帽子屋に) お前さんは眞實といふことをよく言ふが……眞實と
 いふものは、決して何の病氣にでも利くといふ薬ぢやない……眞實さへ持つて行けば、いつでも魂
 の療治が出来るわけのものぢやない。例へて言ふと、かういふ場合だ。わしの知つてる人に正義の
 國を信じてゐる人があつたが。

帽子屋。なにを。

巡禮。正義の國さ。その男の言ふには、この世の中には、きつとどこかに正義の國がある……その國
 には特別な人間が住んでゐる……尊敬し合ひ、助け合ふ、立派な人間が住んでゐる……その國へ行
 くと、何でも好い、何でも美しい。そこで、この男は、この正義の國を探しに行かうと、しよつち
 らさう思つてゐた……ところが、この男は貧乏で、とかく不仕合せだつた……しまひにはもう、寢
 ころんで死を待つより外しやうがないといふまで困つて來た——それでも奴さん、まだ勇氣を失は
 なかつた。時々獨笑をしちやあ獨語を言つてゐる。なあに何でもない——おれは堪へて見せる。
 もう少うし待てば好いんだ——さうすりや、もうこんな生活はうちやつてしまつて、正義の國へ
 行けるんだ……これがその男の唯一の楽しみだつたんだ——その正義の國が。

ペベル。成程、それで。たうとうそこへ行つたかい。

帽子屋。どこへよ。は、は、は。

巡禮。すると、丁度その時、その土地へ——一體これはシベリアであつた話だ——或男が追放されて
 來た。それが學者でね……本だの、地圖だの、いろんな道具だのを擔いで來た……すると今の病人
 は、早速その學者の所へ出かけて行つて、一體正義の國はどこにあるのです、どうしたらそこへ行
 けるのです。どうか教へて下さいましたと言つたもんだ。そこで學者先生、早速本を開いた、地圖を
 廣げた……それから、探したわ、探したわ……だが、正義の國はどこにもない。他のことはみんな
 正確に出てる。どこの國でもみんな書いてある——ただ正義の國だけがどうしても見えない。
 ペベル。(やさしく) 無かつたかい。本當に無かつたかい。

帽子屋。(聲高に笑ふ)

ナタアシヤ。お前さん何を笑ふの。さあ、おぢいさん、それからどうして。

巡禮。ところが、その男は——學者の言ふことを信じない……なあに、きつとそこに出てゐるに違ひ

ありません……何でも好いから、もつと見て下さいましたと、かう言ふんだ。若し正義の國が出てゐないのなら、あなたの本や地圖は一文の値打もないのです、とかう言ふぢやないか。これには學者先生も少しは侮辱を感じたんだね。わしの地圖はどこまでも正確だ。全體正義の國などといふものはどこにも無いのだと、かう言つたものだ——さあ、片つぽはすつかり怒つてしまつた。なんだと……今までおれが、永い、永い、永い間、辛抱に辛抱を重ねて生きて來たのも、畢竟どこかにさういふ國があると信じてゐたからだ。ところが貴様の地圖によると、全然そんなところは無いんだ。そりやあ泥坊も同じこつた……かう言ふかと思ふと又、やい、ろくでなしめ。貴様は詐欺だ。學者ぢやねえ。かうどなりつけて、學者の頭をがんと一つ食はした。やがて又がんと一つな。(暫時沈黙)そして家へ歸ると首を縊つてしまつた。

一同沈黙。巡禮、黙つてペベルとナタアシヤとを見つめる。

ペベル。(小聲に) なんだ、つまらねえ……面白くもなんともねえ話だ。

ナタアシヤ。迷を解かれて……それに勝つことが出来なかつたんだね。

帽子屋。(意地悪く) みんな、作り話よ。

ペベル。ふむ——成程……そこでたうとう正義の國へ行けたわけだな……この世ぢやちよいと見つかりさうもねえからな。

ナタアシヤ。でも可哀さうだわ……氣の毒な人ねえ。

帽子屋。みんな。こしらへ事よ……へ、へ。正義の國か……なんだつてそんなところへ行きたがりやあがるんだ。へ、へ、へ。(窓より消える)

巡禮。(窓の方を見て、頷く) 笑つてるな。ははあ。(稍長き間) ぢやあ、皆さん、御機嫌よう。わしはもうぢきここを立つ。

ペベル。どつちの方へ旅をするんだ。

巡禮。小露西亞の方へさ……あすこでは、近頃親しい信仰が起つたといふ話だ……どういふものか、まあ見て來ようと思つてな……さうさ……人間といふ者は、少しでも好いものを好いものをと、しよつちう求めに求めてゐるものだ……神よ、人間に忍耐を與へ給へ。

ペベル。だが、どうだ……見つかるかな。

巡禮。誰に——人間にかい。確に見つかるね。求める者にはきつと見つかる——熱心に求める者にはきつと見つかる。

ナタアシヤ。さういふ人には、何か見つかるやうにしてやりたいねえ……何か好いものが見つかるやうにしてやりたいねえ。

巡禮。きつと見つかるには見つかるよ。だが力を貸してやらなくちやいけない。ね、娘さん……さういふ人達を尊敬してやらなくちやいけない。

ナタアシヤ。あたしや、とても力なんか貸せやしないわ……あたしは自分が……力を貸して貰ひた

い身の上なんだもの。

ペベル、(しつかりした調子にて) おい、ナタアシャ……おれはおめえに話すことがある……ちいさ
んのある前で……ちいさんは何もかも知ってるんだ……おいらと一緒においで。

ナタアシャ。どこへ。監獄へかい。

ペベル。おいらが泥坊をよすつて話は、もう疾うからおめえにしてあるぢやねえか。神に誓つて——
おれは廢す——おれが一度言つた以上は、けつして間違ひはねえ。これでも讀み書き一通りは習つ
たんだから……暮らし位は樂に立てて見せらあ。(巡禮の方へ首を動かして) ちいさんは、シペリ
アでそれを遣つて見ろと言ふんだ……喜んで行けさうなもんだと言ふんだ……おめえどう思ふ——
行かうか。おりやもうつくづく今の生活が厭になつたんだ。なあ、ナタアシャ。世間には、おいら
より餘計に盜つとをする奴が澤山あるんだ——しかも、そいつ等は世間から尊敬されてゐるんだ……
……おいらはそれを考へて、今まではまあ自分を慰めて來たんだが……結局、それが何になる。な
んにもなりやしねえ。おいらは後悔なんかはしねえ……良心なんてものも信じねえ……だが、唯一
つ感じることがある。それは生活を變へなきやならねえといふことだ。もつと好い生活をしなけ
りやいけねえ。自分で自分の尊敬出来るやうな……さういふ生活をしなけりやいけねえ。
巡禮。その通りだ。神よ共にゐませ……主よ、守りたまへ。お前さんの言ふ通りだ。人間は、自分で
自分を尊敬しなくちやならない。

ペベル。おいらは餓鬼の時分から、泥坊、泥坊で育つて來たんだ……いつでも呼ばれるのが、掏摸の
ワシカだ。泥坊の子ワシカだ。ようし、世間がさう註文するなら構はねえ……世間の註文通り泥坊
になつてやる……おいらが泥坊になつたのは、世間に對する恨みからだ……誰もおいらを泥坊とい
はねえでくれる人がなかつたからだ……ナタアシャ、おめえはもうおれのことを、泥坊とは言ふ
えな……ええ。

ナタアシャ。(沈んで) どうだか、まだほんとは出來ないわ……詞は詞だもの……それに……どう
したんだか……けふは胸がどきどきして……氣が沈んでしやうがないの……何か悪いことがありさ
うなんだよ。ワシカ、なんだつて、けふはそんなことを言ひ出してくれたの。

ペベル。ぢやあ、いつ話せばいいんだ……この話はけふ始めてしたわけぢやねえ。
ナタアシャ。なぜ、あたし、お前さんと一緒に行かなきやならないの。あたしはお前さんが好きだけ
れど……好きで好きでたまらないといふ程ぢやないわ……そりや時々は、ほんとお前さんが好き
になるけれど……またお前さんの顔を見るのさへ厭になることもあるわ。いつでも——好きだと思
つてるわけぢやないわ……ほんとの戀なら、相手の傷なんか見えなくなる筈だけれど……あたしに
は、お前さんの傷がわかるんだもの。

ペベル。なあに、ぢきおいらが好きになるよ、ちつとも心配はねえ。ぢきおいらに馴れて來るから……
……まあ「うん」と言ひねえ。一年以上も、おれはおめえを見てゐたんだ、そして、おめえがしつ

かりした娘だ……正直な、人情のある女だといふことがわかつたんだ……そこで心底から、おれはおめえに惚れたんだ。

主婦ワシリイサ、餘所行の儘にて、高き方の窓に現れ、窓の柱に體を押しつけて凝視す。

ナタアシヤ。そんなに……お前さんはあたしを可愛がつてくれるの、ぢやあ姉さんは。

ペベル。(狼狽して) あんな女はどうだつて好いんだ。あんな奴等は何でもねえ。

巡禮。構ふもんか、娘さん。パンのない時や……蕪でも食べるよ。

ペベル。(陰鬱に) おれを可哀さうだと思つてくれ。おれが今までやつてゐた生活は、決して暢氣な
のぢやねえ——何一つ樂はなしよ、狼のやうに追ひこくられ通しでよ……沼へでも落つこちた人のやうに……手に掴む物といつたら、みんな腐つたものばかりで……頼りになる物はなんにもねえんだ……前にはおめえの姉さんがあんなでなければと思つた……あいつがあんなに貪慾でなければ——おいらはあいつの爲に……どんな危険でも冒したらうと思ふ。おれをほんとに信じてくれるんならなあ……だが、あいつの心は他のものへ向いてゐるんだ……ただ大事なのは金なんだ……自由なんだ……自由に焦れるのも、もつと道樂がしたいからだ。あれぢやあ、おいらの助けにやあならねえ……だが、おめえは——若い樅の木だ、刺はあるが頼りにはなる。

巡禮。娘さん、承知してお遣り、承知してお遣り。好い人間だぜ。かういふ男には、自分が好い人間だといふことを、しよつちう思はせるやうにしてやらなけりやいけな……決してそれを忘れない

やうにな。すると、ぢきにお前さんの言ふことを信じて来る。時々唯かう言や好いのだ「ワアシヤ。お前さんは善人なんだよ……それをお忘れでない」とね。まあ、考へて御覽——お前さんには外にとるべき道はないぢやないか。お前さんの姉さん——あれは獸だ。あれの亭主だつて——どつこも褒めるところのない人間だ。何と言つて好いか分からない程劣等な奴だ……それから、ここ全體の生活……どこにお前さんの逃げる道があるんだ……だが、ワシカは……立派な男だ。

ナタアシヤ。逃げる道のないことは……あたしだつて知つてゐるわ……自分でも、もう疾うから考へてゐたんだもの……でも、あたし……誰も信用しないわ、……逃げる道はないわ。

ペベル。たつた一つあるんだ……おらあおめえにそれより外の道を取らせたくねえんだ……その位なら、おれはおめえを殺してしまはあ。

ナタアシヤ。(笑つて) ちよいと……あたしはまだお前さんのお上さんぢやないんだよ、それだのに、もう殺すのなんのつて。

ペベル。(女を抱きて)「うん」と言ひな、ナタアシヤ。ぢきうまい工合になるんだ。

ナタアシヤ。(しつかと男に縋りつく) ぢやあ……たつた一つ言つとくことがあるわ……一度でもあたしをぶつたり……あたしを馬鹿にしたら……もうおしまひだよ……あたしや首を縊つてしまふか、でなきやあ。

ペベル。ちよいとでも、おめえに觸つて見ねえ、この手は腐つてしまはあ。

巡禮。大丈夫だよ、娘さん、この男の言ふことは本當なんだよ。お前さんにとつてこの男がなくちやならない人だといふより、この男にとつて、お前さんはなくちやならない人なんだ。

主婦。(窓より) さあ、それで約束が出来た。神様、あの二人ふたりに和合と愛とを授けて下さいまし。

ナタアシヤ。あら、もう歸つて来てゐたの……まあ、お前さんは見てゐたの……ああ、ワシカ。

ペベル。何もびくつくことはねえ。もうおめえに指一つささしやしねえから。

主婦。安心しないで、ナタアシヤ。その人は決してぶつたりなんかしやしないから……ぶちもしなきや可愛がりもしないから……あたしや知つてるよ。

巡禮。(小聲に) ああ、何といふ女だらう……まるで毒蛇だ。

主婦。その人は口先ばかり達者なんだよ。

亭主。(入り来る) ナタアシヤ。こんなところで何をしてるんだ、怠け者め。又おしやべりか。大方、

身内の悪口でもきいてやがつたんだらう。サマワルはほつたらかしてよ、テエブルは散らかしつばなしだよ。

ナタアシヤ。(角の方へ行きながら) お前さん達はお寺へ廻つたぢやないの。

亭主。おれ達がどこへ行かうと、てめえの世話にやらねえ。てめえは自分の役目をしてりや好いんだ……言ひつけられたことをしてりや好いんだ。

ペベル。黙れ。この女はもうてめえんとこの女中ぢやねえ……ナタアシヤ、動くな……指一本だつて

動かすんぢやねえぞ。

ナタアシヤ。そんな口をお利きでないよ……まだそんな口を利くのは早いわ。(退場)

ペベル。(亭主に) もう澤山だ。てめえ達はもう散々あの可哀さうな娘をいぢめ抜きやがつたんだ。

あいつはもうおれのものだ。

亭主。てめえのものだと。いつ買ったんだ。いくら拂つた。

主婦、聲高に笑ふ。

巡禮。ワシヤ。あつちへ行けよ。

ペベル。てめえおれの言ふことを冗談にするな。泣かねえ用心をしろ。

主婦。なんだつて。おろ恐い。(笑ふ)

巡禮。あつちへ行けよ、ワシカ。あいつはお前をけしか嗾けてるんだ……突つついてるんだ——分からないのかい。ええ。

ペベル。あはあ……さうか。(主婦に) 大丈夫だ。てめえの思ふやうにやらねえんだから。

主婦。だが又、あたしの思はないやうにもならないのさ。

ペベル。(拳にて女を嚇す) 見ろ。(退場)

主婦。(窓より姿を隠しながら) 今に立派な婚禮をさせてあげるよ。

亭主。(巡禮の方へ進む) よう、何をしてるな。

巡禮。なんにもしちやゐない。

亭主。ふむ……おめえもう出かけるさうだな。

巡禮。愈出かけるよ。

亭主。どこへね。

巡禮。眼の向いた方へ。

亭主。また方々ろつつかのか……おめえは餘つ程尻の落ちつかねえ男と見える。

巡禮。石動かざれば水流れずといふ諺があるて。

亭主。石ならさうかも知れねえ。だが、人間といふものは、一つ所にぢつとしてゐるものだ。人間と

いふものは、臺所の油蟲のやうに、さうやたらに歩き廻れるもんぢやねえ……今ここにゐるかと思

ふと。直ぐあつちへ行つてしまふといふ風にな……人間といふものは家と名のつけられる場所を持

つてなくちやならねえもんだ……さう當てもなしに地面の上を匍ひ廻れるもんぢやねえ。

巡禮。ぢやあ、若し——どこへ行つても落ちつく人間があるとしたら。

亭主。さうすりや、そいつは浮浪人だ……ろくでなしだ……人間といふものは、何かの役に立たなく

ちやならねえ……働かなくちやならねえ。

巡禮。なんだつて。

亭主。さうとも。でなくて、どうするものか……おめえは自分で、旅の者だ、巡禮だとよく言ふが……

……巡禮たあ抑も何だ。巡禮たあ、自分獨特の道を歩く人間だ——人とは違つたところのある人間だ……即ち——若し本當の巡禮なら……別に人の爲にならねえことを何か知つたとしても……よしそれが眞實であつても……眞實といふ奴は一向人の爲にならねえものだから……その眞實を自分で藏つといて——黙つてゐてくれる筈だ、ほんとの巡禮なら——きつと黙つてゐる。でなけりや、誰にも分からねえやうに話す……さういふ巡禮は慾といふものを持つてゐねえ。人のことに決して首を突つ込まねえ。人に氣を揉ませるやうなこともしねえ……人がどんな生活をしてゐようと——そんなことはちつとも構はねえんだ……さういふ巡禮は少しもやましくねえ、眞つ直な生活をする……一人も人のゐないやうな森や荒野を探して歩く。誰の邪魔もしねえ、誰を呪ひもしねえ……そして、みんなの爲に祈る……この世のあらゆる罪人の爲に祈る……おれの爲にも、おめえの爲にも……あらゆる人の爲によ。つまり人生の空虚を祈禱に逃げるんだな。さうだ。(稍長き間) そこで、おめえは……どういふ巡禮なんだ……おめえは旅行券を持つてゐねえ……普通の人間なら、旅行券を持つてゐなくちやならねえ……まともな人民なら旅行券を持つてゐらあ……ほんとによ。

巡禮。人民といふものもあれば——人間といふものもある。

亭主。冗談は廢しにしてくれ。謎なんか掛けるない……おれはおめえの太鼓持ちやねえ……なんのこ

つた、おめえの言ふ——人民だの人間だのといふなあ。

巡禮。何が謎なもんか。わしはかう言ふんだ——種を蒔く値打のねえ、石ばかりの畠もあれば……又

よく肥えた鳥もある……肥えた鳥には何を蒔いても——きつとよく實るんだ……さうなんだ。

亭主。ふうむ。それがどうしたんだ。

巡禮。例へばお前だ……たとへ神様御自身がお前に、ミハイロ、人間になれ、とおつしやつたところで……それはなんにもならない、それは、何の役にも立たない……お前さんは、いつまで立つても今の儘で、けつして變りつこはない。

亭主。言つたな……おめえはおれの嬢の伯父さんが、警察へ出てゐることを知つてるか。若し、おれが。

主婦。(入り来る) ミハイロ・イワニツチ、お茶を飲みにおいでよ。

亭主。(巡禮に) やい——うしやあがれ。おれの内を出て行け。

主婦。さうだ、背囊をしよやがれ。おちい……一體お前の舌は長過ぎるよ……大方逃亡でもして来た懲役人なんだらう……何だか分かつたものぢやありあしない。

亭主。けふにもここから消えうせる。でなけりや……見ろ。

巡禮。でなけりや、伯父を呼ぶだらう。呼ぶが好い。言ふがいい。伯父さん、あすこに懲役人がゐるから、お捕へつてね。すると伯父さんが褒美にありつかあ……大枚三錢といふ。

帽子屋。(低き方の窓より) どんな爲事があるんだ。なんだい——三錢といふなあ。

巡禮。おれを賣らうと言ふのよ。

主婦。(亭主に) さあ、もう行かうよ。

帽子屋。三錢でか。氣をつけろよ、ぢいさん……悪くすると一錢で賣られるぜ。

亭主。(帽子屋に) 釜の下の悪魔の様に……何をそんなところから覗いてるやがるんだ。(主婦と共に出て行きさうにする)

主婦。世の中にはまあ、どの位ごろつきだの、嘘つきだのがゐるんだらう。

巡禮。宜しう召し上げれ。

主婦。(巡禮の方を振り向きて) 黙つてろ……毒草め。(亭主と共に、角をまがりて退場)

巡禮。今晚——わしは立つ。

帽子屋。それが好い。人間はうまい時に出かけるのが一番だ。

巡禮。ほんとうにさうだね。

帽子屋。おれは経験があつて言ふんだ。おれも一度うまい時に逃げ出したことがある。お蔭で牢屋へはひらないで済んだ。

巡禮。なんだつて。

帽子屋。本當だよ。全體かういふ譯だ。おれの嬢が内の職人と乳くりやがつたんだ……そいつが又、職人の中でも、中々腕のある野郎でね……犬の皮から綺麗な白熊の皮をこしらへるんだ……猫の皮を染めて、カンガルウの皮にするんだ……麝香鼠にするんだ……何にでもお好み次第なものにする

んだ。中々器用な奴だったよ。そいつと、おれの鼻がくつきやあがつたんだ……あんまりな夢中になりやうだつたから、若しやおれに毒でも食はせやしめえか、それともどうかしておれを無い者にしやあしめえかと思つて、一刻も氣の安まる時はなかつたよ。おれは、幾度も鼻をなぐつた……するとその職人の野郎が又おれをなぐるんだ……随分ひどい撲りやうをしやあがつた。或時なんかは、おれの鬚を半分から捲り取りやあがつた、そして肋骨を一本折りやあがつた。なぐり返されて見ると、おれもおとなしくしちやゐられねえ……鐵の尺度で鼻の頭をがんと一つ食はしてやつた……まあ、始終夫婦で戦争をしてゐたんだね。たうとうおれは考へた。これぢやあとも駄目だ……おれの方が負けるばかりだ、とね。そこで、おれは鼻を遣つつける謀をめぐらした……それともうすつかり決心をつけた。ところが、うまい時に不圖おれは自分に歸つた——そして、逃げ出した。巡禮。その方がよかつた。二人の奴にやあ、相變らず、犬から白熊をこしらへさせて置くさ。

帽子屋。つまらねえことには、工場が鼻の名義になつてゐたんだ……おらあ着のみ着の儘さ。尤も正直を言や、よし工場を持つてゐたところで、いづれ飲み潰してしまつたに相違ねえんだ……おれは素的な飲み助だからな。

巡禮。素敵な飲み助だつて。

帽子屋。さうよ、素的な飲み助だ。おれが本式に飲み出したら、すつ裸になるまで、何でもかでも飲んでしまふんだ……そして、それから怠け出すんだ……おらあ働く程恐ろしいことはねえ。

サチンと役者、争ひながら登場。

サチン。馬鹿な。どこへ行けるものか……馬鹿々々しいことばかり言つてやがる。おい、ぢぢい——おめえこの泣蟲にどんな火をつけたんだ。

役者。馬鹿言へ。ぢいさん。そいつで遣つてくれ、馬鹿言ふなつて。おれは本當に行くんだ。おれはけふ働いたぞ、道路掃除をしたんだ……しかも、ウオツカを一杯も飲まねえ。どうだい。見ろ——十五銭が二つよ。それで、おれは白面なんだ。

サチン。悪い量見だ。それをこつちへ寄越せ、おれが飲んでやる……でなきや、骨牌へ賭けてやる。役者。よせよ。これは旅費だ。

巡禮。(サチンに)おい、お前は——なんだつて折角決心してるものを、ひつくり返さうとするんだ。サチン。「語れ、巫女、神のいと子、わが前途いかなるべき」おれは一文なした、兄弟——みんな負けちまつた。だが、世の中にはまだ望があるぜ、ぢいさん……世の中にはまだおれより上手なずるがあるぜ。

巡禮。お前さんは面白い男だ。コンスタンチン……可愛い男だ。

帽子屋。おい、役者——まあ、ここへ來い。

役者、窓に近寄り、その前に蹲まりて、靜に帽子屋と語る。

サチン。おれも若い時分には——陽氣な人間だつた。思ひ出すと愉快だね……その時分は、おれも人

間の魂を持つてゐた……踊もうまかつたし、芝居もやつた、おれは交際社會で有名な男だつた……
素晴らしいもんだつた。

巡禮。それがどうしてそんなに落ちぶれたんだ。え。

サチン。おいさん、おめえは好奇心が強いな。なんでも聞きたがるぢやねえか……そんなことを聞いて、どうするんだい。

巡禮。人間の運命といふものが知りたいのさ……どうも分からない……お前さんのやうに度胸の好い……お前さんのやうな利口な人間が……急に。

サチン。監獄よ。四年と七ヶ月の年期を済まして、出獄人として出て來た時には……もうおれの行く道は塞がってしまったてゐた。

巡禮。おや、おや。一體まあどうして、監獄などへ入れられたんだ。

サチン。ある悪黨のお蔭よ……かつとしたことがあつて、おれがそいつを殺したんだ……骨牌の極意は監獄で覺えたのよ。

巡禮。どうして又殺したりなんぞしたんだ。女の爲かい。

サチン。おれの妹のことだよ……だが、もう勘辨してくれ——さう聞かれると、苦しくてたまらねえから……もう……昔の話よ……おれの妹も、もう死んでしまった……死んでからもう九年にもなる……素晴らしい女だつたよ、おれの妹は。

巡禮。まだまだお前さんなどは好い方だよ。世間にはもつともつと苦しいのがある……例へば、さつきここでどなつてゐた錠前屋だ。

サチン。クレシチかい。

巡禮。さうだ。爲事しごとがないつて、どなつてたんだ……まるでないつて。

サチン。もうぢき爲事のねえのにも馴れて來るだらうよ……おいらだつて爲事はねえんだ。

巡禮。(小聲に) 御覽。やつて來た。

錠前屋、首を垂れて、のろのろと入り來る。

サチン。よう、男やもめ。何だつてさう首を垂れてるんだ。何を考へ込んでるんだ。

錠前屋。頭が割れさうなんだ……これからどうしたら好いんだらうと思つてよ。道具は飛んでしまつたし……何もかもみんな葬式に食はれてしまつた。

サチン。おれが好いことを教へてやらう。なんにもするな。地球のお荷物になつてやれ——わけのねえこつた。

錠前屋。成程そいつは好い量見だ……だが、おれは——まだ世間が恥づかしい。

サチン。よせ。てめえが犬より劣つた暮しをしたところで、なんで世間が恥ぢるもんか。まあ考へて見ろ……てめえが働かねえ、おれが働かねえ……まだ何百人も何千人も働かねえ奴があるとしろ……終つひにはあらゆる人間が——分かつたかい——あらゆる人間が爲事しごとをうつちやつてしまつて、もう

誰もなんにもしなくなつたとして見ろ——さうしたら、まあどうなると思ふい。

錠前屋。みんな餓ゑて死ぬだらう。

巡禮。(サチンに) さういふ宗派があるね。「隱遁宗」といつてな……あの連中は、丁度お前さんの言つたやうなことを言つてる。

サチン。おれも知つてらあ……だがあの連中は馬鹿ぢやねえぜ。

コスチリヨフの窓より、ナタアシヤの叫ぶ聲聞こゆ「何をするのよ。およしつたら……何をあたしがしたつてば」

巡禮。(不安に) 誰だな、泣いてるのは。ナタアシヤぢやないか。さうだ。

コスチリヨフの住居より、高き物音、器具の壊れる響など聞こゆ。その合間に、亭主コスチリヨフの叫ぶ聲。「ええいつ……猫め……ばいため」

主婦。(舞臺のうしろにて) ちよいと……まあ、お待ちよ……こいつはあたしが……かう……かう。

ナタアシヤ。助けて。人殺し。

サチン。(窓の内へ向つて叫ぶ) おうい。どうしたんだ。

巡禮。(心配してあちらこちらと馳せ廻る) ワシカを……呼んで来なくちや……ワシカを……ああ……どうしよう、皆さん。

役者。(急ぎ去る) おれが連れて来る……おれが連れて来る。

帽子屋。この頃はやたらにあの子をいぢめるやうだ。

サチン。おいで、おいさん……行つて證人になつてやらう。

巡禮。(サチンのうしろに附きて退場) 證人なんぞにならなかつて好い。わしはもう證人になり過ぎてゐるんだ。ワシカさへ来てくれれば……ああ、困つたものだ。

ナタアシヤ。(舞臺のうしろにて) ねえさん……ワア……ワ……ア。

帽子屋。そら、口を塞がれた……おれも行つて見て来よう。

コスチリヨフの住居の物音、少し弱くなる。亭主は明かに部屋を出でて、玄關の方へ行きたり。

「待て」と呼ぶ亭主の聲。戸の閉ぢる音。それにより物音は斧にて切りたるやうに、ぼつたり聞こえずなる。舞臺靜寂。薄暮迫り来る。

錠前屋。(材木を重ねたるに、知らず顔して坐し、烈しく手を擦りゐる。やがて何か獨語を言ひ始む。

初めは聞こえず、段々聲高になる) ぢや、どうすりや好いんだ……生きてゐなくちやならねえ。

(高く) せめて宿だけでも……だが駄目だ、それも駄目だ……ほんの横になるだけの場所もねえんだ……からだ一つの外には、なんにもねえんだ……もうどこにも頼るところはねえ——まるで捨てられてしまつた。

頸垂れて、のろのろと出て行く。二三分間、不安なる靜寂。やがて路次の方に、錯綜せる物音、混沌たる人聲起る。人聲はやうやう高く、やうやう近くなる。間もなく一人一人の聲聞こゆ。

主婦。(舞臺のうしろにて) あたしは姉だよ。うつちやつといておくれよ。

亭主。(舞臺のうしろにて) おめえが口を出すところぢやねえよ。

主婦。(舞臺のうしろにて) 懲役人め。

サチン。(舞臺のうしろにて) ワシカを連れて来い……早く……ゾオブ、なぐれ。

巡査の呼子鳴る。

韃靼人。(舞臺へ突進し来る。右手は繻帶したり) 何といふことだ——眞つ晝間人殺しをやるたあ。

人足ゾオブ、急ぎ出づ。うしろに巡査。

人足。うんとなぐつて来てやつた。

巡査。なぜお前はあの男をなぐつたんだ。

韃靼人。ぢやあ——お前さんは自分の職務を知つてるかい。

巡査。(人足のあとを追ひて退場) 待て。おれの呼子を返せ。

亭主。(舞臺へ突進し来る) アブラム。そいつを縛つて呉れ……しつかり捕まへて呉れ。そいつはお

れを酷い目にあはしやがつたんだ。

角のうしろより、饅頭賣の女とナスチャ現る。二人はナタアシヤを抱くやうにして連れて来る。

ナタアシヤは悉く衣服を引き裂かれ、泥まみれになりをる、うしろより主婦、手を振り上げて妹を打たむとす。サチン、後ずさりして、主婦に突き當る。靴屋、その廻りを狐つきのやうに跳ね

廻り、ワシリイサの耳へ口笛を吹き、どなり且吠える。なほ三四の襪襦を着たる男女現る。

サチン。(主婦に) どこへ行くんだ、罰あたりめ。

主婦。どきやあがれ、懲役人。あたしや殺されたつて構やしない——あいつをずたずたにしてやるんだ。

饅頭賣。(ナタアシヤを脇の方へ連れて行く) まあ。およしつたら、カルボウナ……外聞が悪いぢや

ないか。どうしてそんな無茶なことが出来るんだらう。

巡査。(又入り来り、サチンの襟を掴む) さあ、つかまへたぞ。

サチン。ゾオブ。なぐれ……ワシカ……ワシカ。

皆々重なりあひて、赤き壁の側なる路次口に集まる。ナタアシヤは上手へ連れ行かれ、積み重ねし材木の上へ置かる。

ペベル。(路次口より飛び出し、黙つて群衆を押しよける) ナタアシヤはどこだ。ナタアシヤは。

亭主。(角のうしろに隠れる) アブラム。ワシカを縛れ……みんなも手傳へ。泥坊……強盗。

ペベル。やい古狸。(力を籠めて、亭主を打つ。亭主、角のうしろより上半身のみが見えるやうに、

倒れる。ペベル急いでナタアシヤの方へ行く)

主婦。ワシカを撲つておくれよ。みんな……泥坊をなぐつておくれよ。

巡査。(サチンに) お前が口を出すべき場合ぢやない……これは内輪のことだ。あの人達は親類同志

「なんだ……お前はなんだ。」

ペペル。(ナタアシヤに) どうしたんだ。突きでもしたか。

饅頭賣。まあ、なんといふけだもの獣だらう。煮えくり返つたお湯を足の上へ浴あびせかけたんだよ。

ナスチャ。サマワルを引つくり返したんだよ。
韃靼人。そりや粗相そさうでしたことも知れねえ……はつきり分かりもしねえことを、うつかりしやべるものぢやねえ。

ナタアシヤ。(半、無意識に) ワシカ……どこかへ連れて行つて……隠しておくれよ。

主婦。みんな御覽よ。ここへ来て。死んぢまつたぢやないか……たうとう叩たたつ殺してしまやあがつた。

皆々、路次口に倒れたるコスチリヨフの廻りに集まる。帽子屋、群集より離れて、ペペルの方へ歩み寄る。

帽子屋。(小聲に) ワシカ。親爺おやぢはもう……駄目だぜ。

ペペル。(その詞が飲みこめぬらしく、帽子屋の顔をぢつと見る) 馬車を雇つて来い……ナタアシヤを病院へ入れるんだ……なあに、かかりはおれが持つ。

帽子屋。おれの言つてることをよく聞けよ。親爺が誰かに殺されてしまつたんだ。

舞臺上の物音は、火に水をかけたるやうに、はたと止む。低き聲、切れ切れに聞こゆ「ほんた

うかい」「そら見ろ」「なるほど」「兄弟、逃げた方が好いぜ」「べらぼうめ」「しつかりしろ」「巡查の来ねえ内に逃げろ」群衆少くなる。帽子屋、韃靼人、遠くのナスチャと饅頭賣の女、亭主の死骸に駆け寄る。

主婦。(立ち上がり、勝ち誇りたる調子にて、聲高に呼ぶ) たうとうあたしの亭主を殺してしまつた。誰が殺したんだ。そこにゐるそいつだ。ワシカが殺したんだ。あたしはちやんと見てゐました。皆さん。あたしはちやんと見てゐたんですよ。さうだらう。ワシカ。警察へそいつて来て遣るから。

ペペル。(ナタアシヤを離れる) おれに見せろ……どけ。(死骸を凝視す。主婦に) どうだ。これでおめえも嬉しいだらう。(死骸を蹴る) たうとうほんとにくたばつてしまやあがつた……老ぼれ犬め。さあ。これでおめえの望のぞみも叶つたといふもんだ……序ついでにてめえの首根くびねつこも……ひねり上げて呉れよりか。(主婦の方へ突き進む。サチンとゾオプ、素早くペペルを捕まへる。主婦、路次の中へ隠れる)

サチン。まあ氣を落ちつけろよ。

人足。ぶるるる。一體まあ、どこへ飛びつくつもりなんだ。

主婦。(再び現る) さあ、ワシカ、お友達。運の盡きだよ。警察は逃げられないよ。アブラム……呼子をお吹き。

巡査。ところが呼子は取られてしまった。忌々しい。

靴屋。そら、ここにあらあ。(呼子を吹く。巡査、あとを追ひかける)

サチン。(ペベルをナタアシヤの方へ連れ戻る) 心配するな、ワシカ。喧嘩をして人を殺す……小さ
なこつた。何でもねえこつた。

主婦。あいつをしつかり捕まへておくれよ。ワシカは親爺を殺したんだ……あたしはちやんと見てゐ
たんだ。

サチン。おれだつて少しや撲つてやつた……あんな老ぼれが死んだつて、誰が困るもんか。おれを證
人に呼び出せよ、ワシカ。

ペベル。なあに……おれは少しも自分を辯解する必要はねえ……だが、ワシリイサだ……あいつはき
つと拖き込んでやるから。あいつは亭主の殺されるのを待つてゐたんだ……亭主を殺せつて焚きつ
けたんだ……さうだ、あいつは教唆人だ。

ナタアシヤ。(俄に叫ぶ) ああ……それで分かつた……さうなんだね。ワシカ。まあ、みんな、聞い
ておくれ。みんな手筈がきめてあつたんだ……あの人と姉さんと……二人して考へ出したことなん
だ、もくろんだことなんだ。ねえ、ワシカ。それで、お前さん、さつきあたしにあんなことを言つ
たんだね……わざと姉さんに聞こえるやうなところで。みんな、姉さんはあの人の色女なんだよ……
……知つてるだらう……誰だつて知つてる……二人は同じ腹なんだ。姉さんが……姉さんが人殺しを

勧めたんだ。亭主が邪魔になるんだ……あたしも邪魔になるんだ……それで、あたしをあんなにい
ぢめたんだ。

ペベル。ナタアシヤ。何を言つてるんだ。何を言つてるんだ。

サチン。馬鹿馬鹿しい。

主婦。嘘だ。みんな嘘だ……あたしはなんにも知りやしない……ワシカが殺したんだ……あいつがひ
とりで殺したんだ。

ナタアシヤ。いいえ、二人がしめし合はしたこつた。呪はれるが好い……二人とも。

サチン。さあ、むづかしくなつて来た……しつかりしろよ、ワシカ。でないと、酷い目にあふぞ。

人足。分からねえな……まるで話だ。

ペベル。ナタアシヤ。おめえは……眞面目に言つてるのかい。本當におめえは、おれが……あいつ
と。

サチン。おい、ナタアシヤ……氣を落ちつけなよ。

主婦。(姿見えず、路次の内にて) あたしの亭主を殺したんでございます……お役人様……ワシカ。

ペベルといふ泥坊が……撲り殺したんでございます、警部さん。あたしはちやんと見てゐました。

みんなちやんと見てゐました。

ナタアシヤ。(なかば無意識に、轉輾す) 皆さん……あたしの姉さんとワシカが……二人して殺した

んです。お廻りさん……どうぞ聞いて下さい……そこにあるあたしの姉さんねえがあの人を咬くはかしたんです……自分の色男なんです……それを焚きつけたんです……そら、その呪はれた男はそこにいます——みんな二人でしたことです。早くお捕つかまへなさい……裁判所へお連れなさい……あたしも一緒に捕まへて下さい。あたしも一緒に牢屋へ入れて下さい。あたしも一緒に……牢屋へ。

第四幕

第一幕の舞臺面。ベベルの部屋は最早見られず、中じきりも取りのけらる。錠前屋の坐りゐたる所に鐵砧かねてこもなし。ベベルの部屋にありたる隅には、寢床あり。韃鞣人これに臥しをり、絶えず寢返りをしつつ、苦しげに唸る。錠前屋は、大机の側に坐し、手風琴の繕つくろひをなしつつ、時々調音を試みる。机の他の端はしには、サチン、男爵、ナスチャ坐す。その前にはウオツカ一本、ビール三本、黒パンの大なる塊、暖爐の上には役者、あちこちと絶えず身を動かして、咳す。夜。舞臺は机の中央に置かれたるランプにて照らさる。戸外には風吹ゆ。

錠前屋。さうだ……あの喧嘩の最中になくなつたんだ。

男爵。お廻りが来たんで逃げたんだ……煙のやうに消えてしまつたんだな。

サチン。罪人つみびとが正義の前に立つと、大抵さういふ風に逃げ出すものだ。

ナスチャ。でも、好いおぢいさんだつたわ。お前さん達なんかは……人間ぢやないわ……バチルスだわ。

男爵。(飲む) レヂイ、健康を祝す。

サチン。ほんとに面白いぢいさ。うちのナステナカはをか惚れしてゐたな。

ナスチャ。さうとも……あたしやおぢいさんに惚れてゐたよ。どんなことにでも眼めが利いてゐて……

なんでも分かるんだもの。

サチン。(笑ひつつ) そこで、まあ大抵の人にとつては……齒のない人に柔いお粥といふ所だつた。

男爵。(笑ひつつ) それとも、瘡に膏藥といふところかな。

錠前屋。なかなか思ひ遣りのあるぢいさんだつた……おめえ達は……思ひ遣りがねえ。

サチン。思ひ遣りを見せると、それがおめえの役に立つかい。

錠前屋。思ひ遣りには及ばねえが……せめておれを……いぢめねえでくれ。

韃鞣人。(寢床の上に起き上がり、病める手を前後に揺り動かす、赤子を守るやうに) あのぢいさ

んは好い人間だつた……腹ん中に、ちやんと掟があつた。腹ん中に掟のある人間は——きつと好い

人間だ。腹ん中に掟を持つてねえやうな者は——もう駄目だ。

男爵。どういふ掟だい、殿下。

韃鞣人。まあ……掟はやつぱり……掟だあな……それはその……分かつてるぢやねえか。

男爵。それから。

韃靼人。人をいぢめるな——と、かういへば、もう掟だ。

サチン。「露西亞ではかうよ「處罰懲戒例」

男爵。外ほかに附則として「示談裁判處罰條例」

韃靼人。コオランの中にはかう書いてあらあ……コオランは掟たるべし……魂はコオランたるべしつて。

錠前屋。(手風琴をためす) 獸けだものめ、まだしゆうしゆう言つてやがる……殿下の言ふのは本當だ……人

間は掟に従つて生きて行かなきゃならねえ……福音書に従つてな。

サチン。ぢやあ、さうなさいまし。

男爵。まあ、やつて御覽なさいまし。

韃靼人。モハメットが、おれ達にコオランをくれて言ふには、それ、そこにお前達の掟がある。その中に書いてあることをしろ。やがて——コオランも役に立たなくなる時が来る……そのやうな時は、又新しい掟が出来る……あらゆる時代は、それぞれの時代の掟を持つてをる。

サチン。御尤もだ……おれ達の時代には處罰例がある。なかなか持ちのよささうな掟だ……容易に役に立たなくなりさうもねえ。

ナスチャ。(コップにて机を叩く) 一體なぜあたしは……こんなところで、お前さん達なんかと一緒に

に生きてゐるんだらう。あたしはここを出て行くから……きつと、どこかへ行つてしまふから……世界の果はてへでもどこへでも。

男爵。靴も穿かずにかい、レヂイ。

ナスチャ。はだしでも構はないよ。四つん匍はひになつても好いよ。

男爵。そいつは好い圖だ、レヂイ……四つん匍はひたあ。

ナスチャ。きつとやるよ、やるともさ、お前さんの間抜けづら面を見ないでも濟むやうになるなら……ああ、なんだつてかう何もかも厭になつたんだらう。もう生きてるのも厭になつた……人間がみんな厭になつた。

サチン。出かけるんなら——役者も一緒に連れて行つて貰ひたいな……あいつはいつでも出かけるよ

……奴やつこさん、かういふことを知つたんだ。世界の果から丁度半道はんみちさき先にオルガアノンの病院があると

いふことをね。

役者。(暖爐の端より頭を突き出し) オルガアニイズムだい、馬鹿。

サチン。アルコホル中毒にかかつてるオルガアノンのね。

役者。さうだ。奴は直ぐ立つよ。もう直ぐ立つよ……きつと立たあ。

男爵。その「奴」といふのは誰だ、閣下。

役者。おれさ。

男爵。メルシ、わが親愛なる女神の僕よ……ええ、なんとか言つたな、芝居の女神は、悲劇の女神は……何とか言つたな。

役者。ミュウズよ、馬鹿野郎。女神ぢやねえ、ミュウズだ。

サチン。ラヘシス……ヘラ……アフロヂイテ……アトロポス……そんなものの區別が分かるものか。ぢやあ、なんだね……わが親愛なるミュウズの子は、^{いよいよ}愈ここを出て行くんだね……ぢぢいが耳の中へ蚤を入れやがつたんだ。

男爵。あのぢぢいは馬鹿だ。

役者。ぢやあ、おめえ達は野蠻人だ。無學文盲だ。メルボメネエだ。ぐうたら野郎。今に見ろ——奴はきつと出て行かあ「哀れの友よ、飲めよかし」といふのが……ベランジエルの歌にあらあ……ほんどだ……奴はきつとそこを見つけ出さあ……そのなんにもねえところをよ……まるでなんにもねえところをよ。

男爵。まるでなんにもねえところをか、閣下。

役者。さうよ。まるでなんにもねえところだ「この塚穴こそ……予が墳墓……麻呂も死ぬのぢや、^{しば}むのぢや、力を失ふのぢや」だが、おめえ達は……なぜ生きてゐるんだ。なぜ。

男爵。おい、おい——キインだか天才だか熱情だか知らねえが、さう吠えるなよ。

役者。黙れ……おれは吠える、ああ吠えるよ。

ナスチャ。(机より頭を擡げ、手を高く振り廻す) いつまでもどなつてお遣り。構ふもんか。

男爵。どういふ譯だ。レヂイ。

サチン。しやべらせて置けよ、男爵。べらぼうな奴等だ……どなるが好い……頭を叩きつけるが好い……いくらでも遣るが好い。何をやつても意味はあらあ。たゞ人の邪魔をするな、ぢぢいの言つたやうによ……ぢぢいめ、みんなの心を引つくり返しやあがつた。

錠前屋。みんなをどつかへ……おびき出さうとしやがつたんだ……その癖自分は行先を知らねえんだ。

男爵。あのぢぢいは山師だ。

ナスチャ。嘘だ。山師はお前さんだ。

男爵。お黙り、レヂイ。

錠前屋。あのぢぢいは眞實の友ぢやなかつた——一生懸命に眞實に反對してゐた……そこがぢぢいの正しいところだ……なんにも食ふ物がないう時、眞實がなんの足しになる。そら、殿下を見るが好い。(韃靼人を指す) 爲事をしてゐて手を挫いた……^{いよいよ}愈切らなきやならねえつて話だ……これが眞實だ。

サチン。(拳にて机を打つ) 靜にしろ。馬鹿野郎ども。ぢいさんのことを悪く言ふない。(少し靜に) おい、男爵、てめえが一番馬鹿だぜ……なんにも知らねえ癖に——しよつちう何かしやべつてやが

る。ぢいさんが山師だと。眞實がどうしたと。眞實とは人間その者のことだ。ぢいさんはそれを心得てゐた……てめえ達はそれを知らねえ。煉瓦にも劣つた奴等だ。おれにはちやあんとぢいさんが分かつてゐる……そりやあ成程あいつは嘘を言つた……だが、それは思ひ遣りから出た嘘だ、分かりきつてらあな。思ひ遣りから嘘をつく人間は、世間に澤山あらあ……おれはさういふことを、澤山讀んで知つてゐる。その嘘が又、實に綺麗で、精神が籠つてゐて、驚くべきものなんだ。あんなに慰めになる、あんなに穏やかな嘘があるんだからなあ……ああいふ嘘だと、職人の手を挫いた残酷な奴を許すことも出来るし……腹の減つた奴を罪に落すことも出来るんだ……おれはさういふ嘘を知つてゐる。氣の弱い奴や……人の汗を吸つて生きてる奴には——嘘が入るんだ……嘘はさういふ奴に、勇氣をつけてくれる、マンテルを着せてくれる……だが、自分で自分の支配の出来る奴や……人の額の汗をあてにしねえで、獨立の出来る奴には……嘘は入らねえ。嘘は奴隷と君主の宗教だ……眞實は——自由な人間の神だ。

男爵。ひやひや。謹聽、謹聽、おれも全然同感だ。おめえはまともな人間のやうな口を利くな。

サチン。まともな人間が泥坊のやうな口を利く世の中だ——泥坊がまともな人間のやうな口を利いて悪い道理はねえ。さうよ……おれはもう大抵のことは忘れちまつた、だが、少しはまだ覚えてゐることがある。ぢいさんか。あいつは利口な奴だ。あいつは古い錢へ硫酸でもかけたやうに、おれに働きかけやあがつた……さあ、ぢいさんの健康を祝さう……ぢいさん、萬歳だ。一杯ついでく

れ。

ナスチャ、ビールを一杯つぎて、サチンに渡す。

サチン。(笑ひながら) ぢいさんは——内部から生きてゐる……どんなものを見るにも、自家獨特の眼で見る……おれは一度ぢいさんに聞いたことがあつた「ぢいさん、一體人間は何の爲に生きてゐるんだい」つてね。(ルカ老人の聲色、身振りを眞似て)「人間かい。ああ。人間は自分より豪いものを生む爲に生きてゐるのさ。例へばここに、大工が大勢ゐるとする——騒々しい、下等な奴等ばかりなんだ……ところが、その中から、突然大工が一人生れたとする……それが、今まで世界に一度も出たことのないやうな大工だ、どんな者にも優れた大工だ、誰も肩を列べる者のない大工だ。そいつが大工職に新生面を與へる……即ち、自己の生面を與へるんだ……そして、その一つの刺戟で、大工道が二十年の進歩をするんだ……他の人間だつて、みんなこれと同じさ……錠前屋でも、靴屋でもその外、職人といふ職人はみんなさうだ……百姓でも……又、君主でも……みんな自分より豪い者を生む爲に生きてゐるんだ……人間といふ奴は、てんでにみんな、自分自身の爲にこの世に生きてゐると思つてゐる。ところが實はみんな人の爲に……自分より豪い者の爲に生きてゐるんだ。百年でも……或は、もつと長くでも……人間は自分より豪い者を生む爲に生きてゐるんだ」

ナスチャ、ぢいつとサチンの顔を見る。錠前屋は手風琴の繕ひを止めて、同じく謹聽してゐる。男爵は首を垂れ、指にて机を叩きゐる。役者、暖爐の端より首を突き出し、そつと寢床の上に匍

ひおりようとする。

サチン。(續ける)「人間はみんな自分より豪い者を生む爲に生きてゐるんだ。だから、われわれは、どんな人間でも尊敬しなけりやならないんだ……その人間が、どういふ人間で、何をしに生れて、どういふことを爲でかすか、それは分からない……その人間の生れたことは、多分われわれの仕合せになるだらう……大なる利益になるんだらう……だから、特に子供は尊敬しなくちゃならない……小さな子供は、子供は束縛しちやいけない……自由に育てなくちゃいけない……尊敬しなくちゃいけない」(ひとり靜に笑ふ)

稍長き間。

男爵。(考ふるところありげに) 自分より豪い者を生む爲に……ふむ、成程……それで、おれは自分の家を思ひ出した……古い家だ……エカテリナ時代からの家だ……貴族だつた……武士だつた……佛蘭西から移住して来て……露西亞の朝廷に仕へたんだ……どんどん位が登つた……ニコライ一世の御代には、おれのぢぢいのギユスタアボ・ドキルが……高位に叙せられた……ぢぢいは金持だつた……何百人といふ農奴や……馬や……料理人をかかへて。

ナスチャ。嘘をおつきでない。みんな嘘なんだよ。

男爵。(飛び上がる) なんだと。さあ……も一遍言つて見る。

ナスチャ。みんな嘘だよ。

男爵。(どなる) モスクワに屋敷が一つあつたんだ。ペテルブルグにも屋敷が一つあつたんだ。馬車もあつたんだ……馬車の扉とびらに紋もついてゐたんだ。

錠前屋、手風琴を取りて立ち上がり、脇の方へどきて、そこよりこの場の光景を見てゐる。

ナスチャ。嘘だよ。

男爵。黙れ。何十人といふ家來がゐるんだぞ……やい。

ナスチャ。(尙からかひ顔に) みんな嘘だよ。

男爵。叩たたつ殺すぞ。

ナスチャ。(逃げ出しさうな姿勢をする) 馬車なんかありやしないんだよ。

サチン。もうよせ、ナステナカ、怒おこらしちやいけないえ。

男爵。待て……すべた。おれのぢぢいは。

ナスチャ。ぢぢいだつてありやしないんだ。なんにもありやしないんだ。

サチン笑ふ。

男爵。(憤怒に息を切らしながら、ぐたりと腰掛に腰をおろす) おい、サチン、あいつに言つて聞かせてくれ……あの地獄に……なんだ——おめえまで笑つてるのか。おめえまで……おれの言ふことをほんとしねえのか。(拳にて机を叩き、絶望的にどなる) 勝手にしやがれ……みんな今おれの言ふ通りだつたんだ。

ナスチャ。(勝ち誇りたる調子にて) あはは。そら、お前さんだつてどなるぢやないか。これで、人が自分の言ふことをほんとにしてくれなきや、どんな氣持がするもんだか分かつたらう。

錠前屋。(机の側に歸り來る) おりやきつと又揉り合ひだと思つた。
 轆轤人。馬鹿な奴等だ。子供ぢやあるめえし。

男爵。おれは……おれはさう馬鹿にして貰ふめえ。證據を持つてるんだ……立派な記録があるんだ。

サチン。そんなもなあ暖爐ん中へくべちまへ。そして、ぢいさんの馬車のことなんか忘れちまへ……昔話の馬車へ乗つたつて、どこへも行けやしねえよ。

男爵。だが、あの女に、よくもあんなことが言へたもんだ。

ナスチャ。お聞きよ。あたしによくもあんなことが言へたとさ。

サチン。さうさ。あの女はよくもあんなことを言つた。あの女はおめえより悪い人間かい。たとへあの女の過去に、馬車もなければ、ぢぢいもなく……親爺もなければ、お袋もなかつたとしたところ
 で。

男爵。(氣を鎮めて) 畜生め……おめえは何でもさういふ風に冷やかに判斷する。ところが、おれには……おれには堪へ情がねえ。

サチン。一つこしらへるさ。なかなか役に立つもんだよ。(稍長き間) おい、ナスチャー——お前は時
 時病院へ行くか。

ナスチャ。何しに。

サチン。ナタアシャのところへよ。

ナスチャ。今頃そんなことを聞くの。あの人はもう疾うに出てしまつたよ……出て、どつかへ行つてしまつたんだよ。どこにも姿が見えないのさ。

サチン。ぢやあ、跡形もなく消えてしまつたんだね。

錠前屋。おれは、ワシカがワシリイサを罪に落すか、それともワシリイサがワシカを罪に落すか、ど
 つちだらうと思つて、楽しみにしてる。

ナスチャ。ワシリイサかい。あの人は、きつと嘘をついて、うまく逃げるよ。なかなかずるい奴だからねえ。きつとワシカが懲役に行くやうなことになるよ。

サチン。喧嘩で人を殺したのは、禁錮だけで済むんだらう。

ナスチャ。いやだ。懲役にやつちまふ方が餘つ程好いわ。お前さん達はみんな懲役にやつちまふと好
 いんだ……五味のやうに掃き出しちまふと好いんだ……どつかの溝ん中へ。

サチン。(びつくりして) 何を言ふんだ。おめえ氣が違つたな。

男爵。はりこくるぞ……でしやばり女め。

ナスチャ。やるなら、やつて見る。ちよいとでも觸つて見る。

男爵。やらなくつて。

サチン。うつちやつとけ、手を出すな。あいつだつて人間だ。人間をいぢめるな……又ぢいさんを思ひ出して來やがる。(聲高に笑ふ) あいつだつて人間だ。人間をいぢめるな……若し一生涯起き上ることの出來ねえ程——おれをいぢめた奴があつたら——おれはどうするか、許すか。なあに、決して許さねえ。

男爵。(ナスチャに) 氣をつける、やい。おれはてめえ達と一緒になるやうな人間ぢやねえんだ。やい……地獄。

ナスチャ。ああ……可哀さうな奴だ。お前さんは……お前さんはあたしのお蔭で生きてるんぢやないか、林檎のお蔭で生きてる蛆蟲のやうに。

男達、會心の笑を洩らす。

錠前屋。馬鹿。おめえは綺麗な林檎だよ。

男爵。そんな……馬鹿女の爲に、腹を立ててたまるもんかい。

ナスチャ。おや、お前さんは笑ふね。それも嘘だらう。笑へるどこぢやないんだらう。

役者。(陰鬱に) なぐつちまへ。

ナスチャ。出来るなら……お前達を、みんな。(机より杯を一つとり、床の上に叩きつける) かう。

韃靼人。なんだつて道具を壊すんだ。阿房め。

男爵。(立ち上がる) よし、もうどうしても、うつちやつちやあ置かれねえ……懲りさしてやるから。

ナスチャ。(駈け出す) 勝手にしやあがれ。

サチン。(女のうしろよりどなる) よさねえか。そんなことをしたつて爲方がねえ。誰をいぢめようつてんだ

ナスチャ。狼め。好い加減にくたばりやがれ。(退場)

役者。(陰鬱に) アアメン。

韃靼人。ふう。まるで氣違ひだ——露西亞の女は。出しやばり過ぎらあ……我儘過ぎらあ。韃靼の女

は——あんなぢやあねえ。韃靼の女は掟を知つてらあ。

錠前屋。一度うんといふ目に合はしてやらなきやいけねえ。

男爵。いやしい奴だ。

錠前屋。(手風琴をためす) さあ出來た。だが、持主がまだ遣つて來ねえ……又酔つぱらつてゐやがるな。

サチン。さあ、まあ飲め。

錠前屋。(飲む) 有りがてえ。もう寝る時刻だな。

サチン。おめえもだんだんおれ達の仲間になつて來たな。

錠前屋。(飲み干して部屋の隅の寢床へ行く) さうなつて來ると……どこにだつて——人間はゐるんだ……初めはそれが分らねえ……だが、後あとになつて、よく見ると、どこにだつて人間はゐるんだ……

…そして、みんなさう悪い人間ぢやねえんだ。

韃靼人は何かを寢床の上に廣げ、跪いて祈る。

男爵。(韃靼人を指しながら、サチンに) 見ろよ。

サチン。うつちやつとけ…好い奴だ…邪魔をするなよ。(高く笑ふ) おれは今日どうしてかう優しいだらう…一體まあどうしたんだ。

男爵。飲んでる時は、いつでも優しいよ…そして物のわかりが早いや。

サチン。飲んでる時は…なんでも面白いんだ。ふむ——成程…奴は祈りをしてゐるな…感心なもんだ。人間には信心の出来る奴と出来ねえ奴とある…つまり、人によるんだ。人間は——自由だ…どんなことに對しても、自分から向いて行くんだ。信心でも、不信心でも、愛情でも、分別でも、人間は何にでも向くやうな値打を持つてる。だから人間は——自由なんだ。人間は——眞實だ。だが全體、人間たあ何だ。おめえでもねえ、おれでもねえ、あいつ等でもねえ。でなくて、おめえだの、おれだの、あいつ等だの、ルカぢぢいだの、ナポレオンだの、モハメットだの…みんなを一緒にしたのが人間だ。(空中に人間の形の輪廓を多かく) 分かつたかい。これだ——かういふ大きなものだ。總ての初めと總ての終りとが、この内に含まれてゐる…總てのものは人間の内にあるんだ。總てのものは人間の爲に在るんだ。世の中にほんとに存在するものは人間ばかりだ。その他物はみんな——人間の手がこしらへたものだ、人間の脳髓がこしらへたものだ。人間。素敵

なもんだ。實に高尚な音がするね。にい——ん——げん。人間は尊敬すべきものだ。憐れむべきものぢやない…同情などといふもので侮蔑すべきものぢやない…尊敬すべきものだ。男爵、人間の健康の爲に祝杯をあげよう。自分が人間だと思ふと——實に愉快だね。おれは…前科者だ、人殺しだ、詐欺賭博も遣る…おれが町を歩くと、大泥坊が通るとでも思ふのか、人がじろじろ見やあがる…避けて歩きやがる、うしろから見送りやあがる…さうしちやあ、よく碌でなしめ。法螺吹きめ。お前はなぜ働かないんだと言やあがる…働けつて。なんの爲に働くんだ。腹一ぱい食ふ爲にか。(高く笑ふ) おれは全體、腹一ぱい食はうとする奴が大嫌ひなんだ。そんなことしたつて何になる。なあ男爵。何にもなりやしねえ。一番大事なのは人間だ。人間は膨れた胃袋より遙に高尚なもんだ。(自分の場所より立ち上がる)

男爵。(首を振る) おめえはよくものを考へる男だ…悪くねえこつた…それで心が暖かになるんだ…おれにはとても出来ねえ。(そつとあたりを見廻し、低き聲にて言ひ續ける) 兄弟、おれは時々恐くなるんだ…分るかい。自分はこれからどうなるんだ、と思ふとひどくおれはしよげて來るんだ。

サチン。(部屋を行つたり來たりする) 馬鹿め。人間に恐いものはなんにもねえ。

男爵。考へて見ると…いつでもおれの頭の中には霧がかかつてゐたやうだ。おれの身の上になんかことが起つたか。おれはちつとも知らなかつた…おれの一生は、ただ着物を脱いだり着たりした

だけのやうな気がする……なぜだ。分からねえ。おれは學問もした……華族學校の制服も着た……だが何を習ったか、一つも覚えちやねえ。分からねえ……それから、おれは嫁を買った——燕尾服を着た、それから寢間着を着た……大變な女をしょひ込んだ——なぜだ。分からねえ……それから、有つただけの物をすっかり使つちまつた——そして、見すばらしい鼠色のジャケットを着て、狐色のずぼんを穿いた……だが、どうしてかうまで落ちぶれたんだ。ちつとも分からねえ。それからおれは役所へ勤めるやうになつた……制服だの、徽章の附いた帽子だのにありついた……官金を使ひ込んだ……懲役人のおしきせを着た——それから、そのまんまで、ここへ來たんだ……まるで夢だ……面白いだらう。

サチン。あんまり面白くもねえ……馬鹿馬鹿しいや。

男爵。さうさ……おれも馬鹿馬鹿しいと思ふんだ……だが、おれだつて何か目的があつて生れて來たんだらう……さうぢやねえか知ら。

サチン。(笑ふ) そりやさうだらう……人間は自分より豪い者を生む爲に生れるんだ。(頭を振る) さうだ……さうに違えねえ。

男爵。あの……ナスチャの奴め……たうとう逃げ出して行つちまやあがつた。どこへ隠れやがつたか見て來よう。やつぱり、あいつは。(退場) 稍長き間。

役者。おい、韃鞫。(稍長き間) 殿下。

韃鞫人、役者の方へ頭を向ける。

役者。おれの爲にも祈つて呉れ。

韃鞫人、何か用かい。

役者。(前よりも小さき聲にて) 祈つてくれ……おれの爲に。

韃鞫人。(短き沈黙の後) 自分で祈れよ。

役者。(急に暖爐より匍ひおりて、大机の上に登り、震へる手にウオツカを一杯つぎて飲み、走るばかりに急いで、玄關へ退場) おれはもう行く。

サチン。やい——やい、穢多。どこへ行くんだ。(口笛を吹く)

巡查メドエデフ、綿の入りたる女のジャケットを着込み、帽子屋と共に入り來る——兩人聊か上機嫌なり。帽子屋の片手には肉饅頭の包、片手には燻し魚、脇の下にウオツカ一本、上着の隠しにも一本。

巡查。駱駝は……言はば驢馬の一種さ。ただ耳がないだけだ。

帽子屋。もうよせよ。おめえも——驢馬の一種ぢやねえか。

巡查。駱駝には二つも耳がないんだ。鼻で聽くんだ。

帽子屋。(サチンに) よう、兄貴。おりやおめえを、酒場だの、穴だの、随分探して歩いたんだ。こ

の瓶を出して呉れ、兩方とも手が塞がつてゐるんだ。

サチン。饅頭を机の上に置き。さうすりや直ぐ、片つぽの手が明かあ。

帽子屋。成程。おめえはなかなか。(巡查に) 聞いたか、法律家。こいつは中々ずるい奴だぜ。

巡查。泥坊はみんな——ずるいや……おれは昔から知つてらあ。ずるくなけりやあ爲事のしやうがな

いんだ。普通の人間なら——馬鹿でも濟むが、拘摸の頭にや脳味噌が入るんだ。だが、兄弟、今の

駱駝の話だかな……お前の言ふのは間違つてるぜ……駱駝は人を乗せる動物だ……角がない……齒

もない。

帽子屋。連中はどこへ隠れつちまつたんだ。だあれもるやしねえ。おうい……出て来うい……けふは

おれが奢るぞ。誰だ、その隅つこに坐つてゐるなあ。

サチン。やい、案山子。もうすぐ使つてしまふのか。

帽子屋。分かりきつてらあ。これつばかりの元手がなんだ……ゾオブ。一體ゾオブはどこにゐるんだ。

錠前屋。(机に近寄つて来る) あいつはゐねえよ。

帽子屋。(う——う——るるる。ブルドック。ぶるりゆ。ぶるりゆ。七面鳥吠えるない。唸るない。

飲めえ、食へえ、頭をあげろい……みんな、勝手にやつてくれ。おれはそれが好きなんだ、兄弟。

おれが金持だつたらな……何でもただといふ酒場をつくる。さうだ。樂隊と唱歌隊を雇つて来る……

……いつでもやつて来い……飲めえ、食へえ、聞けえ……魂の洗濯をしろい。貧乏人だけやつて来い

……錢の入れねえ酒場へ。サチン。兄貴。おれの志だ……さあ、この元手の半分だけとつてくれ。

さあ、取つてくれ。

サチン。まあ、みんな出せよ。

帽子屋。みんなか。この元手をみんなか。やるとも……そら。一兩……もう一兩……二十錢……五錢

が二つ……二錢が二つ……これでおしまひだ。

サチン。上等だ……おれに預けときやあ、確かなものよ……こいつでおれの金を取り返して来る。

巡查。わしが證人だ……お前はあいつに金の保管を托した……幾らだつたな。

帽子屋。おめえか。おめえは——駱駝よ……證人なんか入るもんけえ。

靴屋。(跣足にて入り来る) おい。おれはこんな足濡らしちまつた。

帽子屋。さあ——序に喉を濡らせ……さうすりや丁度平均がとれらあ。おめえは可愛い奴だ……よく

唄ふ、よく弾く……ほんとにおめえは利口者だ、だが、飲むなよ……餘りたんと。飲むなあ毒だ、

兄弟……非常に毒だ。

靴屋。成程、おめえはさうだらう。おめえは一杯ひつかけなきや人間らしくならねえ男だ……クレシ

チ。手風琴は直つたか。(唄ひ且これに合せて踊る)

わしかこのよな可愛い男、

綺麗な男でないならば、

教父夫人もこのやりに、

可愛がつてはくれまいに。

すつかり凍えちまつた。おう寒い。

巡査。ふむ……そこで、ちよいと聞くが、一體その教父夫人とは誰のことだ。

帽子屋。おい——もうその癖はよせよ。もうなんにもおめえの聞くこたあねえんだ。おめえはもう巡査ぢやねえんだ——免職されたんだ。巡査でもなけりあ、伯父さんでもねえんだ。

靴屋。ただ——伯母さんの亭主だけだ。

帽子屋。おめえの姪は、一人は牢屋だ。一人は死にかけてゐる。

巡査。(胸を張りて) それは嘘だ。あの子は死にかけちやゐない、ただ行方不明なんだ。

サチン、聲高に笑ふ。

帽子屋。同じこつた、兄弟。姪のねえ人間は——伯父ぢやねえさ。

靴屋。閣下。新兵隊の休職鼓手殿。

教父夫人は金がある、

わしや一文の金もない——

その代りにはどこまでも、

わたしや可愛い戀男。

ぶるる。寒い。

人足ゾオブ入り来る。これより幕の終るまで、なほ三四の男女入り来る。これらの人々は、いづれも衣服を脱ぎて、寢床に横たはり、呻吟す。

人足。ブブノフ、なんだつておめえ逃げ出したんだ。

帽子屋。さあ、ここへ来て、坐れ。兄弟、何か歌はうぜ。おれの一番好きな歌でも……ええ。

韃鞨人。今は夜だ、寝る時だ。歌ふなら晝間歌へよ。

サチン。歌はしてやれ、殿下。おめえはまあこつちへ来いよ。

韃鞨人。『歌はしてやれ』——さうか。そいつはことだ……歌はれちやあことだ。

帽子屋。(韃鞨人の方へ行く) 殿下、手はどうだね、切られたのか。

韃鞨人。切られてたまるものか。もう少し様子を見るんだとよ……多分切らなくても済むらしいや……

…手は鐵で出来ちやゐねえ……切る分にやわけねえんだ。

人足。切るなあよくねえ。手がなくなつたらどうするんだ。おれ達の財産は手と肩ぢやねえか……手のねえ人間は——人間ぢやねえ。死んだも同然だ……さあここへ来ておれと一緒に一杯やれ。

饅頭賣。(入り来る) まあ、お揃ひだこと。ひどい天氣だねえ、表は。ぬかるみで。寒くて……あなたのお廻りさんはゐるか。おうい、署長さん。

巡查。ここにゐるよ。

饅頭賣。またあたしのジャケットを着てるね。一體何をしてるの。ああ、お前さん又飲んだね……しやうのない人だ。

巡查。ブブフの……誕生日なんだ……それに寒いし……ぬかるし。

饅頭賣。それはあたしが教へて上げるよ……何が『ぬかるし』だよ……もう好い加減にしてお寝よ。

巡查。(臺所の方へ歩きながら) 寝ろつて。好いよ……寝るよ……もう寝る時刻だ。(退場)

サチン。どうしておめえ……さうあいつに酷く當るんだ。

饅頭賣。ああするのが一番好いんだよ、お前さん。ああいふ男はなんでも厳しくしてやるに限るよ。

あたしや冗談で一緒になつたんぢやないんだよ。あの人は、あれで軍人形氣なんだよ……お前さん達のやうに唯亂暴なのは違ふよ……あたしは女だからね、とてもお前さん達の相手にはなれない

よ……だのに、あの人はもう飲み始めるんだ……しやうがないねえ。

サチン。そりや助手の選み方が悪かつたんだ。

饅頭賣。さうぢやない——あれで、あの人はなかなか好いんだよ……第一お前さんなら、あたしと一緒にやりやしまい。よしまあ、それを納得したところで——とても八日た續きやしまい……あたしの身の皮から髪の毛まで、骨牌で取られてしまふだらう。

サチン。(聲高に笑ふ) ちげえねえ。おれはおめえまで取られてしまふだらう。

饅頭賣。それはさうと、アリヨシカ。

靴屋。あいよ。

饅頭賣。おい——お前はあたしのことを何と言つてしやべつて歩いてるんだ。

靴屋。おれかい。色々によ、返事の出来ることなら、何でも彼でもしやべつた。あいつは女だつて。

恐ろしい女だつて。肉と骨と油とで——三十貫以上もあるんだつて。そして脳味噌は——一匁もねえんだつて。

饅頭賣。嘘をおつきよ、お前。あたしは立派な脳味噌を持つてゐるよ……だが、そんなことぢやない

よ——なんだつてお前は、あたしが巡查をぶつなんて言つて歩くんだい。

靴屋。おめえがああ男の髪の毛を搦つたりなんかするから……ぶつのも同じだと思つたんだ。

饅頭賣。(笑ふ) 馬鹿野郎。なんだつて内輪の恥をさらけ出すんだ……そんなことを言はれりやあ、

あの人だつて、好い氣持はしやしない……あの人か飲み出したのも、お前のおしやべりが積に障つたからだ。

靴屋。そら。そこで、靴鶏までが酒を飲むといふ諺がほんとになつて来るんだ。

サチンと錠前屋笑ふ。

饅頭賣。お前はなかなかしやれ者だねえ。一體お前は何の木に生つた實だい。

靴屋。おいらは世間に持てはやされる人間だ。飛切り上等の人間だ。目が向く方へ……氣が向くん

だ。

帽子屋。(鞆鞆人の寢床の上にて) さあ、みんな寝かしやあしねえぞ。けふは歌ふんだ……夜つびて歌んだ。どうだ、ゾオブ。

人足。歌ふよ。

靴屋。おれは弾いてやらあ。

サチン。したら、おれは聞いてやらあ。

鞆鞆人。(にやにや笑ふ) ぢやあ、悪魔ブブナ……一杯ついでくれ。『食ふべし、飲むべし——死の迫るまで』か。

帽子屋。ついでやれよ、サチン。ゾオブ。坐れよ。あはは、兄弟。人間仕合せになるにや幾らも入らねえもんだ。例へばおれだ——たつた二三杯やつつけたばかりで……この通りな浮かれやうだ。ゾオブ。始めろ……おれの一番好きな歌を。おれも歌はあ……さうして泣かあ。

人足。(唄ふ)

夜でも晝でも。

帽子屋。(唄に加はりて)

牢屋は暗い。

戸烈しく突きあけらる。

男爵。(闕に立ちて叫ぶ) おい……みんな、早く来い……早く出て来い。明き地で……役者が……首を縊つたぞ。

沈黙。一同、男爵を凝視す。男爵のうしろより、ナスチャ現れ、眼を大きく見張りながら、そろりそろりと机の方へ歩む。

サチン。(小聲に) 馬鹿め……折角の歌をだいなしにしてしまやがった。

昭和七年八月一日印刷
昭和七年八月十日發行

世界名作文庫 三一〇

ど ん 底

定價金拾五錢

翻譯者 小山内 薫

發行者 和田 利彦
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷者 木呂子 斗鬼次
東京市日本橋區通三丁目八番地

印刷所 常磐印刷所
東京市小石川區御訪町五六番地

檢 印



發行所

東京・日本橋・通三丁目
振替東京一六一七番

春 陽 堂

電話日本橋 五一、六四一番

世界名作文庫總目錄

英國篇

13	嵐が丘 前篇	大和實夫 譯	近刊
12	戀愛双曲線 後篇	永松完 譯	近刊
11	戀愛双曲線 前篇	永松完 譯	近刊
10	シーザーとクレオパトラ	楠山正雄 譯	、二〇
9	デビッドの生立ち 4	矢口達 譯	近刊
8	デビッドの生立ち 3	矢口達 譯	近刊
7	デビッドの生立ち 2	矢口達 譯	近刊
6	デビッドの生立ち 1	矢口達 譯	近刊
5	深き淵よりの叫び	平田禿木 譯	近刊
4	革命婦人	内田魯庵 譯	近刊
3	かちん騒ぎ	坪内逍遙 譯	近刊
2	まちがひつゞき	坪内逍遙 譯	、二〇
1	マクベス	坪内逍遙 譯	近刊

15	嵐が丘 後篇	大和實夫 譯	近刊
14	カスターブリッジの市長	宮島新三郎 譯	近刊

佛蘭西篇

114	「絶對」の探究	水野亮 譯	近刊
113	放蕩親爺 前篇	永戸俊雄 譯	近刊
112	放蕩親爺 後篇	永戸俊雄 譯	近刊
111	アルマン	前川堅市 譯	近刊
110	赤と黒 1	佐々木孝丸 譯	近刊
109	赤と黒 2	佐々木孝丸 譯	近刊
108	赤と黒 3	佐々木孝丸 譯	近刊
107	赤と黒 4	佐々木孝丸 譯	近刊
106	ノートルダムの僂僕男 1	江間俊雄 譯	近刊
105	ノートルダムの僂僕男 2	江間俊雄 譯	近刊
104	ノートルダムの僂僕男 3	江間俊雄 譯	近刊
103	サランボオ	生田長江 譯	、四〇
102	ルゴン家の人々	吉江喬松 譯	近刊
101	カレルメ	生田長江 譯	、二〇

129	吾等の心	高木安雄 譯	、三〇
128	小間使の日記 前篇	岡野 譯	近刊
127	小間使の日記 後篇	岡野 譯	近刊
126	エス・ボナールの罪	岡野 譯	、二五
125	赤い百合	岡野 譯	近刊
124	フランズ短編集	石川淳 譯	近刊
123	フイリツプ短編集	吉江喬松 譯	近刊
122	葡萄島の葡萄作り	森田 譯	近刊
121	ドルヂエ伯の舞踏會	岸田國士 譯	、二〇
120	悪魔が淵	堀口大 譯	近刊
119	新譯巖窟王 前篇	田沼利男 譯	近刊
118	新譯巖窟王 中篇	三上於菟吉 譯	近刊
117	新譯巖窟王 後篇	三上於菟吉 譯	近刊
116	クラーメル	三上於菟吉 譯	近刊
115	テ	佐々木孝丸 譯	近刊

日本小説文庫目録

12	淀	君後篇	三上於菟吉	三五六
11	淀	君前篇	三上於菟吉	三五六
10	第二の巖窟	白井喬二	一五四	四
9	紅蝠	蝠後篇	長谷川伸	三〇六
8	紅蝠	蝠前篇	長谷川伸	三〇六
7	井原西鶴	武者小路實篤	一〇二	二
6	さんど笠	子母澤寛	二〇四	四
5	隠亡	堀國枝	史郎	二五六
4	闇に開く窓	里見弴	三五六	六
3	關ヶ原	直木三十五	三五六	六
2	孤島の鬼	江戸川亂歩	三〇六	六
1	有憂華菊池寛			定價送料 三五六

26	愛	人前篇	細田民樹	三五六
25	陰	獸	江戸川亂歩	一〇二
24	新選組物語	子母澤寛	一五四	四
23	澤村田之助後篇	矢田挿雲	三〇六	六
22	澤村田之助前篇	矢田挿雲	三〇六	六
21	青	眉後篇	久米正雄	二五六
20	青	眉前篇	久米正雄	三〇六
19	砂繪呪縛後篇	土師清二	三五六	六
18	砂繪呪縛前篇	土師清二	三五六	六
17	時唐の唐人お吉	十一谷義三郎	三〇六	六
16	唐人お吉	十一谷義三郎	一五四	四
15	星旗樓秘聞	木村毅	二〇四	四
14	半七捕物帳 2	岡本綺堂	一〇二	二
13	半七捕物帳 1	岡本綺堂	一〇二	二

321	革命家の思出	前篇	大クロボトキン	二二五
316	革命家の思出	後篇	大クロボトキン	二二五
317	露西亞短篇集 1		森鷗外	近刊
318	露西亞短篇集 2		森鷗外	近刊
319	北極の記録		米川正夫	二〇〇
320	消されない月の話		米川正夫	二〇〇
321	その前夜		米川正夫	近刊

諸國篇

413	病院横丁の殺人犯	外二篇	森鷗外	一〇〇
412	幽霊		森鷗外	近刊
411	スバ	後篇	早坂二郎	二二五
410	スバ	前篇	早坂二郎	二二五
409	ジャングル	前篇	前田河廣一郎	二二五
408	二人畫工	外一篇	内田魯庵	近刊
407	死の勝利		生田長江	四〇〇
406	債鬼	外四篇	森鷗外	近刊
405	ジョングブリエル・ボルクマ		森鷗外	近刊
404	幽霊		森鷗外	二二五
403	スバ	後篇	早坂二郎	二二五
402	スバ	前篇	早坂二郎	二二五
401	血と砂	後篇	永田寛二	近刊
	血と砂	前篇	永田寛二	近刊

27	愛	人後篇	細田民樹	三五六
28	錢形平次捕物控		野村胡堂	二五六
29	虹の歌		長田幹彦	三五六
30	右門捕物帖	1	佐々木味津三	二五六
31	右門捕物帖	2	佐々木味津三	二五六
32	右門捕物帖	3	佐々木味津三	二五六
33	沈鐘と佳人		白井喬二	一五四
34	笑の王国		佐々木邦	三〇六
35	銀	河前篇	加藤武雄	二五六
36	銀	河後篇	加藤武雄	二五六
37	仇討五十三次		佐々木味津三	二〇四
38	愛憎の彼方前篇		中村武羅夫	三〇六
39	愛憎の彼方後篇		中村武羅夫	三〇六
40	戀愛黒點前篇		正木不如丘	三〇六
41	戀愛黒點後篇		正木不如丘	二〇四
42	草に祈る		櫻井忠温	一五四
43	女殺延命院		土師清二	三〇六
44	戸並長八郎前篇		長谷川伸	三〇六
45	戸並長八郎後篇		長谷川伸	三〇六
46	南國太平記前篇		直木三十五	三五六
47	南國太平記中篇		直木三十五	三五六
48	南國太平記後篇		直木三十五	三五六
49	清水の次郎長前篇		村松梢風	三〇六
50	清水の次郎長後篇		村松梢風	二五六
51	蛭川博士		大下宇陀兒	三五六
52	盲目の目撃者		甲賀三郎	二五六
53	菊一文		吉川英治	三五六
54	右門捕物帖	4	佐々木味津三	二五六

55	敵討雑記帳前篇		直木三十五	二五六
56	敵討雑記帳後篇		直木三十五	二〇四
57	蟲		江戸川亂歩	二〇四
58	蜘蛛	男	江戸川亂歩	三五六
59	太陽と隣人	前篇	十一谷義三郎	三〇六
60	太陽と隣人	後篇	十一谷義三郎	三〇六
61	浅草紅團		川端康成	二〇四
62	人間飢饉		村松梢風	三〇六
63	祖國は何處へ	1	白井喬二	近刊
64	祖國は何處へ	2	白井喬二	近刊
65	祖國は何處へ	3	白井喬二	近刊
66	祖國は何處へ	4	白井喬二	近刊
67	祖國は何處へ	5	白井喬二	近刊
68	祖國は何處へ	6	白井喬二	近刊
69	祖國は何處へ	7	白井喬二	近刊
70	半七捕物帳	3	岡本綺堂	一〇二
71	半七捕物帳	4	岡本綺堂	一〇二
72	日本嬢(フボシ)前篇		群司次郎正	二五六
73	日本嬢(フボシ)後篇		群司次郎正	二五六
74	侍ニツボン		群司次郎正	二五六
75	西南戦争前篇		平山蘆江	三〇六
76	西南戦争後篇		平山蘆江	三〇六
77	旗本退屈男前篇		佐々木味津三	二〇四
78	旗本退屈男後篇		佐々木味津三	二〇四
79	唐人船		平山蘆江	三五六
80	英五郎ふたり		子母澤寛	二〇四
81	投げ節彌之		子母澤寛	二〇四
82	逃げる旗本		子母澤寛	二〇四

96	艶麗風土記後篇	小島政二郎	二五六
95	艶麗風土記前篇	小島政二郎	二五六
94	獵奇の果	江戸川亂歩	二五六
93	清河八郎後篇	三上於菟吉	三五六
92	清河八郎前篇	三上於菟吉	三五六
91	日輪後篇	三上於菟吉	三〇六
90	日輪前篇	三上於菟吉	三〇六
89	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
88	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
87	一寸法師	江戸川亂歩	二五六
86	黄金假面	江戸川亂歩	三〇六
85	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
84	半七捕物帳	岡本綺堂	一〇二
83	島原美少年録	木村毅	二五六

110	相馬大作	額田六福	二五六
109	朱面組傳奇後篇	下村悦夫	三五六
108	朱面組傳奇前篇	下村悦夫	三五六
107	續右門捕物帖2	佐々木美津三	二五六
106	續右門捕物帖1	佐々木美津三	二五六
105	掌の上の悪魔	龍膽寺雄	一五四
104	珠壺	龍膽寺雄	一五四
103	痴人の愛	谷崎潤一郎	三五六
102	愛すればこそ	谷崎潤一郎	二〇四
101	諸國捕物帳	額田六福	三五六
100	一刀流物語	本山荻舟	一五四
99	忠臣藏八景	本山荻舟	一五四
98	白	鬼三上於菟吉	三五六
97	神風時雨組	佐々木味津三	三〇六

124	饗宴後篇	加藤武雄	三〇六
123	饗宴前篇	加藤武雄	三〇六
122	東洲齋寫樂	邦枝完二	二五六
121	大地に立つ後篇	野村愛正	二〇四
120	大地に立つ前篇	野村愛正	二〇四
119	綺堂讀物集5	岡本綺堂	二五六
118	綺堂讀物集4	岡本綺堂	二五六
117	綺堂讀物集3	岡本綺堂	二五六
116	綺堂讀物集2	岡本綺堂	二五六
115	綺堂讀物集1	岡本綺堂	二五六
114	風雲天滿双紙	佐々木味津三	三五六
113	松平長七郎青春記	下村悦夫	近刊
112	險の母	長谷川伸	二五六
111	杏掛時次郎	長谷川伸	二〇四

138	殺人鬼前篇	濱尾四郎	三〇六
137	決闘介添人	大下宇陀兒	二〇四
136	恐怖の齒型	大下宇陀兒	三五六
135	お傳地獄	鈴木泉三郎	二〇四
134	青春行狀記後篇	直木三十五	三五六
133	青春行狀記前篇	直木三十五	三五六
132	いたづら小僧日記	佐々木邦	三〇六
131	半七捕物帳11	岡本綺堂	一〇二
130	半七捕物帳10	岡本綺堂	一〇二
129	半七捕物帳9	岡本綺堂	一〇二
128	東京行進曲	菊池寛	三〇六
127	煙幕	櫻井忠温	三五六
126	心理試験	江戸川亂歩	一五四
125	天草美少年録	佐々木味津三	三五六

152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139
安城家の兄弟後篇	安城家の兄弟中篇	安城家の兄弟前篇	緑衣の聖母後篇	緑衣の聖母前篇	女 祕 書	接吻市場後篇	接吻市場前篇	吉良家の人々	鳩笛を吹く女	かんく蟲は唄ふ	江戸城心中後篇	江戸城心中前篇	殺人 鬼後篇
里見 稔	里見 稔	里見 稔	長田 幹彦	長田 幹彦	丸木 砂土	邦枝 完二	邦枝 完二	森田 草平	吉屋 信子	吉川 英治	吉川 英治	吉川 英治	濱尾 四郎
近刊	近刊	近刊	三〇六	三〇六	二五六	三〇六	三〇六	近刊	三〇六	二五六	三〇六	三〇六	三〇六

166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155	154	153
祇園小唄 2	祇園小唄 1	太陽のない町	支 那	木曾路の鴉	近世侠客げなし	銃 後	新編乃木將軍	由 利 旗 江	螢 草後篇	螢 草前篇	生きとし生けるもの	心驕れる女後篇	心驕れる女前篇
長田 幹彦	長田 幹彦	徳 永 直	前田河廣一郎	子母澤 寛	子母澤 寛	櫻井 忠温	櫻井 忠温	岸田 國士	久米 正雄	久米 正雄	山本 有三	佐藤 春夫	佐藤 春夫
近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	近刊	三〇六	二〇四	三五六	三〇六	三〇六	二五六	二〇四	二〇四

172	171	170	169	168	167
木 賊 の 秋	荒野の祕密	假面の輪舞外四篇	殺人狂想曲外二篇	祇園小唄 4	祇園小唄 3
正木 不如丘	甲賀 三郎	佐々木 俊郎	水谷 準	長田 幹彦	長田 幹彦
近刊	近刊	四	近刊	近刊	近刊

春陽堂文庫既刊書目

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
金色夜叉	藤村詩集	新新生第一卷	新新生第二卷	それから	相互扶助論	河内山と直侍	三人吉三	村井長庵	倫敦塔・その他	三郎枕	草枕	土坊ちやん	虞美人草	瀧口入道	
尾崎紅葉	島崎藤村	島崎藤村	島崎藤村	夏目漱石	大目漱石	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	河竹黙阿彌	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	長塚節	夏目漱石	夏目漱石	高山樗牛
五	五	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	二
八〇	八〇	六〇	六〇	六〇	六〇	六五	六五	六五	二〇	六〇	二五	六五	二五	六〇	四五

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17
近代の小説	松蘿玉液	多情多恨	出(まんじ)	春人服	三配	嵐・分	硝子戸の中	片戀外六篇	にこりえ	彼岸過迄	朝鮮	満韓ところづく	長塚節歌集	邪宗門	門葉狂言	照葉
田山花袋	正岡規	尾崎紅葉	谷崎潤一郎	芥川龍之介	尾崎紅葉	島崎藤村	夏目漱石	二葉亭四迷	樋口一葉	夏目漱石	高濱虚子	夏目漱石	長塚節	芥川龍之介	夏目漱石	泉鏡花
三	二	三	二	三	三	二	二	三	二	三	三	二	六	二	二	二
六〇	二〇	六五	四〇	六五	六五	二〇	二〇	六〇	四〇	六五	六〇	四五	八〇	二〇	六五	四五

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34
即興詩人	源義朝	北條霞亭	二人女・心の闇	田園の憂鬱	沓手鳥孤城落月	桐いに笑ふ淀君	柿二つ	春泥	刺青外六篇	異邦人	泥人形外二篇	あらくれ	田舎教師	蓼喰ふ蟲	五重塔外二篇	史劇論
森田山	森田山	尾崎紅葉	佐藤春夫	坪内逍遙	坪内逍遙	高濱虚子	久保田万太郎	谷崎潤一郎	島崎藤村	正宗白鳥	徳田秋聲	田山花袋	谷崎潤一郎	幸田露伴	坪内逍遙	
四	三	四	二	二	二	二	二	二	二	三	二	二	二	二	二	二
六〇	六五	六〇	四五	六五	二〇	四〇	六五	四五	四〇	六〇	六五	六五	六〇	四〇	四〇	四〇

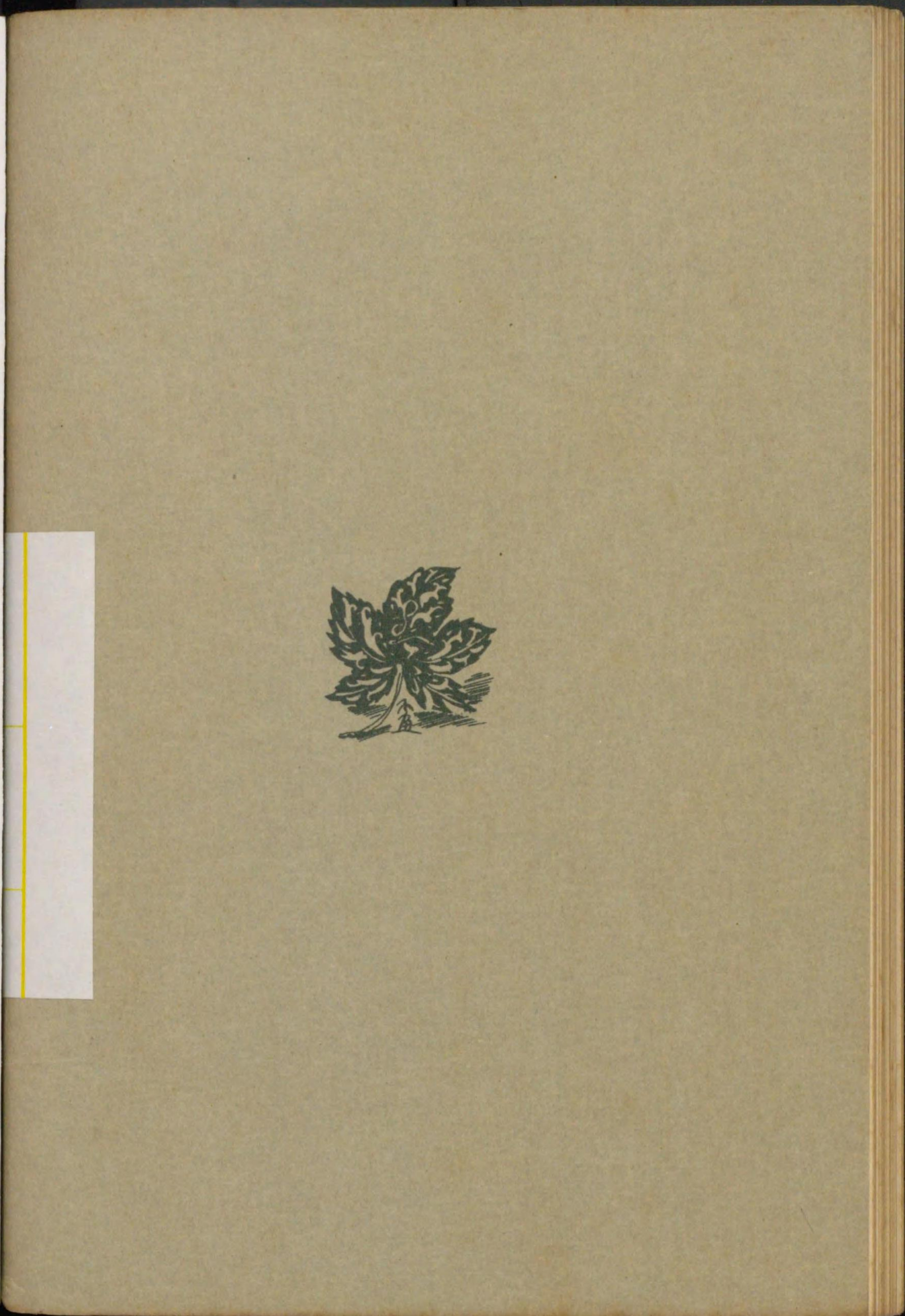
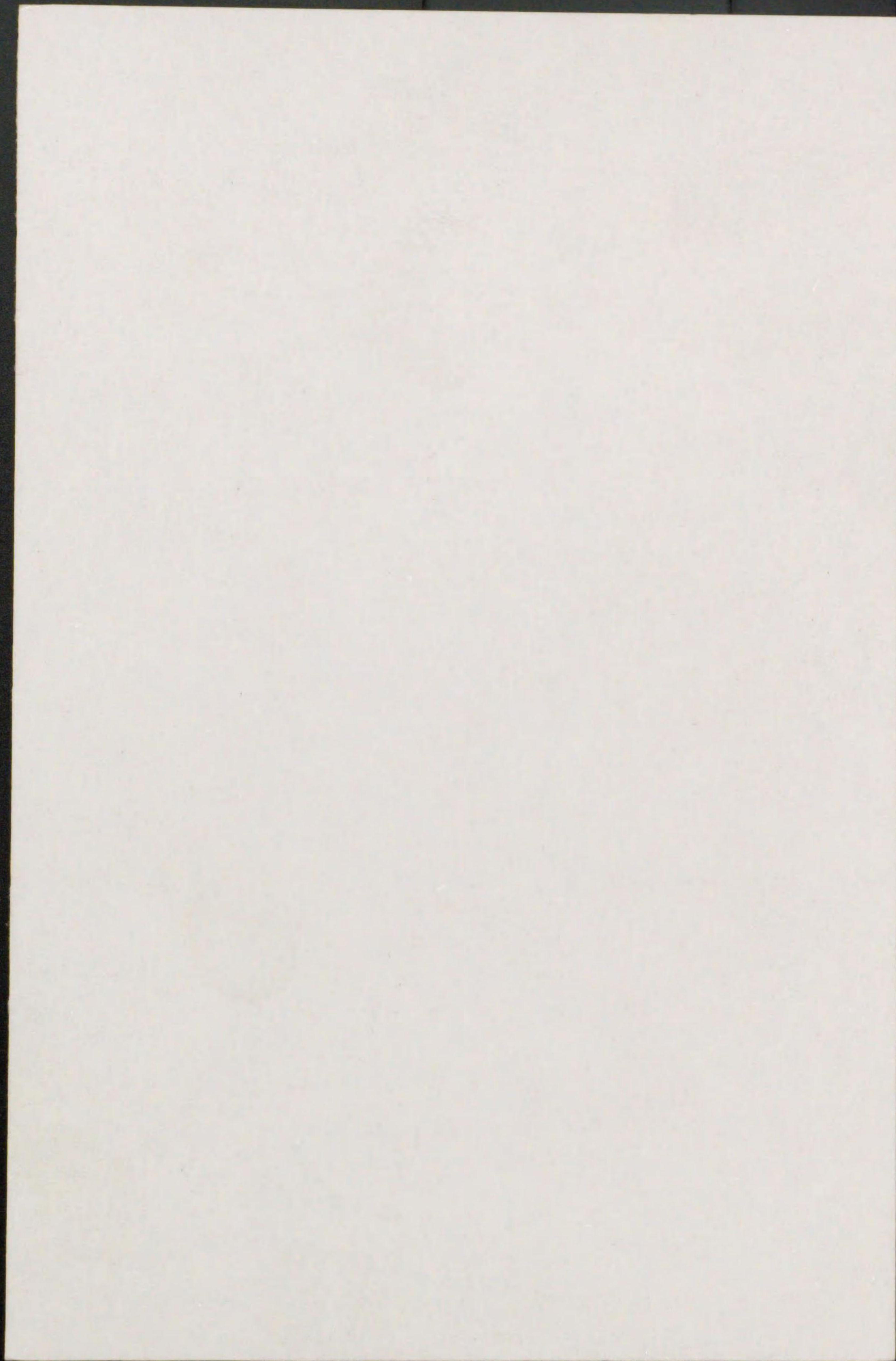
67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51
太陽は草の香するが	饒太郎	新遊朝者日記	西遊日誌抄	義時の最期	名残の星月夜	牧の星月夜	其面影	珊瑚集・附日和下駄	おかめ	捨てられる迄	水沫集下巻	水沫集上巻	多情佛心後篇	多情佛心前篇	不言不語	アメリカ物語
薄田泣菫	谷崎潤一郎	永井荷風	坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙	二葉亭四迷	永井荷風	永井荷風	谷崎潤一郎	森鷗外	森鷗外	里見弴	里見弴	尾崎紅葉	永井荷風	永井荷風
近	一	近	近	近	近	近	近	近	近	三	三	近	近	二	近	近
刊	四五	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	刊	六五	六五	刊	刊	二〇	刊	刊

79 77 71 70 69 68

犀 伽 思 小 影 チ
星 羅 ひ 説 燈 ロ
隨 枕 出 す 神 の
筆 枕 人々 髓 籠 秋

室 尾 内 坪 芥 岸
生 崎 田 内 川 田
犀 紅 魯 道 龍 國
星 葉 庵 遙 之 士

近 近 近 近 近 近
刊 刊 刊 刊 刊 刊

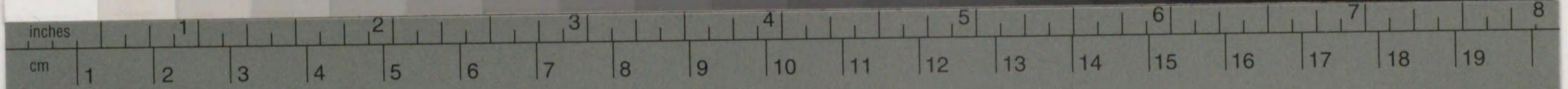


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

